



第11回
(2017年)

全国高校生 歴史フォーラム

園子甲歴地

集え全国の高校生
真実を掘り起こせ



発表集

目 次

は じ め に	審査委員長・奈良大学学長 清水 哲郎	2
審査結果の講評		3
審査結果 優秀賞		4
審査結果 佳作		5
優秀賞受賞レポート（高校コード表順に掲載）		
福島県立新地高等学校		7
研究グループ名：おもひ（い）の木プロジェクト 地理歴史班		
研究者名：高橋みき・濱野涼太・中野亮悟・太田萌子・星千夏・小賀坂美咲		
研究タイトル：東日本大震災 津波被災地 福島県新地町の大津波伝承について		
京都府立須知高等学校		23
研究グループ名：ウィード研究班		
研究者名：鈴木隆之介・藤村美月・水口皓太・東麻衣		
研究タイトル：日本近代農業教育の先駆け ～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～		
京都府立宮津高等学校		39
研究グループ名：フィールド探究部		
研究者名：櫻井二菜・藤原裕希		
研究タイトル：与謝郡与謝野町石川の歴史地理的特質 ―巡検と石刻文字から読み解く―		
長崎県立壱岐高等学校		55
研究者名：三尾駿		
研究タイトル：大村家墓所の研究 ～大村家16代当主純伊及び19代当主喜前の没年と 石塔造立年の不一致について～		
長崎県立壱岐高等学校		69
研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻（13回生）		
研究者名：江口幸希・木樽栓・滝川和遥・森進		
研究タイトル：長崎県壱岐市馬立（もうたる）海岸遺跡の研究		
第11回全国高校生歴史フォーラム 応募タイトル一覧		85

は じ め に

審査委員長・奈良大学学長 清 水 哲 郎

悠久の時を経て、その歴史を今も刻み続けている古都奈良。古代日本の中心として栄えた奈良には、当時の景観を今もなお目にすることができます。想像力をかきたてると、古代の壮大なロマンが脳裏をかすめ、歴史の豊かさと、文化の香りを感じることができます。

奈良大学のキャンパスは、このような奈良の地にあって、豊かな自然と歴史遺産・伝統文化が息づく古都奈良全てが学びのフィールドとなっています。隣接する関西文化学術研究都市では、新しい文化や新産業・最先端技術が次々と生み出されており、古代と最先端がクロスオーバーする地でもあります。

奈良大学には、現在文学部（国文学科・史学科・地理学科・文化財学科）と社会学部（心理学科・総合社会学科）、さらに大学院（文学研究科・社会学研究科）および通信教育部が置かれており、全国各地から多くの学生を迎えています。文学部では、古都奈良の歴史遺産と伝統文化という本物の研究素材を目の前に、多様な教育・研究が展開され、図書館には15万冊を超える文化財専門書がそろっており、日本屈指の歴史・文化財情報に関する知の拠点として国内外から注目されています。

今から10年前の2007年に、奈良大学は、多くの生徒にとっては「暗記科目」という印象が強い歴史や地理に、暗記ではなく、自分たちで調べ、考え、真実を発見するなど、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びを導入することで、歴史や地理を探究する醍醐味を実感してほしいとの願いから「全国高校生歴史フォーラム」を企画・開催しました。幸い私達の思いは、全国の高中生と、生徒の皆さんを指導しておられる先生方に届いて、準備期間や周知が十分でなかったにもかかわらず全国の22校から72編の応募がありました。

その後、応募校数は2015年度に62校、また応募点数では2014年度に269編という最大値を記録しています。過去11年間の平均では、参加校が43.4校、応募点数では111.5編となっており、嬉しいことにトレンド的には両者とも増加傾向を示しています。特に、2014年度からは奈良県との共催となり、本フォーラムの社会的認知度も高まることとなりました。昨年度は10周年という節目の年を迎え、参加校が43校、応募点数98編、今年度は参加校が57校、応募点数が116編を数え、それぞれ若干増加いたしました。全国から選り抜かれた優秀校に4校（5編）が、また佳作として5校が選ばれました。また、今年度から新設された奈良賞につきましては、残念ながら該当はありませんでした。

全国歴史フォーラムの開催にあたり、ご尽力を賜りました皆さまに心から感謝申し上げますとともに、ご指導にあたられた先生方と熱心に研究して応募された高校生の皆さんに、お礼の言葉を申し上げます。選考の経緯と結果につきましては、講評をご参照ください。

審査結果の講評

全国高校生歴史フォーラムは、今年で11回目の開催となります。今回は57校の高校から116編の応募がありました。いずれも皆さんの努力と熱意がこめられた力作が目白押しで、その中から数を限って優秀作品を選び出すのはたいへん悩ましい作業でした。

今回の応募作品は、近現代の日本史に関する研究が比較的多くを占めたように思います。その要因の一つは、明治・大正・昭和といった比較的近い過去の歴史資料が高校生の皆さんの身近なところにも豊富に残されているためでしょう。ただ、偶然身近にあった史料を整理しただけでは、人の心に残るような作品にはなりません。皆さん自身がその史料に何を語らせたのか、その時代の歴史的背景と重ね合わせて考えながら作業を進めてください。

とくに、高校のクラブ等の研究成果の場合、過去の応募作品の焼き直しにならないように気をつけていただきたいと思います。先輩・後輩間の世代を超えた共同作業も大切ですが、それだけに縛られず、自分自身で見いだした新しい研究課題に取り組もうという挑戦的な姿勢を忘れないでください。

また、江戸時代以前や外国の歴史は、史料収集やその読解の困難さから、どうしても専門性が高くなります。たとえ心ひかれるテーマがあっても、どうせ入賞は無理だからと諦めてしまっていないですか？高校生の皆さんにプロの研究者と競えとはいいません。大事なのは研究課題に対する熱意と努力です。古代史・中世史、あるいは外国史でも、わかることは徹底的に調べてやるという意気込みで力を尽くせば、入賞の可能性は十分にあります。

とはいえ、たとえ人一倍の情熱をもってあるテーマに取り組んだとしても、インターネットや一般向けの出版物ばかりに頼っていては、学問的な成果は生まれません。情報源の良否は研究の質に直接関わってきます。適切な取捨選択を心がけてください。

一方、収集データの分析にあたって専門の研究者の助言を仰ぐ必要が出てくるかも知れません。これは正確な情報を得るためには望ましいことといえます。ただし、分析の過程や意義について応募者が十分に理解しないまま、専門家の分析結果を貼り付けただけだとすれば問題です。あるいはそのような誤解を招かないためにも、応募者自身の言葉で平易かつ丁寧な説明を加える必要があるでしょう。

このほかに注意を要することとして、今回の応募作品にも、研究内容は優れていながら、文字数などの応募規定に適合しないものが複数ありました。応募の際には、いまいちど審査要件を熟読吟味し、規定違反がないことを確認したうえで提出していただきたいと思います。

最後に、本フォーラムでは、今年度から奈良県に關係する研究成果のうち、とくに優秀な作品を対象に「奈良賞」という賞を設けることになりました。今回は残念ながら該当作品がありませんでしたが、来年以降応募される場合はぜひともご留意いただきたいと思います。これぞという研究が現れるのを期待しています。

審査結果

優 秀 賞

(高校コード表順に掲載)



福島県立新地高等学校

研究グループ名：おもひ（い）の木プロジェクト 地理歴史班

研 究 者 名：高橋みき・濱野涼太・中野亮悟・太田萌子・星千夏・小賀坂美咲

研究タイトル：東日本大震災 津波被災地
福島県新地町の大津波伝承について



京都府立須知高等学校

研究グループ名：ウィード研究班

研 究 者 名：鈴木隆之介・藤村美月・水口皓太・東麻衣

研究タイトル：日本近代農業教育の先駆け
～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～



京都府立宮津高等学校

研究グループ名：フィールド探究部

研 究 者 名：櫻井二菜・藤原裕希

研究タイトル：与謝郡与謝野町石川の歴史地理的特質
―巡検と石刻文字から読み解く―



長崎県立壱岐高等学校

研 究 者 名：三尾駿

研究タイトル：大村家墓所の研究
～大村家16代当主純伊及び19代当主喜前の没年と
石塔造立年の不一致について～



長崎県立壱岐高等学校

研究グループ名：東アジア歴史・中国語コース歴史学専攻（13回生）

研 究 者 名：江口幸希・木樽栓・滝川和遥・森進

研究タイトル：長崎県壱岐市馬立（もうたる）海岸遺跡の研究

審査結果

佳 作

(高校コード表順に掲載)



埼玉県・昌平高等学校

研究者名：社会歴史研究部 村島杏佳

研究タイトル：慰霊のかたち
—慰霊行事を通して戦争を考える—



埼玉県・開智高等学校（中高一貫部）

研究グループ名：歴史研究同好会

研究者名：新井本光輝・林明日翔・川村裕大・米澤翼・黒田航生

研究タイトル：地域史料の保存・活用とファミリーヒストリー
本校寄託史料「山田家文書」をてがかりとして



神奈川県立秦野曾屋高等学校

研究グループ名：日本史研究部

研究者名：三川真慧・宗像滯

研究タイトル：霧社事件と原勝治



京都府立鴨沂高等学校

研究グループ名：京都文化コース研究会

研究者名：澤田有梨・後藤あゆみ

研究タイトル：京都からフランスの空へ
～忘れられた飛行家小林祝之助～



鳥取県立八頭高等学校

研究グループ名：因幡の傘踊り研究会

研究者名：谷田七海・入江友梨・北川梨央・小林愛花・藤原菜月・寺谷桜花・
波多野愛美・保木本怜奈・前田桃寧・山根千佳

研究タイトル：因幡の傘踊りの普及について



東日本大震災 津波被災地

福島県新地町の大津波伝承について



福島県立新地高等学校

おもひの木プロジェクト 地理歴史班

高橋みき・濱野涼太・中野亮悟・太田萌子・星千夏・小賀坂美咲



1. はじめに

新地高校は、福島県沿岸部北端の新地町(しんちまち) (資料^[1]参照、以下同)にある。6年前の東日本大震災(2011〔平成23〕年)で、町は津波におそわれ、私たちの先輩である当時の在校生9名が亡くなった。この地域は、これまで何度も津波におそわれている。

新地高校の校舎は貝塚史跡内に立地し^[2]、そばには新地貝塚^[3]がある。4000年前の縄文時代、この地に生きた人々がいた。彼らは亡くなると、「鹿狼(かろう)山」^[4]という山にその頭部を向け埋葬された。鹿狼山山頂には、「鹿狼神社」^[5]がある。千年前の東日本大震災ともいわれる貞観地震(869〔貞観11〕年)の18年後、887(仁和3)年に建立された。

人口約8000人の新地町は、東日本大震災で116人を亡くしている。869年の貞観地震でも、この地は津波におそわれ、村はほぼ消滅した。1611(慶長16)年の慶長奥州地震でも、当時この地を支配していた仙台藩などで5000人以上が溺死している。しかし、東日本大震災の前、新地町の住民の多くは、「この町に大津波は来ない」——そう、信じていた。実際には、1000年前にも、400年前にも、多くの命が失われたのにもかかわらずである。

なぜ、歴史が伝わらなかったのか。なぜ、21世紀のこの時代にも、多くの命が失われてしまったのか。その答えを探すため、新地町の歴史と地理について調べることにした。

2. 初期調査

(1)津波伝承と今に残る地名

まず、伝承と地名を調べた。『新地町史 自然・民俗編』(1993年発行。以下、『町史』)と、国土地理院発行2万5千分の1の地図(1972年測量、2008~2009年更新。以下、「地理院地図」)を活用した。最初に、『町史』の「大津波」の項目にある文章を抜き出し、地理院地図に地名があるかを確認した。(以下、斜字は引用、アンダーライン部分は地名)

A「地蔵森山(じぞうもりやま)」 福田(ふくだ)の地蔵森山(標高348m)の上に、御舟地蔵または船越地蔵と呼ばれる石の地蔵さまがある。この地蔵さまは、東へ4kmも離れた山ろくの船輪沢(ふなわさわ)というところに鎮座していたが、むかしこの地方が大津波に襲われたとき、船に乗ってこの山頂へ遷座したという。(後略)

B「小鯨(こくじら)」 明地(みょうち)に近いところに、小鯨というところがある。これは大津波のとき鯨(くじら)が寄ったところだという。

C「作田(さくだ)」 また新地駅の北の作田(さくだ)に八千山という小高い山がある。やはり大津波のときこの山に登って八千人(多勢の意)の人が命を助かったと伝えている。この山には山神さまがまつてあるが、常磐線開通(1895〔明治28〕年)のとき山を2つに掘り切ったので、山自体は原形をとどめていない。

A…「地蔵森山」①(地図中①参照、以下同)は、海岸線から6.4km内陸にある標高347.9mの山。東側山麓に「福田」②(大文字・小文字)がある。「船輪沢」は無い。

B…「小鯨」の地名は無いが、「明地」③は海岸線から3.8kmの場所にある。

C…「作田」④は、海岸線から1.4kmの場所にある。東西2キロ程度の丘陵地帯を含み、標高は30m以上ある。「八千山」の地名は無い。

(2)小字(こあざ)の調査

地理院地図にない小字の地名を住宅地図で確認し、地名を地理院地図に落とし込んだ。

A…「船輪沢」は「舟輪沢」⑤との表記で、海岸線から4.8kmの場所にある。

B…「小鯨」⑥は、海岸線から3.8kmの場所にある。標高は約20m。

C…「八千山」の表記は無かった。他の地図でも探したが無かったため、新地町役場で聞き取り調査をしたところ、「八千山」⑦は「作田」の丘陵の東端だと判明した^[6]。

(3)東日本大震災(2011年)における被災状況と初期調査時点での考察(津波浸水域は^[7]参照)

A地蔵森山…山頂に津波は到達していない。東日本大震災(以下、震災)の津波到達地点の最高標高は、岩手県宮古市田老地区の37.9mである。その約10倍の高さであり、過去の津波の到達も考えづらい。信憑性に欠ける伝承と思われる。

B小鯨…津波は、「小鯨」の約1km手前まで到達している。海沿いの町や建物、国道6号線などの障害物が無ければ、過去に津波が到達した可能性がある。

C作田…津波は、丘陵周辺の低地をおそった。東端の「八千山」から500mほど南のJR新地駅^[8]も津波におそわれている。「作田」自体も、海に浮かぶ小島のような形になった。また、「八千山」の頂上部分も、津波を回避できた。伝承どおり、過去にも「八千山」に逃れ、命を救われた人々がいたと考えられる。

3. 疑問点の考察

(1)「地蔵森山」山頂まで、本当に津波は来たのか？

標高348mである。どう考えても無理だ。調べると『町史』に別の記載^[9]があった。

(1)地蔵森の地蔵さま (前略) 昔御舟地蔵と称していた福田字舟輪沢の石地蔵を、大津波が押し寄せたとき村人が舟で山頂に移し祀(まつ)るようになったともいう。

この文章によれば、お地蔵さまを山頂へ運んだのは村人であり、津波が運んだわけではないことがわかる。町の遺跡担当者である佐藤祐太さんが、以下のような話をしてくれた。

地蔵は、かつて「二羽渡(にわたり)神社」⑨にあり、いつしか漁師たちが守り神として海岸近くに運び、祀っていた。しかし、大津波で地蔵が舟輪沢まで流され、それを村人が船に乗せて山頂まで運び、その山を地蔵森山と呼ぶようになった——ということだった。

お地蔵さまは、津波に流されて頂上まで移動したわけではない。『町史』の「大津波」の文章では誤解を招く。伝承が正しく残らないと、次の大津波に活かされないと思った。

(2)「八千山」の地名は、今後、伝わるのか？

「八千山」の地名は、地図に無かった。史料としては『口碑福田史』があった。しかし、震災の4年前に発行されたこの本の文章^[10]では、「昔話にある津波の八千山は、津波無ければ信用にならない。」や、「世人の話には大津波にて八千人よじ登ると語るも大津波などはなかった。」とあり、「八千山」が大津波に由来する地名であるという伝承が、完全に否定されていた。現在は、町の人たちの中に、「八千山」の名称と場所を知る人々がいる。しかし今、「八千山」は山としての存在は消え、道路となり、地名は地図から抹消された^[11]。

2011年も津波の浸水をまぬがれた「八千山」の地名は、このままでは消えてしまう。

4. 文字史料以外の調査

(1)地域の神社

2011年の震災では、津波の到達ラインぎりぎりの場所に、神社が多く建っていたという話を教えてもらった。そこで、新地町や近隣の神社^[12]について調べることにした。

新地町の南側に接する相馬市「原釜(はらがま)」⑩の高台には、過去の津波の到達点に建立されたという「津(つのみつ)神社」⑪がある。ここまで逃げれば津波にあわない、との伝承が残る。震災時も、津波がすぐ下まで到達したが、神社までは届かず、逃げてきた50人の人々も助かっている。では、新地町の神社はどうだったのだろう。

震災では、「埴浜（らちはま）」⑫の「水神社」⑬と「釣師（つるし）」⑭の「水神社」⑮が、津波で流された。埴浜も釣師も、海岸に面しており、津波で壊滅的な被害を受けた。その南側の海岸沿いには、「大戸浜」⑯の「熊野神社」⑰や「今泉」⑱の「塩釜（しおがま）神社」⑲もあるが、高台にあり、津波の被害は免れていた。「水神社」と「水神社」があった場所は、今も立ち入り禁止である。そこで、町役場の復興推進課の小野さんに現状をお聞きした。埴浜の「水神社」は、氏子の多くが移住した「作田」の高台に移転予定、釣師の「水神社」は、津波の到達しない福田の諏訪神社に合祀されたとのことだった。

(2)消えた神社

震災で無事だった大戸浜の「熊野神社」と今泉の「塩釜神社」は、大正時代の文献にはあるが、1779（安永 8）年の文献にはない^[13]。だが、大戸浜や今泉は、鎌倉時代からある地名である。古くからある地域に、江戸時代まで神社が存在しないのはおかしい。「熊野神社」や「塩釜神社」も、津波に流され、高台に移されたのだろうか。だとすれば、1779 年より前にこの地をおそった津波が原因かもしれない。では、いつの津波なのだろう。私たちは、次に、新地町の過去の地震や津波についての歴史を調べ、年表^[14]を作ってみた。

5. 新地町の地震と津波

(1)古代の地震

この地には、過去 6000 年の間に 7 回の大規模津波が発生している。縄文・弥生時代にも、津波の被害があったのだ。6 世紀には、現在の二羽渡神社近くに、雀塚古墳^[15]が築造される。二羽渡神社は、新地貝塚から見渡せる高台にある。「地蔵森山」のお地蔵さんは、もとはこの神社に鎮座していた。また、この地は古代から鉄の産地であり、7 世紀には製鉄工場が成立する。当時の製鉄遺跡^[16]は 24 を数え、多くの人々が住んでいた痕跡もみられる。

(2)貞観地震(869 年)

869（貞観 11）年 5 月 26 日の夜、貞観地震および大津波が発生する。2011 年の東日本大震災は、この平安時代の地震の再来ともいわれる。現在の新地町を含む陸奥国の溺死者は 1000 人との記録が残る。町の北に隣接する宮城県山元町^⑳で 2008 年に行われた津波堆積物調査によれば、当時の津波は海岸線から 1.5 km まで到達したという。新地高校の北方 6 km の海沿いに、2011 年の震災遺構である山元町立中浜小学校^㉑^[17]の旧校舎がある。津波は校舎 2 階天井まで押しよせた。当時の校長先生は高台まで逃げる時間がないと判断し、児童や地域の方々 90 人を屋上の屋根裏倉庫に上げ、そこで一晩を過ごし、命を守りとおした。

現代の私たちは、地震の後に津波が来ることを知っている。平安時代はどうだったのだろう。貞観地震の発生は夜だった。夜通し火を扱う製鉄工場は倒壊し、火事が起きたかもしれない。発掘調査の結果、この地では 9 世紀後半に突然、製鉄工場や住居が激減したという。平安時代の村は、貞観地震でほぼ壊滅状態となったのだろう。地震から 18 年後、鹿狼山の山頂に鹿狼神社^㉒が建てられた。古代も今も、海と生活圏を一望できる場所である。

この時期、国内では地震が連動している。貞観地震の 9 年後には相模トラフ（現在の東京付近）で、さらにその 9 年後には南海トラフで大地震が発生し、多数の死者を出した。

(3)慶長奥州地震(1611 年)

1589 年（天正 17）年以降、この地域は伊達氏の領地となり、幕末までその支配が続く。

1611（慶長 16）年 10 月 28 日、地震と大津波が発生した。津波による死者数は仙台領で 1,783 人、南部・津軽領で人馬 3000、相馬藩で約 700 人といわれる。この地震では旧浜街

道が被災。伊達政宗は、津波被災地を避けるようにして新しい道を整備した。道は、現在の国道 6 号線③にほぼ一致する。2011 年も、旧仙台藩領のうち津波が到達したのは、国道 6 号線より、ほぼ海側の地域だった。慶長奥州地震後、「埒（浜）」と「木崎」④地区が合併し、「埒木崎」⑤という地名が生まれた。埒浜は、当時も壊滅的な被害を受けたと思われる。救済措置として、内陸の丘陵地帯を含む「木崎」地区と合併したのかもしれない。時代は不明だが、こんな唄が残っている。「高瀬、高倉、浅生原、死ぬとも行くなよ宇多の埒浜」——。「高瀬」と「浅生原」は山元町の地区名、「高倉」は「木崎」地区をさし、水はけが悪く、生活しづらい地域だったという。その上で「埒浜」は、死んでも行くな、と唄われている。2011 年も、4 地区すべてが津波におそわれた。「埒浜」は、地区全域が壊滅している。この唄は、津波の際の警告ともとれるのではないのだろうか。

また、1779 年成立の『封内風土記』に、大戸浜の「熊野神社」と今泉の「塩釜神社」の記載がない。これらの神社が流されたとなると、慶長奥州地震の津波である可能性が高い。

(4)神社と津波の関係

「塩釜神社」の 3 km 南に、前述した「津（つのみつ）神社」がある。この神社は 1528（享禄 2）年に別の場所に建立され、1697（元禄 10）年に移転したという。“津波”にまつわる神社とのことだが、1697 年は、慶長奥州地震から 80 年以上も後のことである。そのため、津波の歴史を忘れないために建てられたのかは不明、とのことだった。

だが、年表を作る中で、1677（延宝 5）年に、相馬藩の南に隣接する磐城平藩や泉藩で津波が発生していたことがわかった。2450 人が亡くなったと言われ、現在のいわき市泉には、1696（元禄 9）年に建立された石碑もある。これは「津神社」が現在の地に移転した前年である。相馬藩の誰かが、隣藩の津波の話聞き、慶長奥州津波の伝承を思い出したのかもしれない。そして「津神社」を、1697 年に津波到達点の上に移転した、とも考えられないだろうか。「津神社」から北に 3 km 行くと、今泉の「塩釜神社」がある。そこから 2.2 km 北に行くと、大戸浜の「熊野神社」がある。これらの神社も、慶長奥州地震の津波で流され、誰かが津波到達点の上に再建したのかもしれない。そして 2011 年 3 月 11 日、この 2 つの神社は、避難してきた人々の命を、大津波から守りとおした。

(5)明治三陸地震(1896 年)

1896（明治 29）年 6 月 15 日、岩手県を中心とした北海道・東北地方で地震と津波が発生。最大震度 3 という比較的小さな揺れにもかかわらず、津波の最大打ち上げ高は 38.2m に達し、死者 21,959 名という甚大な犠牲を出した。新地町での死者はいない。

(6)昭和三陸地震(1933 年)

1933（昭和 8）年 3 月 3 日、午前 2 時 32 分ごろ、三陸沖で発生した地震により、太平洋岸全般に津波が起きた。岩手県綾里湾では津波の高さが 24m に達し、三陸沿岸一帯で死者 3,064 人を出した。この地域にも 1~2m の津波が襲来した。新地町での死者はいない。

(7)チリ地震(1960 年)

1960 年 5 月 23 日、南米沿岸のチリで地震発生。17,000 km 離れた場所で生じた津波は、翌日 24 日の午前 5 時ごろ、日本の太平洋岸一帯に到達した。国内で地震は観測されなかったが、最大 6.1m の津波が各地をおそい、死者・行方不明者は 142 名にのぼった。新地町に隣接する相馬市松川浦では、3.6m の津波が襲来している。福島県では、4 名が死亡した。

「津波が来るときは必ず潮が引く。それから避難しても遅くはない」という間違った言い

伝えがある。新地町でも、当時、この認識は広まっていたようである。『町史』に、当時の住民が引き波を見に行ったという話が残っていた（資料 [18] 参照）。そこで、引き波の時にだけ見える「鬼石」や海に沈んだという「塩釜神社」の記載があった。この文章からは、津波への危機感や高台へ逃げることへの切迫感が感じられなかった。見方によっては、奇跡的に「鬼石」や「塩釜神社」の跡を見たという、“武勇伝”とも読めてしまう。

また、驚いたことに、江戸時代に消えていた「塩釜神社」の話があった。今泉地区の海の下に、神社と以前の集落があったのである。それらが伝承として残っていたのだ。おそらく、鎌倉時代から 1611 年の間に建立され、集落もあったのだろう。それらが海に沈んでいる。慶長奥州津波により沈んだのだろうか。チリ地震での新地町での死者はいない。

(8)東北地方太平洋沖地震(東日本大震災、2011 年)

2011 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分に地震発生。新地町への大津波到達は 15 時 40 分。地元の方によれば、チリ地震の時のように引き波を見に行き、亡くなられた方がいたかもしれないとのことだった。町域の 5 分の 1 が壊滅、116 名が亡くなられた。2017 年 3 月現在、この地震による日本全体での死者 19,533 名、行方不明者 2,585 名、避難者約 90,000 名。

5. 結論——歴史が教えてくれたこと

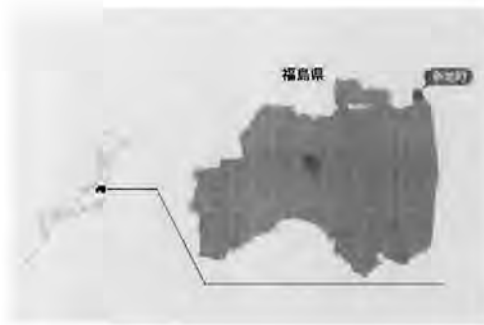
震災前、「この町に大津波は来ない」と信じた人たちがいた。その理由が、少しだけ理解できた。新地町に大津波が到達したのは、400 年前と、約 1000 年前だ。三陸地域のように、50 年に一度は犠牲者が出る地域とは異なる。あまりに昔のことだったため、伝承も薄れ、大津波の歴史そのものが否定されかけていた。さらに、引き波の時に見える、海に沈んだ「鬼石」や「塩釜神社」が見たいという好奇心から、海に向かった人がいたのだ。そんな中、私たちは、津波の残酷さを目の当たりにした。これから数十年は、経験者たちが、震災を伝えてくれるだろう。でも、その後は？ 誰かが津波の歴史を否定し、大津波など無かった、大津波など来ない、という伝承が生まれてしまう可能性だってあるのだ。

私たちは震災の時、小学生だった。教室で震度 6 の揺れが続き、机の下で泣いていた。担任の男の先生が、私たちを安心させるようにと、「森のくまさん」を歌い続けていてくれたことを覚えている。新地町には、あまりに辛すぎて、当時のことを話すことができない人もいる。そんな人に、「歴史を伝えるために、話してください」と強要するのは、あまりに酷な話だ。だからこそ、私たちのように、歴史を伝えられる人間が必要なのだ。あの日から私たちは、数多くの人たちに助けられた。今度は、私たちが、誰かを助ける番だ。

新地高校は、新地貝塚史跡の上に建っている。隣には、新地貝塚附手長明神社跡がある。この貝塚自体、古代の津波の後の高台移転で、この地に移ってきた可能性があるという。今年、高校の中庭に「おもひの木」[19]が植えられた。津波で犠牲になった先輩たち 9 名のことを忘れないようにと植えられた、沙羅（しゃら）の木 [20]だ。私たちは時々、この木の前に立ち、手を合わせる。その場所から、鹿狼山も見える。古代の人たちも、この山を振り仰いだだろう。そしてそこにも、地震や津波で、辛い思いをした人がいたかもしれない。

「歴史学は生きている。我々の命をも守りうる、現代に必要な学問である」と、歴史学者の磯田道史さんが書いていらした。私たちに、今、何ができるだろう。今後、大津波が想定される南海トラフ地域で、自分たちの経験を話せないだろうか。新地町に、地蔵森のお地蔵さんや八千山など、古来からの津波の歴史を伝える石碑をつくれなければならないだろうか——。

今、何かができるのは、2011 年の東日本大震災を生きのびた、私たちだけなのだから。



資料1 新地町

町は一辺約 7 kmのほぼ四角形であり、人口は 8,264 人 (2017 年 6 月時点)。北は宮城県山元町、南は福島県相馬市、西は宮城県丸森町と接する。東は太平洋に面し、西には標高 400mほどの山々が連なる。海と山の間に、低地となだらかな丘陵地帯が広がっている。

資料2 貝塚西遺跡内にある新地高校



資料3 新地貝塚



新地貝塚は、国指定史跡である。町内の三貫地貝塚では、発掘調査が実施され、100 体以上の遺骨が見つかった。遺骨のほとんどは、頭部を鹿狼山 (標高 430m) に向けて埋葬されていた。鹿狼山は、今でも、地域の人たちの信仰を集める山である。

資料4 鹿狼山 (新地高校より撮影)



資料5 鹿狼神社(887 年建立、地図中㉔)



鹿狼山の頂上は、神社を守るような形で、北側だけ植林されている。独特なその姿は、町の人々の誇りでもある。貞観地震および大津波の発生は、869 年の旧暦 5 月 26 日、新暦なら 7 月 13 日である。当時も、夏の日差しのもと、稲が青々と育っていただろう。だが津波により、低地にある田畑は、ほぼ全滅したと思われる。家族や家、田畑や製鉄工場を失い、人々は絶望の淵にたたされたかもしれない。この地を放棄して、別の場所に移住したとしてもおかしくない。人口が激減したこの地で、山頂に神社を建立するということは、現代の私たちが考えるより、はるかに難しいことだったと思う。



This is a detailed topographic map of the area around Niigata City, Japan. The map shows the city limits of Niigata City (新潟市) and surrounding areas. Key features include:

- Mountains:** Several mountains are labeled, including Mount Niigata (新潟山), Mount Utsunomiya (宇都宮山), and Mount Maebashi (前橋山).
- Rivers:** The Niigata River (新潟川) is prominent, flowing through the city. Other rivers shown include the Utsunomiya River (宇都宮川) and the Maebashi River (前橋川).
- Landmarks:** The Niigata Prefectural Office (新潟県庁) and the Niigata Prefectural University (新潟県立大学) are marked. The Niigata Prefectural Stadium (新潟県立体育館) is also indicated.
- Transportation:** The map shows the Niigata Railway (新潟鉄道) and the Niigata Expressway (新潟自動車道).
- Other Labels:** Various other locations are labeled, including Utsunomiya City (宇都宮市), Maebashi City (前橋市), and the Niigata Prefecture (新潟県).

The map is oriented with North at the top.

(※東日本大震災以前の地図)



資料6 大津波伝承がある地名の地図記載状況（2017〔平成 29〕年現在）

地理院地図	住宅地図	記載なし
福田（大字・小字）・地藏森山・明地・作田	船輪沢・小鯨	八千山

資料7 新地町・津波浸水域
（『新地町 震災と復興
50 年後の新地人へ』より）

※薄い部分が浸水区域。
海沿いの濃い部分は
家屋があった場所。
新地町では、476 の
家屋が全壊した。



資料8 震災時の新地駅⑧と電車（『新地町 震災と復興 50 年後の新地人へ』より）



停車中の車内にいた 40 人の乗客は、偶然乗り合わせた若手警察官 2 人の誘導により高台に避難し、無事だった。駅員ら 3 名は、写真左手奥の跨線橋（こせんきょう）に避難し、翌日救助された。

資料 9 地蔵森山

(1)地蔵森の地蔵さま

「慈覚大師、地蔵尊を刻み安置奉る」(『村内旧説記』)とも、また昔御舟地蔵と称していた福田字舟輪沢の石地蔵を、大津波が押し寄せたとき村人が舟で山頂に移し祀(まつ)るようになったともいう。地蔵森の地名も山頂に地蔵さまを祀ったために名付けられたものと思われ、現在もお堂の中に六躰の尊像が安置されている。

この地蔵の垂迹は愛宕権現といい、役の行者が愛宕山に登る途中で感得したといわれるのが將軍地蔵であるが、この地蔵も前掲書には將軍地蔵と記されている。

縁日は旧三月一八日と六月二十四日。地元の沢口を中心に毎年祭りをし、特に子どもが病気にかからないようにと、地蔵さまに上げてある茶碗を借り受け、それで食事をさせると丈夫になるといい、その折は倍返しをしてお礼参りをするものとしている。

釣師・磯浜の漁師は、漁の目印の標山として地蔵森を神聖視し、毎年祭には参詣を欠かさなかったという。隣接する羽山神として信仰されている兎狐山(別名五社壇、南には鹿狼山がある)と連なっており、いずれも信仰の山として意味を持つ。



地蔵森①



山頂のお地蔵さま



二羽渡神社⑨

資料 10 『口碑福田伝』より

(6巻) 「八千山」 天正 18 (1590) 年 4 月 23 日、相馬義胤盛胤父子新地城を攻めるも勝利をすることなく退く。この戦いに相馬勢多数八千山をよじ登れば八千山(合戦山)の地名となる。昔話にある津波の八千山は、津波無ければ信用にならない。

(7巻) 「八専山」 作田は(中略)、東端は八専山である。古人の話しに作田に九万八千堂有りと語る。熊野堂と八専堂とを語り、世人の話には大津波にて八千人よじ登ると語るも大津波などはなかった。(原文ママ)

資料 11 八千山⑦の現状



右側の高台が、現在の八千山跡地である。1895 (明治 28) 年開通の JR 常磐線の線路敷設時、八千山は削られた。その跡地は線路脇の高台となり、2011 年まで住宅が一軒あった。しかし、震災後、駅や線路を内陸側に移動する工事が行われ、八千山跡地はさらに削られた。現在、津波により流された JR の線路跡は、写真のような道路となり、かつての住民も転居した。現在は、無人の地である。

資料 12 新地町近郊の海沿いの神社



津神社⑪（相馬市原釜）



熊野神社⑬（大戸浜）



塩釜神社⑭（今泉）

資料 13 江戸時代と大正時代の神社比較

地区名	『封内風土記』（1779〔安永 8〕年）	『福島県神社並神職名簿』（1918〔大正 7〕年）
駒ヶ嶺	神明宮 八幡宮 熊野神社 諏訪神社 稲荷社 羽山権現社 雷神社 山神社 十二处権現社 子眉峰神社（式内社）	神明神社 八重垣神社 熊野神社 諏訪神社 山神社 子眉峰神社（式内社） 富森神社 厳島神社 白鳥神社 愛宕神社 大神社 秋葉神社
谷地小屋	八幡社 愛宕神社 水神社二社	八幡神社 愛宕神社 水神社二社 津野神社
杉目	大槻明神社 明神社 叶神社 鹿狼権現社 春日神社 八龍権現社 羽山権現社 水神社	大槻神社 鹿狼神社
小川	二渡権現社 手長明神社	二羽渡神社 手長明神社 山神社
大戸浜	なし	熊野神社 安波神社
今泉	なし	塩釜神社
福田	諏訪神社	諏訪神社
埒木崎	熊野神社 牛頭天王社	熊野神社 八重垣神社（旧牛頭天王社） 水神社
真弓	水神社 羽山権現社	水神社

「熊野神社」と「塩釜神社」は、『福島県神社並神職名簿』（1918〔大正 7〕年）に記載があるものの、江戸時代の文献『封内風土記』（1779〔安永 8〕年）にはみえない。

資料 14 新地町の地震と津波の歴史

時期	新地町の状況	その他の地域
B.C.2000 年ごろ 紀元前 18 世紀ごろ 紀元前 11 世紀ごろ 紀元前 6 世紀ごろ 紀元 1 世紀ごろ 紀元 6 世紀ごろ 7 ～ 9 世紀 7 世紀末ごろ 869 (貞観 11) 年 878 (元慶 2) 年 887 (仁和 3) 年 9 世紀後半 1528 (享禄 2) 年 1589 (天正 17) 年 1605 (慶長 9) 年 1611 (慶長 16) 年 1630 (寛永 7) 年 1677 (延宝 5) 年 1696 (元禄 9) 年 1697 (元禄 10) 年 1703 (元禄 16) 年 1707 (宝永 4) 年 1779 (安永 8) 年 1854 (嘉永 7、安政 元) 年 1876 (明治 9) 年	縄文時代 貝塚近くで人々が生活 大津波発生 大津波発生 大津波発生 大津波発生 雀塚古墳、木崎・高塚古墳群築造 製鉄業隆盛。村の存在が確認される 陸奥国「宇太郡」設置 貞観地震・津波発生 現在の新地町 を含む陸奥国の溺死者 1000 人 「鹿狼神社」建立 製鉄工場衰退。消滅の可能性も 伊達政宗が相馬氏との合戦に勝利。 仙台藩による支配確定 慶長奥州地震・津波発生 陸奥地域 の死者 5,000 人以上 このころ、「埴」と「木崎」が合併 この頃成立の『封内風土記』に、大 戸浜・今泉地区の「熊野神社」「塩 釜神社」の記載なし 宮城県内の宇多郡 9 か村 (現・新地 町) が福島県に編入、宇多郡新地村 が発足	※宮城県沖地震における重点的調 査観測 (文部科学省、2005～2009 年) により、大津波の痕跡確認 相模トラフ (現在の東京付近) で 大地震発生 南海トラフで大地震発生 現在の相馬市原釜に「白狐明神」 (のちの「津神社」) 建立 慶長地震 (南海トラフ) 磐城藩 (現・いわき市) で地震・ 大津波発生、死者 2,000 人以上か 泉藩 (現・いわき市) で津波犠牲 者追悼のための石碑建立 相馬藩の「白狐明神」が「津神社」 と改称し現在地に移転 元禄地震 (相模トラフ) 宝永地震 (南海トラフ) 安政南海・東海地震 (南海トラフ、 「稲むらの火」の逸話)

1896（明治 29）年	宇多郡と行方郡が合併、相馬郡発足 相馬郡新地村となる 明治三陸地震 （町の死者 0 名）	
1923（大正 12）年		関東大震災（相模トラフ）
1933（昭和 8）年	昭和三陸地震 （町の死者 0 名）	
1944（昭和 19）年		昭和東南海地震（南海トラフ）
1946（昭和 21）年		昭和南海地震（南海トラフ）
1954（昭和 29）年	新制新地村（新地・駒ヶ嶺・福田村 が合併）成立	
1960（昭和 35）年	チリ地震 （町の死者 0 名）	
1971（昭和 46）年	新地町成立	
1995（平成 7）年		阪神淡路大震災（直下型地震）
2011（平成 23）年	東日本大震災（東北地方太平洋沖地 震）・津波発生 （町の死者 116 名）	

資料 15 雀塚古墳



資料 16 製鉄遺跡群（武井地区）



資料 17 中浜小学校②



資料 18

○鬼石○

わたしは磯山のときわ館で育ったから、ほとんど海をみて暮らしていた。（中略。チリ沖地震による津波が来た）日は晴天で、午後六時ころ津波警報が出ていたが、早朝から潮のタデヒキがなんとなく不穏だった。午後九時過ぎに家にいたが、鬼石が見えるというので外へ出てみた。鬼石は磯山の沖にある暗礁の中の大岩で普段は水面下に没して見えない。干潮のときその石の辺りに水が渦巻いているくらいで、それもよほど注意していないとわからない。埴浜の海岸は暗礁が多く漁船の出入りが困難で、むかしから漁は行っていない。

わたしが見たのは、何回目かの引き潮だったらしい。鬼石が見えるぞーというので近所の人たちと出て見ると、海岸のはるか向こうに黒々とした石が立っている。そこまで駆け足で走って行った。石の根元は波が渦巻いて深く掘られているので近寄れない。石が全体像を表すのは何百年に一回かもしれないと思った。（中略。海岸付近から）石まで約 210m あった。息子が撮った名刺判の写真をもとに、海中から出現した石の全景を絵にして保存してある。（中略）そのとき、大波がきて遭難するかもしれないなどは、少しも考えていなかった。

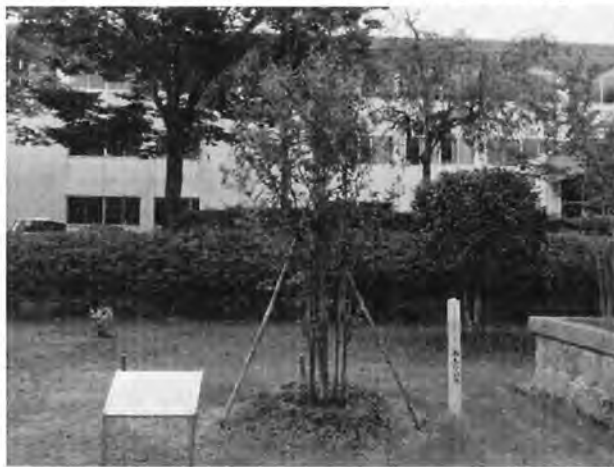
（埴浜の住民談）

○塩釜神社の井戸○

その日は朝早く、(中略) 浜畑の自宅へ帰っていると、第二回目の大波がきて、防波堤を越え田に入った。潮がずっと沖まで引けたとき、100mばかり沖へ歩いて行ったら、径90cmばかりの井戸の跡があって、魚がウヨウヨたまっていた。ここに塩釜神社があったということは、むかしから聞いていた。砂浜の後退が著しいので、いまの集落ももっと前方にあったという。すぐ折り返し大波がくるものと用心していたが、近所の人で沖へ出て危うく波にさらわれかけた人がいた。(相馬市) 磯部と原釜間の波打ち際を歩いていて、一人亡くなったという。
(今泉の住民談)

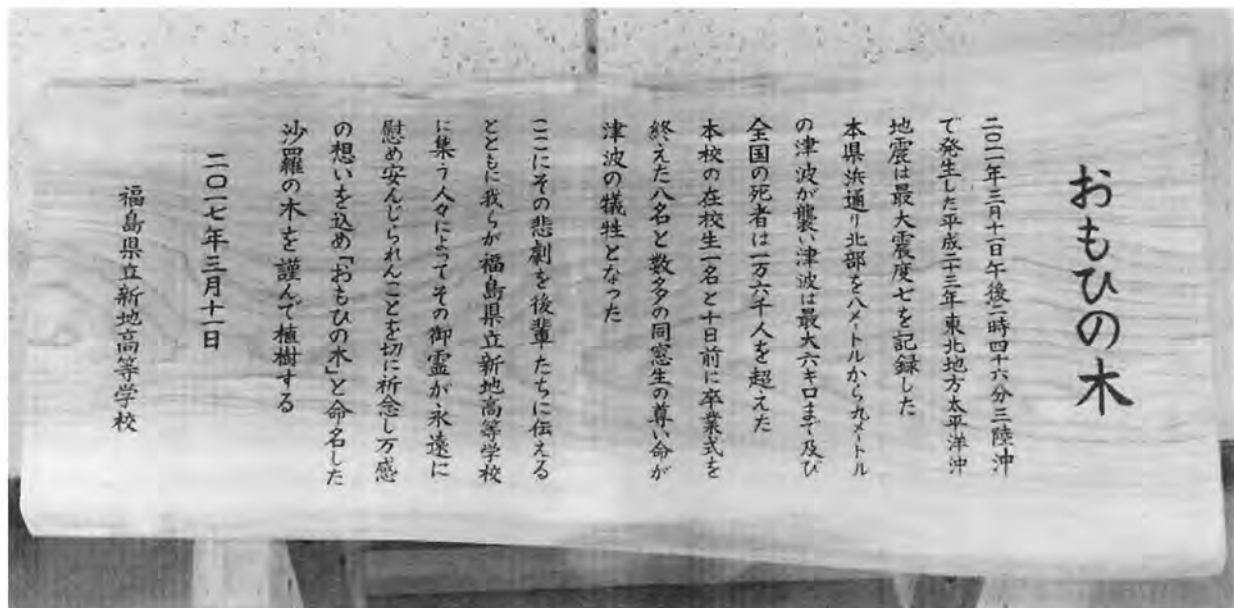
資料 19

新地高校中庭に植えられた「おもひの木」



資料 20

「おもひの木」植樹式写真等



「おもひの木」解説板

○参考文献

- 『新地町史 自然・民俗編』(新地町教育委員会 1993〔平成5〕年発行)
- 『新地』・『丸森』 国土地理院 25000 分の 1 の地図
(1972〔昭和47〕年測量・『新地』2009〔平成21〕年更新、
『丸森』2008〔平成20〕年更新)
- 『福島県神社庁相馬支部 管内神社誌』(福島県神社庁相馬支部 2016〔平成18〕年)
- 『新地貝塚附手長明神社跡保存管理計画書』(新地町教育委員会 2004〔平成16〕年)
- 『三貫地貝塚 福島県立博物館調査報告第17集』(福島県立博物館 1988〔昭和63〕年)
- 『新地町・震災と復興 ―50年後の新地人へ―』(新地町企画振興課 2014〔平成26〕年)
- 「新地町の復旧・復興状況 2017年7月20更新」(新地町復興推進課 2017〔平成29〕年)
- 『福島県 相馬市新地町 住宅案内地図』(たちばな出版 2005〔平成17〕年)
- 『口碑福田史』6巻・7巻(荒保春・著 非売品 ライト印刷 6巻・2000〔平成12〕年、
7巻・2007〔平成19〕年発行)
- 『天災から日本史を読みなおす』(磯田道史・著 中公新書 2014〔平成26〕年)
- 『歴史の愉しみ方』(磯田道史・著 中公新書 2012〔平成24〕年)
- 『神社は警告する―古代から伝わる津波のメッセージ』
(高世仁・吉田和史・熊谷航 共著 講談社 2012〔平成24〕年)
- 『東日本大震災 復興支援地図』(昭文社 2011年)
- 『わかる! 取り組む! 災害と防災 ①地震』『わかる! 取り組む! 災害と防災 ②津波』
(帝国書院編集部 帝国書院 2017〔平成29〕年)
- 『はみだせ! あんこちゃん 記憶のなかの新地町』
(新地町復興応援隊 NPO法人みらいと 2016〔平成28〕年)
- 『新地町史 歴史編』(新地町教育委員会 1999〔平成11〕年発行)
- 『ようこそ新地町へ 新地町の文化財』(新地町教育委員会 2014〔平成26〕年)
- 『新地町の文化財―埋蔵文化財の保護について―』(新地町教育委員会)
- 『福島県立博物館紀要 第29号』(福島県立博物館 2015〔平成27〕年)
- 『磐城誌料叢書全書』(平読書クラブ 会員頒布 1987〔昭和62〕年)
※「磐城九代記」部分(諸根樟一・編纂 勿来文庫 1930〔昭和5〕年)
- 『2011/3・11 いわき市・東日本大震災の証言と記録』(福島県いわき市 2013〔平成25〕年)
- 『福島県災害誌』(福島県消防防災課 1972〔昭和47〕年)
- 『チリ地震津波 被害状況調』(福島県 1960〔昭和35〕年)
- 『福島県災害誌 (昭和20年～昭和41年)』(福島県)
- 『福島県気象月報』(福島地方気象台編 気象協会福島出張所刊 1960〔昭和35〕年1月)
- 『福島県史 第25巻 各論編11 自然・建設』(福島県 1965〔昭和40〕年)

○協力 新地町教育委員会 新地町(復興推進課・企画振興課) 福島県立博物館
福島県文化財センター白河館(まほろん)

○参照 HP 復興庁 総務省消防庁 国立教育政策研究所 東京大学 東北大学



日本近代農業教育の先駆け
～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～

京都府立須知高等学校
ウィード研究班

鈴木隆之介・藤村美月・水口皓太・東麻衣



はじめに～研究の背景と方法～

明治期、殖産興業を合言葉に、札幌と駒場で御雇外国人の指導のもと、西洋式農業教育が国家主導で行われた。それとほぼ同時期、一地方の京都府が類似の教育を施していた。京都府農牧学校(以下、農牧学校)で農牧学や技術を教えたのが、御雇外国人ジェームズ・オースティン・ウィード(以下、ウィード)である。これら三者の農学校は、開拓や教育の方法に共通項が見られるため、三大農業教育発祥の地と称されることがある⁽¹⁾。しかし、一方で官立の二校とは区別する消極的な評価も見られ、こちらの方が定説化している⁽²⁾。

ところで、私たちウィード研究班が通う須知高校は、140年前(明治9年)に設立された農牧学校を起源とする【資料①】。当時の農具と教科書が、京都府立須知農学校(1923年設立、須知高校の前身)等を経て本校に伝来し、大切に保管されている【資料②・③】⁽³⁾。そこで、ウィード研究班は、開校140年の契機に、農牧学校の歴史を明らかにしようと調査を進めた。ところが、農牧学校所在の船井郡京丹波町地域には、地元の史料を保管する資料館がない状況であった。そのため、地元の旧家や地区を訪ね、さらに公文書館・博物館・大学等にも調査に赴き、史料の収集に努めた。

従来の使用史料は、編纂物が大半で、学校関係者の生の声を知る史料は皆無であった。私達は、こうした状況を打破し一次史料を紹介された研究⁽⁴⁾に学びながら、諸方面への調査で新たに見つけた一次史料も含め独自の研究を進めた。これによりウィードと農牧学校の活動が、日本近代農業教育の歴史においてとても重要な位置を占めていたと結論づけた。これまでの積極的評価を大いに補強できる成果を得られたので、ここに報告したい。

1 ウィードの志～利益を重視し経済発展への道筋をつくる～

ウィードは明治6年(1873)京都府の御雇外国人となり、同9年農牧学校の教職に就くまでの数年間、京都牧畜場(現、京都大学附属病院敷地内)講師として、西洋農法の講義と技術指導を行った。その時の講義内容を記した『農業会記』(同9年)【資料④】が須知高校にある。それを読むとウィードは農牧の発展に加え、利潤追求、経済発展までを視野に入れていた〔史料1-②～④⑧⑨〕。同8年11月京都府紀伊郡第一区上鳥羽小学校で穀菜品評会が開催された時は、ウィードの講義を聞こうと区長・戸長や住民多数が参加し、熱心に聞き入った〔史料1-①〕。また18～19世紀にかけて農業生産力向上に成功した英国を例に挙げ、日本の農牧の在り方や農業会社の概要について語った。その講義で強く主張したのは、家畜を飼養すれば利益が大きい点である。羊は肉や毛になり放牧すれば土地は豊かになり、また、英国では粉末にした牛骨を肥料として使用することで生産力が向上したように、日本でも利用すべきだと述べた〔史料1-②⑤⑦〕。別の箇所では、化学の力を駆使せよと提言した〔史料1-⑥〕。他にも「いまだ日本で家畜を放牧していないのはなぜか。」と疑問を呈し、京都府だけではなく、日本全体へ自説を波及させられると述べた〔史料1-③⑨〕。

ところで、当時の日本の農業生産量を見ると、米が約50%を占める一方、畜産は1%と非常に低い⁽⁵⁾。しかし、日本では牛疫等の疫病が流行し始め、農牧に大損害を与えた。京都も例外ではなく、牧畜関連は利益になるどころか牛疫対策せざるを得ない、効率の悪い

事業となっていた。その影響もあってか、人気のあったウィードの講義は次第に人が減っていった。逆風が吹く中、ウィードは農牧学校が創建されると主任教師になる。丹波須知村金剛寺での開校式で語ったウィードの言葉が『勸農新報』創刊号に「農牧師ジェ、エイ、ウィード祝詞」として残っている⁽⁶⁾。それを読むと、「アメリカでは去年の一葉を今年二葉にすれば社会に利益をもたらすとあるが、蒲生野の地では百葉産出できる」とある〔史料2〕。この言葉から、蒲生野を農牧で豊かにする自信とチャレンジ精神を伺える。おそらく、畜産業の占める割合をもっと伸ばし、稲作と肩を並べられる産業に押し上げようとしたかったのだろう。札幌のクラークが残した名言「少年よ大志を抱け」と同様に、大きな夢をもつことの大切さを私たちに教えてくれる言葉と理解できる。

開拓の方法及び教育方針・内容は、『百年の資料 3』所収同年制定「農牧授業生徒規則」に見える。農具の使用・種まき・収穫方法等の農業関係だけでなく、乳牛の取扱い方・羊毛の刈取り方・家畜の施薬治療法等の牧畜関係にも重きを置いている。『丹波町誌』によると、当時洋牛8頭・雑種牛13頭、羊50頭、豚10頭、鶏1000羽を飼養しており、ウィードの意志が色濃く反映されているのが分かる。

『農業会記』によると、明治初期の段階で西洋農法教育(とくに英国の方法)を参考に開拓を行おうとしたことがわかった⁽⁷⁾。駒場でも当初英国式であったことから、農業教育の黎明期はイギリス式が常道だったのであるから、農牧学校に対して積極的評価ができる根拠の一つになると言えよう。さらにウィードの語った方針には、京都だけでなく日本の農業を引っ張っていくといった気概を感じられる。しかし、数年で廃校となったのはなぜであろうか。その理由を農牧学校の実態を検討することで明らかにしたい。

2 農牧学校の実態～資金工面の苦労～

蒲生野が開拓地に選ばれた理由は、京都市中(京都牧畜場)の牛疫対策であるとか、広大な丹波高原が見出されたからだと言われている。では、土壤の分析は行われていたのだろうか。拝師氏によると、「蒲生野の地は黒ボクであるから農牧に適さないはずなのに、なぜウィードは当地を選んだのか」と疑問を投げかけ、「ウィードがその黒ボクについて炭素を主成分とする土壤と見間違った可能性や、黒ボクの厄介な性質を熟知していなかった可能性がある」と指摘される⁽⁸⁾。しかし、京都府の官員が京都府下を巡見して蒲生野の地を選んでいいたため〔史料3〕、ウィードが見誤ったというよりは、京都府の判断ミスウィードが追認したと考えるのが妥当だろう。また、開校以前から学校運営に支障をきたす素地ができていたことは、京都府が化学的分析を加えていなかったことを意味しよう。明治3年にすでに化学的な研究を行う舎密局は開業されているため、役所間の連携が取れていなかった可能性も想定しておかねばならない。しかしながら、当時、黒ボクを十分に理解できた人が日本全体でどれくらいいたかも考慮すべきである⁽⁹⁾。

農牧学校創設1年目、府は自ら学資金を工面する自費生30名を募集したが、実際は10人にも満たず、翌年になって30人弱が集まった。明治11年、再度志願者を募ることとなったため、自費生の定員を満たさなかったと考えられる。その理由は、一般家庭の財力と授業に耐えうる能力の両方を満たす家庭の生徒が少なかったためであろう。そのためか、同年に欠員を補うため自費生の募集を再度行う一方、「農牧学校区費生徒選挙概則」という、京都府内各地区から一人ずつ区費生を選出して入校させる制度を定めた⁽¹⁰⁾。年間の学資

金は 60 円で、区から借りた学資金はいずれ区へ返金しなければならなかった。生徒は全員寮生活で登校時は和服に袴を着用し、威儀を正して授業を受けていたが、時が経つにつれて洋服を着用し髪も分けて革靴で登校した。授業には通訳がいたものの、実習中家畜を扱う時には英語の使用を指示され、生徒らは語学で苦心したという。

農牧学校は衣装等の形から入の方針だったため、不満に思う生徒もいた。区費生で入校した上野弥寿夫である⁽¹¹⁾。彼に関する上野家文書が京都府立京都学・歴彩館(以下、歴彩館)に所蔵されており、調査に赴いた。彼は明治 12 年、区費生から自費生への変更を願っている。理由は、学資金の使い道に不満を持っていたためである。学資金の 3 分の 1 が実習服や帽子等、農牧学習上無くても支障のない無用物の購入に宛てられ〔史料 4-①〕、おまけに物価上昇に伴い必用物が買えなくなっていた〔史料 4-②〕。弥寿夫の学資金明細表〔史料 5〕では、「被服」が最も高価で 6 円 60 銭となり、衣装代の高さが分かる。ちなみに、駒場農学校(明治 11 年創設)の生徒は、1 ヶ月 7 円の給与を衣服・食料・薪炭・石油・洗濯・補繕料に使用していたことから、弥寿夫は衣装代を必需品にまわせるはずだと言いたかったのであろう。当時の米相場は、1 石＝約 3 円のため⁽¹²⁾、学資金 60 円は 20 石相当となり、将来返済する必要がある区費であるとすれば、弥寿夫にとって相当高額であったと考えられる。

歴彩館の鈴木家文書によると、鈴木家の所属する愛宕郡第 2 区へ学資金の督促をした事例もある。そのため必需品の未納分は、学校が債主へ借金をしていた。この地区からは、明治 12 年ウィードの弟子山嶋唯輔が山城 8 郡からの共同出資で 1300 円の渡航費でフランスへ留学している〔史料 6-①〕。この渡航費がある上に愛宕第 2 区は学校生徒のために 36 円 18 銭の負担をし〔史料 6-②〕、留学の 11 か月前から学資金延滞をしていることから、経済的負担の重さが分かる。明治 11 年には在籍生徒が 50 名であるから、学資金 60 円を全員滞りなく納めれば、この年の赤字 3250 円をほぼ克服し、経営が安定するはずであったと考えられる。しかし、明治 12 年 1 月以来授業への不平が出たため 15 名の集団退校が発生したため〔史料 4-③④〕、赤字回復の見込みがなくなり榎村知事による廃校決断につながったと考えられる。地域や生徒の負担の重さが経営難の根拠の一つである。

廃校原因についてさらに調べるため、明治 12 年～同 15 年の「京都府議録事」(京都府議会図書館所蔵)⁽¹³⁾の調査を行った。結果、京都府議会では廃校について議員たちが議論をしていないことが分かった。しかし、これにより榎村知事の独断によって廃校が決断されたという定説には慎重にならなければならない。なぜなら、「議録事」には、議員の間でも農牧の成果を認めていないことが分かる箇所があるからである〔史料 7〕。農牧学校は、廃校になっても問題ないとの暗黙の了解が京都府の関係者間であったのかもしれない。

以上のことから、学校運営は資金面で困難を極め、ウィードの描く経済発展の道筋を京都府の関係者や生徒たちが抱けなかったと考えられる。

3 駒場・札幌との比較～地域の奮闘ぶりを見る～

駒場では、生徒は国家から給付を受ける官費生として、机・椅子・書棚・藁布団・毛布・紋帳・夏冬制服・制帽・雨衣・靴等が不足なく給与された。また、先述のように薪炭油料等も支給された。当時英国人が五人も教師として雇用されていた。政府の農業教育、人材育成に対する姿勢はきめ細かく手厚い。確かに、これだけ学校から支給されると生徒の経

済的負担は軽くなるはずだ。ここに、京都府との違いが見えるのではないだろうか。駒場は廃校の危機がなく、合併を繰り返す過程で今日の東京大学農学部に至っている(14)。

札幌農学校(明治9年創設)では、生徒は駒場と同様で原則官費生であった。そのため、生活・学業に必要な費用はすべて支給された。具体的には、食料・衣料・寝具・日用品等である。しかし、明治11年(1878)からは官費生制度の適用を廃止し、国家から学資金を貸与される貸費生に変更した。そのため、学費、生活費等で1ヶ月9円を貸す代わりに、卒業後給料から返還されるという制度となった。この制度は、生徒にとって農業も学べて日常生活上困らず、京都府と比べ優遇されていた。しかし、明治15年(1882)北海道開拓使の廃止に伴い、廃校が議論された。理由は、欧米では農学校がなくても成果物が見られること、実際に役に立たないことが多いの2点であった。それに対し、第一期卒業生が反発し、北海道長官に迫って逆に学校の機能拡大と充実を訴えた。その主張は認められ、逆に基盤を固めて発展していった。また、外国人教師は明治9年(1876)～同11年(1878)までクラークをはじめとして5名いた。日本人教師も多数いた。札幌農学校は後継者だけでなく、政府の協力もあって今日の北海道大学に至ったのだと考える。

並松氏は、キリスト教精神の欠如が廃校の原因とされた。確かに札幌では、キリスト教精神に基づいて教育が行われ、駒場ではすでにキリスト教精神に基づく教育を受けている学生達が生徒になっていた。しかし、実学を重んじる風潮の時代において、宗教は形式的なものであり、技術の向上に何の関係があるのかいささか疑問である。農牧学校には、2年半の短期間とはいえ、現在判明している範囲では、上野のように翻訳文を勸農局へ提出できる等相当高い学力をもった生徒がいたことを忘れてはいけない〔史料4-⑤〕。また、近年京都府立須知高等学校が入手した『御傭外国人事蹟調』(明治45年)を調べると、獣医学士の池田氏が農牧学校に在籍していた事実が判明した(15)【資料⑤】。

明治12年2月(廃校3カ月前)と廃校の翌年2月、同志社英学校を創設していた新島襄はウィードの契約終了に際し、後任を見つけるべくアメリカのクラークへ手紙を書いた。そのおかげで、マサチューセッツ農業大学の教授が推薦されたものの、実現を待たずに廃校となった。明治13年には駒場にも多数の農牧関係の学士が輩出されているため、あと一年待てば日本人教師も招くことができ、軌道に乗せられる可能性があったのではないか。また、廃校になってからも御雇外国人を招いて学校の復活を画策する動きがあったことは、農牧学校存続に対する熱い先人の思いをここに知ることができる。

京都府は、国家の手厚い保護のもと進められた官立とは違うが、むしろ一地方が国家に負けないくらいの努力と奮闘ぶりを見せている点に、注目すべきである。官立農学校と同時代に御雇外国人を招いて西洋農牧を展開した地方の努力は、他に見られない。

4 廃校後のウィードと生徒～再びウィードの志と地域に与えた影響～

『丹波町誌』によると、廃校後、病死や事故退学者が続出し、残ったのは5名で、府は公費で面倒を見たものの、その後自然に消滅したと伝えている。一方、並松氏によると生徒の20数名は京都中学(現、京都府庁敷地)へ転学したという。しかし、誰が転校したのか、その詳細は不明である。今後調査を進めていく必要がある。

先学によると、廃校後のウィードの足取りは全く分かっていなかった(16)。そこで、京都から一番近い神戸港からアメリカに帰国したのではないかと推測し、神戸で発刊された

英字新聞『The Hiogo News』(廃校後3年分)を神戸市立文書館で調べ、神戸港の乗船者を確認した。しかし、J・A Weed という記載はなかった。そこで、『The Japan Directory』という滞日外国人とその活動を記録した書物を調べると、明治13年(1880)にウィードは「tanba」から「Hiogo」に移っていたことが判明した。具体的には、神戸外国人居留地59番地(現、神戸朝日ビル)に居住していた【資料⑥-1・⑦】⁽¹¹⁷⁾。廃校後すぐに神戸に渡ったということは、何を意味するのであろうか。明治14年(1881)、ウィードは「Osaka」(大阪川口居留地)に移って、Carrol & Co J.D. という貿易会社グループの「THE OSAKA ICE WORKS」(大阪製氷会社)に従事し、マネージャーを担当していた【資料⑥-2】。牛肉の取引に従事していたのかもしれない。彼は、京都や丹波にいた時からすでに農牧会社と貿易会社との連携を考えていたのだろうか。さらに明治16年、「Osaka」に引き続き滞在し、大阪府のcouncil(居留地議長か)を兼務していたことも分かった【資料⑧】。

『大阪川口居留地の研究』の編者である桃山学院史料室の西口忠氏が、大阪の居留地に詳しい専門家だと分かった。西口氏からは、ウィードが川口居留地議会の議長を務めた議事録(英文)を紹介していただいた。その資料を日本語訳してみると、ウィードは農牧関連ではないが居留地で起きた公共施設の使い方等様々なトラブルを解決していたようである。また、ウィードは民間企業と公務員を兼務していたことを考えると、公共の利益を考えながら経営的なセンスも発揮できる人物だったのではなかろうか。

廃校後の生徒たちの活躍を最後に見る。先述した獣医学士の称号を持つ池田氏の存在は、後継者の一人として挙げられよう。上野弥寿夫は帰省し、舞鶴で元老として地方行政への協力をしたが、農政とどう関係したかまで分からない。しかし、農牧学校設立に区長として関わった兄上野弥一郎がのちに京都府議会議員から衆議院議員になり、京都府立大学や京都大学創設に尽力した事実も見逃せない⁽¹¹⁸⁾。先述の事績調【資料⑤】には、宮津町会議員大槻久太郎(京都府宮津市)、間人村村長泉雄次郎(京都府京丹後市)の名も見える。泉は帰省後小学校の教師をしており、農牧学の知識を子供たちに還元している可能性もある。彼らが、地方の町づくりにどう関わったか、農牧の視点で今後も調べていきたい。また、蒲生野の地に廃校後28年経って設立された船井郡立実業学校は、農業教育を主眼としており、その後、須知農学校(大正12年)、須知農林学校(昭和7年)と経て、現在の須知高校に至っている。この事実は、蒲生野の地が農牧の地として後世の人達によって想起され、大切に継承されていることを意味している⁽¹¹⁹⁾。現在、京都大学の牧場も蒲生野にある。京都大学・京都府立大学・須知高校の起源が蒲生野にあるのではないか。農牧学校の後世に与えた影響を一次史料に基づいて確認していく作業は、今後も続けていきたい。

おわりに

札幌と駒場とほぼ同時期に始まった京都府での農牧事業は、京都府のみならず日本全体の経済発展と国民生活の向上も視野に入れており、殖産興業の重要な役割を担う可能性を秘めていた(第1・4章)。農牧事業の成果が確認される前に廃校となったが、一地方の奮闘ぶりに目を向けるべきである(第2・3章)。廃校後も農牧学校の生徒や関係者が京都府の農牧事業に尽力した可能性を考え、地域創生の核として連綿と受け継がれてきた伝統も垣間見た(第4章)。私達ウィード研究班は、今後も新たな史料開拓に努め、ウィードの残した痕跡を大切にする活動に参加し続けていきたい⁽¹²⁰⁾。

注

- (1) 京都府立須知高等学校 (1954)『本府農業教育の濫觴 農牧学校に就て』須知高校、拝師暢彦 (2005)『J. A. ウィード京都府農牧学校物語』京都新聞出版センター
- (2) 『国史大辞典』(吉川弘文館)では、農牧学校は札幌・駒場の官立とは区別し、一地方の公立レベルと見なしている(内田紘(1984)「農学校」の項)。札幌のクラーク、駒場のケルネルらと比べ、農牧学校のウィードの知名度はきわめて低い。ちなみに、「京都府農牧学校やウィードという人物を知っていますか」と地域の方 20 人に聞き込みをしたところ、2 名しか知っていなかった。地元の人であってもこうであるから、広く一般的にはなおさらであろう。
- (3) 農具が農牧学校時代のものであることは、本校ホームページ「須高の所蔵品」を参照。ウィード研究班が農具に記された英文スタンプの全文を読み取り紹介したページである。たとえば、草刈り機のローンモアーには、「DEWEY MOWER PHILA LM CO PHI LA PA USA」等の印字があり、アメリカ由来のものであることが分かる。また、レシプロモアーという草刈り機には、「HIXON. ILL. U. S. A」とある。他に、ホイールホーという除草機にも、「Planet Jr. made in USA」とある。
- (4) 辻垣晃一(2017)「「京都府農牧学校」の廃校原因について」(日本農業史学会研究報告レジメ)
- (5) 木村茂光編(2010)『日本農業史』吉川弘文館
- (6) 友田清彦(2009)「京都府農牧学校に関する資料」(『農村研究』109号)
- (7) 現在まで、拝師氏はアメリカ式、並松氏はイギリス式と主張されていて一定していない。
- (8) 当初、京都市中に牧畜場が開設されていたが、開国による西洋文化の流入とともに病原菌等の被害が生じた。各地でも牛疫などの疫病が発生したという。
- (9) 大分県九重地方には、水稻がうまく育たないという黒ボク土にまつわる民話から、「千町無田(せんちょうむた)」という地名が残っている(小野新一『土と人のきずな』)
- (10) 当時、京都府の行政区は、約 70 に分かれていた。
- (11) 注(4)は、上野弥寿夫の入校願、学資金明細表、廃校について触れた長文の手紙等様々な上野家文書という一次史料を紹介している。この人物は、後に山本家へ、さらに林田家へ養子に入っている。
- (12) 明治 5 年 8 月京都府文書(『京都府百年の年表 3 農林水産編』)
- (13) 全 5 冊。明治 14 年分が 2 冊あり、計 5 冊となる。
- (14) 明治 14 年(1881)4 月に内務省から農商務省へ移管され、明治 19(1886)に東京山林学校と合併、ついで明治 23 年(1890)6 月には帝国大学へ合併され、農科大学となった。
- (15) 日本獣医史学会から、「池田音次郎」という陸軍に属する獣医がいることを御教示いただいたが、音次郎が農牧学校に在籍していた事実を示す同時代の史料はまだ見つかっていない。ただ、歴彩館には、「明治 12 年上半季分民費学資賦課」という史料に、「七円 正月二十七日池田へ渡ス」とあり、地区の人が池田氏へ学資金を工面したと思われる箇所があり、池田氏が在籍していた可能性はきわめて高い。残念ながらこの史料にも名字だけで下の名前が書かれていない。
- (16) 拝師書によると、ウィードは船井郡園部町常磐橋詰に住んでいたという伝承を紹介されている。
- (17) 『神戸外国人居留地・居住者の変遷(上)』参照。神戸市立文書館松木正三館長に大変お世話になりました。
- (18) 京都府立大学百年誌編纂委員会(1995)『京都府立大学百年誌』京都府立大学開学百周年記念事業会、京都大学百年史編集委員会(2000)『京都大学百年史資料編 2』京都大学教育研究振興財団
上野弥一郎がどのような思いで京都府立大学や京都大学設立に協力したか、今後調べていきたい。
京都府立大学の前身が明治 31 年に「京都府農学校」と名乗っているのは、京都府農牧学校を念頭に

置いているからであろうか。実は、京都府農牧学校は、当時「蒲生野農学校(京都府農学校)」と呼ばれていた(注(4))。須知高校所蔵の教科書にも「京都府農学校」の朱印があり、レジメで紹介されている上野家文書の史料にも蒲生野農学校の署名下に京都府農学校の朱印が押されている【資料⑨】。

(19)100周年、110周年等の節目ごとに継続して顕彰している。

(20)須知高校では、ウィードが開拓した場所を「ウィードの森」と名付け、地域の観光資源としての活用を展開中である。ここには、外来種の植生が見られ【資料⑩】、開拓の畦跡もある(文部省実業学務局編『実業教育五十年史』1934年で確認された畦跡が今も残っている)。また、私達ウィード研究班が見つめてきた史資料は、今年12月にオープンする農牧学校資料室(仮)で展示する。この資料室は、私たちウィード研究班が展示資料の制作に関わり、見学者に解説をする。こうした活動をこれからの後輩たちにも受け継いでいきたい。とにかく、農牧学校の史料はまだまだ少ない。ウィードの肖像や農牧学校の写真も見つかっていない。様々な謎に今後も迫っていきたい。

主要参考文献

安藤円秀(1964)『農学事始め－駒場雑話』東京大学出版会

京都府立総合資料館編(1972)『百年の資料』京都府

北海道大学編(1982)『北大百年史通説』ぎょうせい

東京大学百年史編集委員会編(1984)『東京大学百年史』東京大学

丹波町誌編纂委員会(1985)『丹波町誌』丹波町役場

国史大辞典編集委員会編(1984)『国史大辞典』吉川弘文館

京都府立総合資料館編(1987)『百年の年表3』京都府

並松信久(2002)「明治初期の高等農業教育とその定着要因－京都農牧学校の設立と展開を通して」(京都産業大学論集 人文科学系列 第29号)

拝師暢彦(2005)『J.A.ウィード京都府農牧学校物語』京都新聞出版センター

友田清彦(2009)「京都府農牧学校に関する資料」(『農村研究』109号)

辻垣晃一(2017)「「京都府農牧学校」の廃校原因について」(日本農業史学会研究報告レジメ)

〔史料〕

1 『農業会記』（明治9年）より

- ① 「戴白ノ翁ハ涙ヲ垂テ感嘆シ、被黒ノ童モ耳ヲ側テ、凝聴ス。少壮郡村ニ秀ヒテタルハ時ヲ得タリト意氣自ラ揚々タリ、」
- ② 「畜類中ニ牛ト羊ハ、最モ利益多シトス、羊ハ人ノ食料トナリ、衣服トナリ、農家ニテ殊ニ貴重セラレタリ」
- ③ 「其ノ（開墾していない）地ニ羊ヲ牧セハ、必ス国益ヲ興スノ基礎ニテ、荒蕪ヲ開キ、衣食ヲ足スノ要訣ナリ、英国ノ土地ハ、日本ニ比スレハ、凡ソ半ハナリ、然ルニ人民モ夥ク、羊ヲ牧スルコト凡ソ二千七百餘頭、牛ヤ馬ヤ豚モ畜息セリ、日本ニテ未タ家畜ヲ牧養セザリシハ何ソヤ、吾レ今日ヨリ予メ決シ置クコトアリ、二十年後ニ至ラハ、日本国内赤耕ノ山野ハ、必ス羊群ニテ覆ヒ尽スニ至ラン、」
- ④ 「初春牝羊百頭を購求シ、壹頭十圓ナレハ、百頭千圓ナリ、来春マテニー頭ヨリ二頭ヲ産出ス、即チ二千頭ノ羊ヲ満一年間ニ蕃息ス、其價ヒ即チ二千圓ナリ、汝ノ米作ニテ斯ノ如キ益アリヤ、」
- ⑤ 「人民ノ増殖スルニ従ヒ、物産モ亦増殖スルコトヲ知レリヤ、試ミニ英国ノ例ヲ示メサン、英国千七百八十年ハ、住民九百萬人ナリシニ、千八百四十年ニ至リ、二千萬人トナレリ、其ノ国土ハ別ニ増加シタルニ非ザレトモ、其ノ物産ノ収獲ハ、僅カ六十年間ニテ二倍ニ至レリ、」
- ⑥ 「然レトモ猶ヲ其（日本）ノ術ヲ改正ス可シ、其ノ改正ハ、勉強ト試験トニ在リ、従前ノ術ニ試験ト勉強トヲ加ハエ、且ツ化学力ニ依頼ス可シ、」
- ⑦ 「京都市中ニ牛肉ヲ売買スル舗店多シ、其ノ屠殺セル牛骨ヲ買ヒ求メハ、必ス容易ナラン、之ヲ曝シ乾カシ粉末トシ木灰ト配剤ス可シ、」
- ⑧ 「汝チ今般ノ創会ハ、必ス盛大ナル農業会社ヲ興スノ濫觴タリ、農民自ラ会社を結び、品物ヲ評論シ、耕作ニ利益アルコトヲ知ルニ至ラハ、必ス分社ヲ四方ニ開キ、其方法ヲ創設シ、又タ釐革シ、遂ニ政府ヲ激励シ、上下共ニ奮発スルニ至ル可シ、」
- ⑨ 「漸次ニ開墾牧草ヲ播種スレハ、数千頭ヲ牧ス可シ、米作ニテ羊ヲ牧スル如キ益アリヤ、吾カ案スル所ニテハ、米作ハ必ス過分ノ益ヲ得ルコト能ハサラン、今マ汝チ京都府下紀伊郡第一区上鳥羽村ノ小学校ニ於テ、植物品評会ヲ創設セリ、是ノ擧ヤ未タ日本国内ニ無キコトト知レリ、」

2 『勸農新報』創刊号より

「彼ノ国ノ諺ニ云ヘルアリ、去年一葉ノミヲ生セシ牧草ヲ、今年二葉ニスルトキハ、則チ其人ノ名誉ニシテ、又一般ノ恩人ナリト、如此キハ我輩ノ為スヘキ名誉ニシテ、唯二葉ノミナラス、去年一葉ヲ生セシモノモ、今年百葉ヲ産出セント欲ス、」

3 農林省蔵版『農務顛末 第五卷』より

「（明治9年6月）官員二名ト京師ヲ出発シ（略）丹波国桑田郡山本村ヲ経テ夫レヨリ船井郡園部ニ至ル、（略）水戸村辺ヲ巡回シ続ヒテ蒲生野ニ至ル該地ハ數年来荒蕪ノ場所タリシニ先般府庁ニ於テ雇入レノ米国人ウィード氏ニ命シ開拓ノ事ヲ委任セリ、」

4 山本弥寿夫が京都府舞鶴の加佐地区に住む実兄弥一郎(加佐地区区長)に送った上野家文書より

上野家は、江戸時代庄屋を務める家柄で明治になっても戸長や区長を歴任し、地方行政の一端を担った。この史料は、注(4)で紹介されている。文書番号は、11745号。/は改行を意味する。

「(略)徴兵之/召集モ満期相成候哉ト愚察仕候間何卒可/相成ハ自費生ニ御換願被下度是ト申モ
区費ニシテ/其实自費ナル故真ニ大金ヲ費スニ其切モ見ヘズ/如何トナレハ①現業服或ハ帽子其
他諸物実ニ無用物/ニ費ス金額殆ト学資之三分ノ一ニモ至ル自費ナレハ/只書籍好逮及食料月謝
其余必用雜費ニ限り衣/服杯ハ適宜加之自費生之權利ナル者論スルニ不足/是ヲ以テ愚考スルニ
一ヶ月モ早く自費生ニ相成度存候/然ト雖モ兄ノ命ニ偏スルハ素ヨリ體認之一ナリ依テ/区費生
ニ従事スル命アラハ有名無実ニ非ラサル様願/度候此条御明説ヲ奉待上候/②過ル二月ヨリ食料
二円五十錢ノ登価ニ到リ候ニ付生員ノ/雜費二十錢ト額定相成候ニ付真ニ困窮仕候尤モ/学問上
ノ必用物ハ下渡相成候得共其他目前ノ雜費/風呂代一度ニ七重下駄損直シ又沓直シ郵便賃是等/
ノ如キハ省ク事能ハス実ニ困却ニ不堪ニ候間何卒此論/御愚察アランコトヲ且又弟此頃少々風
邪ヲ醸シ候就而者/少々淋疾嚴病仕候間松山近藤氏ナル医師ニ調/劑ヲ乞イ服藥仕居候/且又四
月五日ヨリ山城ニ於農事品評会施行/ニ付出願可仕候間何卒路費并承礼当金四五円/御回送被下
度余リ大金ヲ願上候得共過日書籍下渡相成/候ニ付テハ書物箱購求致サ子ハ入物モ御座ナク甚
不都/合ニ御座候且又上京幸之事故療病院ニテ一度珍察/ヲ受ケ度心組ニハ候得共如何可仕候哉
奉伺上候/右前以テ奉上伸候草々御願/三月二日認メ 弥寿夫再拜/兄上/ニ伸豫テ御熟知之通り
(略)/③一月爾来退校スル人員十二名也只今ニテモ退校致度趣意有者/二三名モ有之是皆授業
方ノ不平ヲ抱ク故也此退校スルモ上級ノ者ニ限ル/此事ニ件ニ付テモ上伸仕度義御座候得共後
報ニ讓ル/(略)愚考スルモ昨十一年分ノ生徒学資決算/表カ又ハ書籍代価ノ召集カ此ニツモ出ズ
ト想像仕候/乍併生徒小遣二十錢ト定マリ之時生徒ノ内挙テ/決算表拝見仕度旨願出候得共未タ
相立難ク旨/被申渡候是ニ付想像ヲ以テ□□聞々御座候且又/④授業方ニ於テモ不平之義件ニ御
座候得共余リ/長文ニ相成候故後報ニ上伸可仕候/○⑤豫テ申上候日略(カ)日毎ニ演舌会盛大ニ
就テハ自作文章/或ハ翻訳致候杯之類京都勸農局へ差出し/演舌雜誌嚴刻相成候趣ニ御座候/佛
事之砌帰村御申付被下候得共事実ナクニ/テ帰国ハ容易ニ免サレズ候間乍残念帰村不仕候ニ付/
左様御承諾母上へモ御通し被下度候/(略)一昨日本府ヨリ續校取拂/可致旨布達御座候ニ付昨五
日能美/君未明ニ御出立ニテ上京相成候間/御帰校之上如何相成候哉モ難計/万一廃校ニ相成候
ハ、実ニ愉快ト/存候右之事件吹聴スルモ外ナラス風呂屋ニテ/同勤之官員方カ愕然トシテ互ニ
御咄アリシヲ聞」

5 明治11年10月～12月上野(山本)弥寿夫学資金明細表より

一 金三拾円 受付高 拂

費目	十月	十一月	十二月	総計
束脩	拾五錢			
月謝	七錢五厘	七錢五厘	七錢五厘	
食料	四拾錢八厘	二拾一錢二厘	九拾錢一厘	
学用品		二拾五錢	五拾錢	
雑貨		二拾五錢	五拾錢	
被服一切ハ品揃	六円六拾錢			
靴	九拾貳錢			
革脚半	九拾八錢			
ゾボン釣	二拾錢			
靴足袋	九錢一厘			
火鉢	三拾錢			
机	六拾錢			
硯	拾貳錢			
洋澄	四拾五錢			
石油入	八錢			
学事□(牟カ)係旅費				
計	拾円九拾七錢四厘 (朱印)	七拾八錢七厘 (朱印)	百九十七錢六厘 (朱印)	拾三円七拾三錢七厘(朱 印)
差引残金拾六円貳拾六錢三厘(朱印)[一瀬]				
一時操換貸与之部				
費目	十月	十一月	十二月	計
私用旅費			壹円四拾錢	
〇拾				
(朱筆)「改メ差引残金〇四円八拾六錢三厘(朱印)」[一瀬]				

6 鈴木家文書・甲(館古 388)より

- ① 「農学生佛国滞留費賦課簿 一 金千圓也 山嶋唯輔外名〔平井勝次郎〕滞留来十二年諸費ノ内
へ前渡ニ付取集高 一 同三百円也 是ハ詰處諸費不足外明治八年當膳費集金ノ内ヨリ繰替有之
候處(略) 合千三百圓也」(歴彩館 館古 388-01757)
- ② 「地価五十壹万七千八拾円 此掛金廿壹円九十七錢六厘 石数貳千百貳拾円 此掛金拾四円貳拾
錢四厘 〆金三十六円拾八錢」

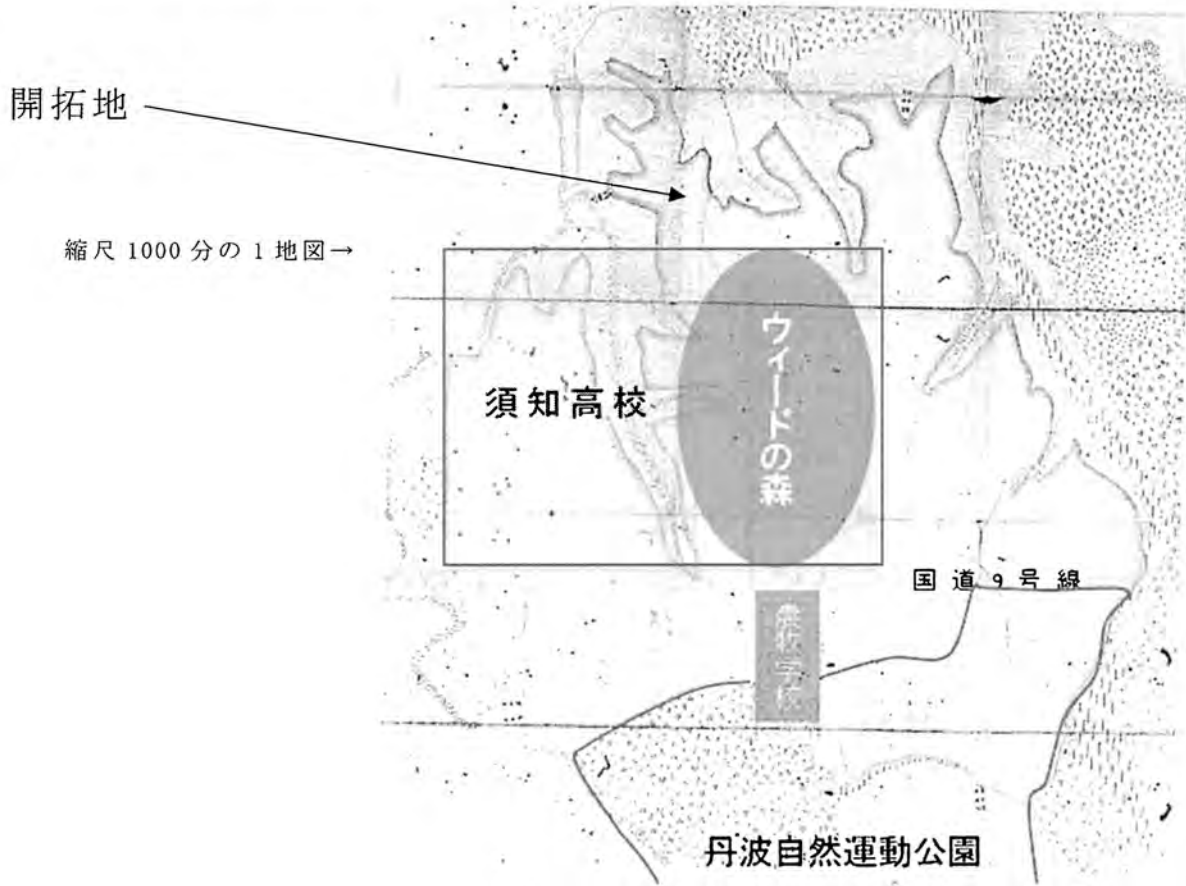
7 明治12年京都府議録事より

「〇四十二番(松本)牛肉ト云モノハ余程ノ滋養ヲナシ且又其価モ廉ナル者ナレハ矢張屠牛ノ説ハ三
拾錢ニテ可然〇三十一番(吉井)成程四十二番ノ説モ尤ノ様ナレトモ目今牛肉ヲ食スルコトハ開ケ
タレトモ之ヲ牧畜スルノ道ハ未タ格別ニ開ケサルコトナレハ先五拾錢ヲ課シテ然ルヘント考フ」

【資料】

- ① 明治 13 年 6 月に作成された「蒲生野一円実測図」(京都府立京都学・歴彩館所蔵)に農牧学校と須知高等学校を重ねた地図。

ウィードの森は、現在須知高校がウィードの開拓地の中心部分として整備している場所を指す。高校は開拓地の左手から中心部までの広大な敷地面積を持つ。ちなみに、須知高校の敷地は 146,800 m^2 で、開拓地は 414,400 m^2 である。



- ② 農牧学校が購入し、ウィードが授業で使ったとされる教科書。

京都府立須知高等学校所蔵



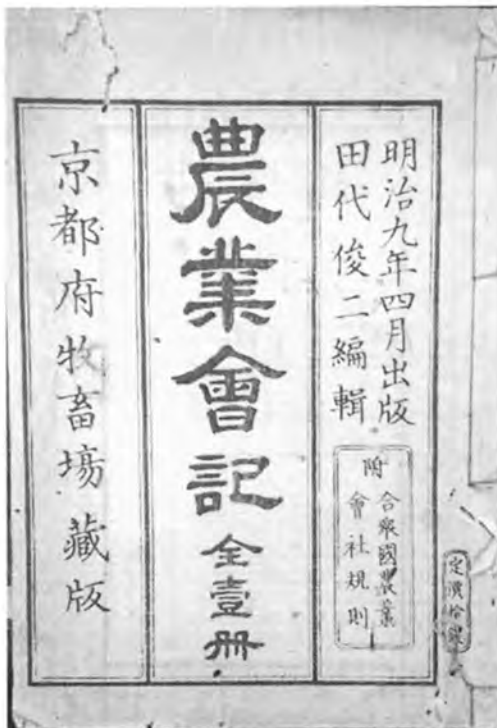
③ 農牧学校時代に使われていた農具

写真は、モウルド ブレイド プラウ(上段)とレシプロモアー(下段)である。前者は耕深と耕幅の開発で、後者は草取りで使う。京都府立須知高等学校所蔵



④ 田代俊二編『農業会記』

明治9年出版、京都府牧畜場蔵版、全1冊



『農業会記』の表紙

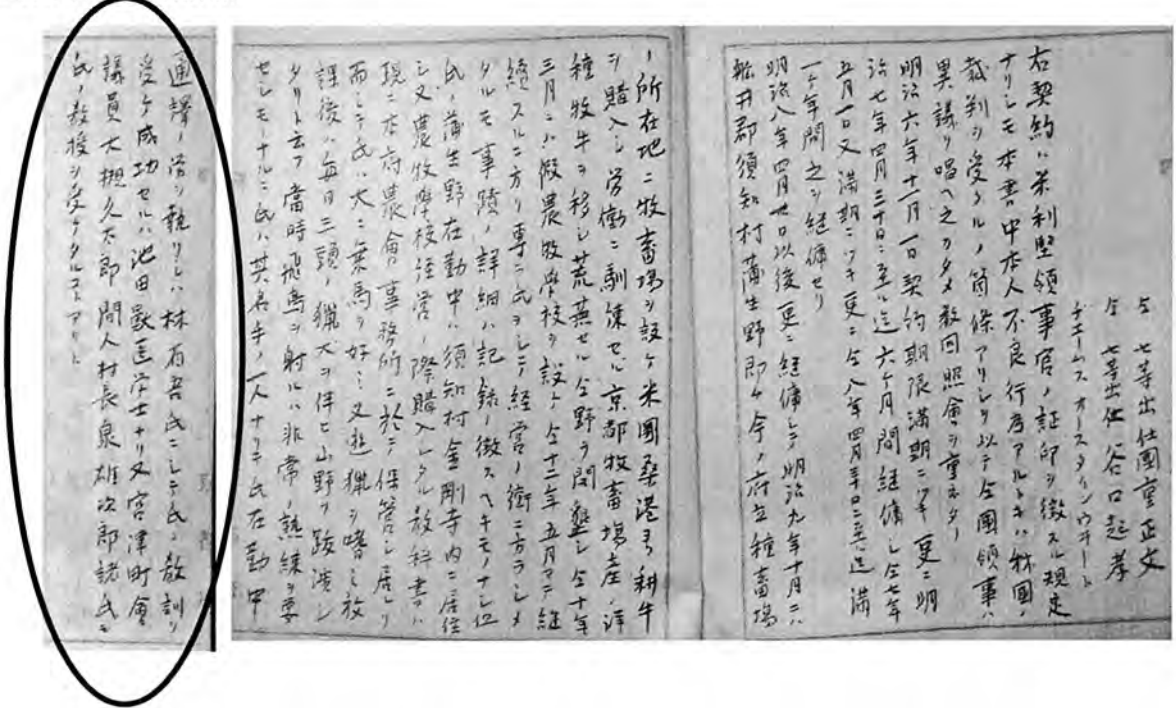


ウィードの農業会講義を記した冒頭部分

⑤ 「御備外国人事蹟調」(明治45年)より

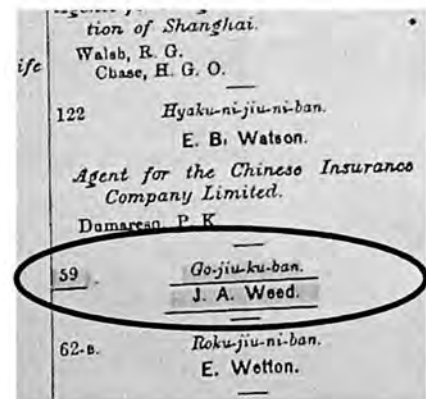
京都府職員が明治期に活躍した京都府の御雇外国人15名の業績を紹介した記録である。

京都府立須知高等学校所蔵

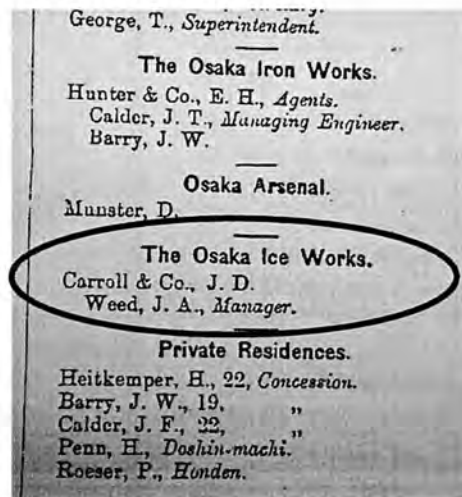


⑥-1 「Hiogo Directory」(明治13年、神戸市立文書館)より

「59 Go-jiu-ku-ban J. A. Weed」とある。



⑥-2 「Osaka Directory」(明治16年(1883)、神戸市立文書館)より



⑦ 「神戸居留地(1)」(長崎大学附属図書館古写真データベース)より

居留地 59 番地の位置は、神戸市立博物館の模型で確認し、ウィードの住居を特定することができた。



⑧ 「THE OSAKA FOREIGN SETTLEMENT 1866~1869」(大阪府公文書総合センター)より

第 67 回議会では、居留地近隣に機械工場が建てられ、煙突から出る煙に対する苦情についてのトラブルをウィードがサインし、調停していることが分かる。

67th MEETING: July 9, 1862

Minutes of the 67th Meeting of the Osaka Municipal Council, held at the Municipal Hall, on the 9th of July 1862.
Present: The Rev. A.D. Hail (Chairman), General Stahl, Dr. Stannius, and Messrs. James Hail, Warren and Weed.

The minutes of the last meeting were read and approved.
A letter from Mr. Heitkamp was then read in which he complained of the nuisance occasioned by the smoke from the chimney of the Ice Works.
Mr. Warren asked permission to make a statement in reference to the letter, and said that the machine was erected last year, the chimney was carried to such height as the engineer considered necessary to create the required draft in the furnace. After the machine had been running for some time, Mr. Heitkamp complained of the annoyance caused by the smoke, and the height of the chimney was increased some twenty feet and a new firebridge put in the flue which was expected to consume the greater part of the smoke. After these changes were made, Mr. Heitkamp expressed himself as being perfectly satisfied. When the new machine was erected last year, the chimney was carried to the same height as the other, which was entirely unnecessary for the purpose of creating the draft required, and the extra expense was incurred solely with view of avoiding any cause of complaint from Mr. Heitkamp. And further, that Mr. Heitkamp was now absent, and he (the speaker) believed that if he were here he would not sanction the signature of his name to the letter.

After some remarks by General Stahl in reference to nuisances in general, Mr. Hail, as nearer the machine than Mr. Heitkamp, was asked to state how much he was annoyed by it. Mr. Hail said that the noise was sometimes more than he liked, but that he had had no cause to complain of the smoke.

General Stahl moved, that the letter of Mr. Heitkamp be referred to the police and working committees to examine and report.
Seconded by Dr. Stannius, and carried.

The Working Committee submitted the following report for the past quarter:-

(1) The fence surrounding the O.M.C. property has been repaired at a cost of Yen 22.50.
(2) That a Pavilion for the Recreation Ground has been erected at a cost of Yen 131.50.
(3) In accordance with the instructions given at the last meeting, the Governor of Osaka was corresponded with in regard to making a drain along the east side of the O.M.C. property, in accordance with that request the said drain has been completed. The committee would also state that they have visited the cemetery grounds and ascertained that they are not duly cared for by the man who occupies a part of the ground for garden purposes, and that the said party stated he was placed there by the Osaka Fu, and does not recognize any right on the part of the Council to interfere with his occupancy of the ground. The committee therefore respectfully request further instructions to the matter.

A.D. Hail, J.A. Weed, Working Committee.

The report was accepted.
Moved by Dr. Stannius and seconded by Mr. Braess: "That the Chairman communicates with the Governor of Osaka in order to learn by what right the Japanese occupying part of the cemetery ground resides there, and on what conditions."
Carried.

Mr. Warren, for the Police Committee, made a verbal report that the Japanese servants employed by foreigners on the concession had been registered.

On motion duly seconded, the expenditure reported by the Working Committee for repairing the fence and erecting a pavilion on the Recreation Ground was approved.

A petition signed by twenty-four (24) foreign residents of Osaka was presented requesting the Council to investigate the probable cost and feasibility of adding to the present Recreation Ground the lot adjoining it on the south.

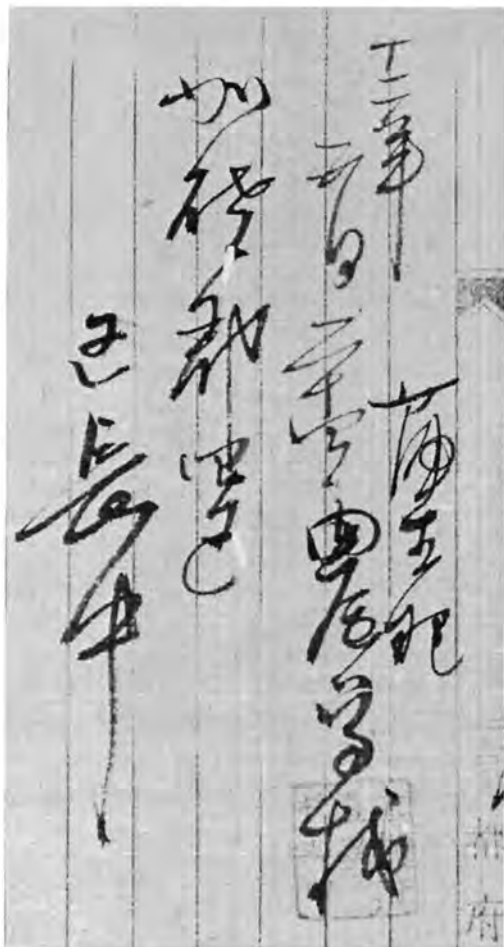
As the number of land owners among the petitioners was considered insufficient, General Stahl moved that the petition be referred to the Working Committee.
Seconded by Mr. Warren, and carried.

Mr. Warren moved that the Council be requested to consider the rules for the election of a standing committee of this Council, with a view to their amendment where they may deem such amendment necessary.
Seconded by Mr. J.A. Weed, and carried.

There being no further business, the meeting adjourned.

James A. Weed, Secretary, Osaka Municipal Council
(Signed) A.D. Hail, President.

⑨ 上野家文書より（歴彩館）より



上野家文書に捺印されている
「京都府農学校之印」



教科書に押されている「京都府農学校之印」

⑩ 須知高校ウィードの森より
スラッシュ松（アメリカ原産）



ウィード研究班の活動には、ウィードの森の公開をすすめる会の皆さんや同窓会のみなさん、教職員の先生方や地域の皆さんにもご指導を仰ぎ、研究することができました。

最後になりましたが、記して感謝申し上げます。

「与謝郡与謝野町石川の歴史地理的特質 —巡検と石刻文字から読み解く—」



〔研究対象地域〕

京都府与謝郡与謝野町石川

〔研究者名〕

京都府立宮津高等学校フィールド探究部

第2学年

櫻井二菜・藤原裕希

〔レポート本文の目次〕

- はじめに
- 第1章 石川の概要と研究方法
- 第2章 巡検から石川を読み解く
- 第3章 石刻文字から石川を読み解く
- 第4章 石川の歴史地理的特質
- おわりに

〔レポート内容〕

本文

- 《資料1 注釈 参考文献》
- 《資料2 石川各地区の写真》
- 《地図1 亀山の地形図》
- 《地図2 石川東部の地形図》
- 《地図3 石川の小字地図》
- 《表1 堂谷・下地・中地・上地地区の小字》
- 《表2 亀山・大宮・川上地区の小字》
- 《表3 石造物の文字情報》

〇はじめに

私たちの地元である石川は、山に囲まれており、西側には野田川が流れている。歩いてみると見渡す限り水田が広がっていて、都会では見ることのできない自然の光景がそこにはある。ここでいう石川とは、京都府北部にある与謝郡与謝野町大字石川のことである。江戸時代から石川村と呼ばれていたが、1955年（昭和30年）に近隣の三河内村、山田村、市場村、岩屋村と合併し野田川町になった。そして、2006年（平成18年）に野田川町、岩滝町、加悦町が合併し与謝野町となった。

私たちは、山城の立地や自然地形の特徴を分析することで石川の地理的特徴を深く知ることができるのではないかと考え、巡検調査を行うことにした。実際に巡検すると、石川地区の寺社にある石造物に文字が書かれていることに気付いた。それを読み取ることで石川の歴史的成り立ちを紐解くことができると思い、石刻文字の調査も行った。

〇第1章 石川の概要と研究方法

〔第1節 石川の概要〕

石川には野田川・香河川・奥山川（川上川）があり、古くからその川の氾濫原を生かして水田が発達してきた《地図2》。現在、石川は、亀山・大宮・川上・上地・中地・下地・堂谷の7地区に分かれ、さらに小字に分かれる《地図3》。小字の由来は、《表1・2》にまとめた。

また、大宮地区の小字「谷田」に石取り場【写真⑯】があり、川上・大宮地区から花崗岩が採掘されてきた〈注1〉。1893年（明治26年）の1月8日付の『日出新聞』に石材調査が行われたことが書かれており、石材調査の対象地区に石川村が入っていることも分かった〈注2〉。つまり、石川は石材が多く取れたということである。

以上のように、3つの川が流れ、石材が採掘されることから、「石川」と呼ばれている〈注3〉。

〔第2節 研究手法〕

『野田川町誌』には、石川の産業や文化財などの基本情報が記されている。しかし、景観・自然地形と歴史遺産の関係性や、石造物に書かれている文字情報に着目した研究はされていなかった。

そのため、『野田川町誌』の付録の地図に書かれた小字の場所と寺社・文化財を巡検し、景観や自然地形の特徴、山城・水田・集落の立地の特質を分析する一方で、神社や寺院にある灯籠などの石刻文字の調査を行った。景観や小字の由来から読み取れる自然地形の特徴や歴史的な情報がどのようなものか、また、石造物に書かれている年代に何が起こったのかを『野田川町誌』に載っている情報と照らし合わせながら、石川の歴史地理的な特質を研究する方法をとった。

〇第2章 巡検から石川を読み解く

本章では、実際に巡検を行い、景観や小字の由来から読み取れる情報をもとに、どのような場所に中世の山城が建てられたのか、また、自然地形を生かした水田や集落の立地の特徴とはどのようなものか、考察する。

〔第1節 山城の立地〕

石川には多くの山城がある。そこで、山城の立地の条件はどのようなものだったのかを解明するため、16世紀に一色氏が拠点としていた石川城跡地の麓から、石川一帯を眺めた。

石川城跡地の麓から見えたのは、一色氏の家臣である塩見筑前守が城主の山田城跡地【写真①】であった〈注1〉。そして、南西には、荻野悪右衛門が城主である亀山城跡地【写真②】も確認できた〈注2〉。さらに、現在、秋葉神社となっている高津城跡地も確認できる〈注3〉。このことから、当時、石川城・山田城・亀山城・高津城はお互い確認することができたということが分かる《地図3》。また、石川城からは、香河峠や市場方面、水戸谷《地図3》まで見渡せることができ、侵入してくる敵を発見することができたと推測される。そして、敵の侵入を近くの城に知らせるなど連携をとっていたと考える。

また、巡検で上地の秋葉神社にある高津城跡地に登ってみると、約250段の石段があり、急斜面であった。さらに、頂上からは川上方面も確認することができた。このことから、山城は急斜面で敵が侵入しにくく、細川氏などの敵が侵入してくる所を一望できる場所に建てられていたと考えられる〈注4〉。

〔第2節 小字「ハカタ」にある石積み〕

川上地区の小字「ハカタ」には、石積みがあった【写真⑧】〈注5〉。登ってみると、砦のような削平地【写真⑨】になっており、そこから宮津につながる道を眺めることができた【写真⑩】。

この石積みは、砦跡の石垣だと私たちは考える。【写真⑩】から分かるように、この砦は宮津に向かう道を見渡すことができる。〔第1節〕で書いたように、細川氏が攻め込んでくるのに備えて、石川城・山田城・亀山城・高津城は、互いに連携をとりあっていた。しかし、石川城・山田城・亀山城・高津城は、川上地区を經由して宮津方面から攻めてくる敵には気づきにくかったと考えられる《地図3》。確かに高津城跡地の秋葉神社の頂上から川上方面を眺めることができたが、川上の東側から宮津に向かう道までは見えなかった。このことから、この砦が宮津から侵入する敵を見つけ、石川城・山田城・亀山城・高津城に知らせていたと推測する。

なお、この石積みが砦跡の石垣というのは仮説である。しかし、石積み自体は『野田川町誌』には載っていないため、ここに記録する価値はあると考える〈注6〉。

〔第3節 自然地形を利用した水田と集落〕

石川には、野田川や香河川、奥山川（川上川）が流れており、それらの氾濫原に水田が発達してきた《地図2》。おそらく、現在のように堤防がなかったため、大雨になると川が氾濫していた。その証拠として、野田川・香河川・奥山川（川上川）周辺の小字には、「低湿地で氾濫域」を表す「田」や「溝」という文字が入った小字が見られた《表1・2》〈注7〉。また、「五反」・「五反田」という小字が大宮・下地・上地の3つの地区にあったことから、香河川・野田川・奥山川（川上川）流域の氾濫原では律令時代から水田が発達していたと推測される《地図3》。

巡検していると、集落の立地について分かったことがある。それは、石川では、山側に古い集落が営まれていることである〈注8〉。石川は、河川の氾濫だけではなく、山崩れ

も起きやすい〈注9〉。人々は、山崩れよりも川の氾濫を恐れていたもので、川に近いところではなく、山側の方に建てたのである。すなわち、当時の人々にとって、川の氾濫は最大の脅威であったということが考えられる。

集落に住む人々は、谷からの水を集めた水路を多く作った。例えば、小字「物部谷」の谷地形から引いた水路があり【写真⑬】、集落に流れていく。また、秋葉神社付近の谷から引かれた水路【写真③】は、幅が狭いが、次第に広くなり、最終的に香河川に流れていく【写真④】。この水路は、生活用水として使われただけでなく、水田を潤す水としても使われた。このように、谷からの水路が集落や水田を形成するのに必須であったと考える。

以上のように、石川の人々は、水害の危険性がある川から離れた山側に集落を建て、谷からの水路や氾濫原を生かして水田を発達させたと考えられる。

〔第4節 小字「ハカタ」にある棚田跡〕

川上地区の奥山川上流には、「小池谷」・「谷」・「宮津谷」・「川ノ谷」・「掛谷」・「ハカタ」・「金割」・「大カタギ」の小字が残っている。しかし、現在では、人は、住んでおらず荒れている。巡検をしていると、「ハカタ」に棚田の跡を発見した【写真⑦】。これが、「ハカタ」の「タ」に由来していると考えられる。

しかし、奥山川（川上川）上流に大年ダムが作られたため、現在は人が住んでいない。巡検をしていると、棚田跡には、シカやイノシシの足跡があり、動物が生息していることが分かった。このように、人間の里山が、衰退している現状も確認できた。

人々は、第3節であげたような氾濫原に水田を作るだけでなく、古くから谷々にも棚田を作り、石川を発展させた。なお、近世石川村の村高は3651石で宮津藩の中で最も多く、また人口も1800人と多かったが〈注10〉、これは人々が、氾濫原や谷々に水田を作った営為のおかげであると考ええる。

○第3章 石刻文字から石川を読み解く

本章では、寺社や道中にある石碑や灯籠などに記された文字情報をもとに石川の歴史地理を信仰面と社会経済面に着目して考察する。なお、寺社の位置は〈地図3〉にまとめた。

〔第1節 神仏習合から神仏分離へ〕

巡検をする中で、亀山にある稲崎神社の灯籠【写真④②】、大宮にある大宮神社の灯籠と鳥居【写真④④・④⑤】、下地にある物部神社の灯籠【写真④⑩】に「神宮寺」と書かれていた。神宮寺は石川の下地にあった寺で、2001年（平成13年）に本堂が焼失した。なぜ神宮寺と記されたものがあるのかというと、これには神仏習合が深く関わっている。『神宮寺文書』の宝暦九己卯年の条〈注1〉によると、「稲崎大明神」・「大宮大明神」・「物部大明神」が、「石川村神宮寺支配」となっていた。神仏習合を背景に、稲崎神社・大宮神社・物部神社の別当職を神宮寺が受け持っていたと考えられる〈注2〉。「神宮寺」という名称自体が神仏習合を意味するものであると考えると、石造物の「神宮寺」という文字情報から近世の神仏習合の跡が窺える。

しかし、物部神社の1912年（大正元年）の玉垣には「皇祚無窮」と書かれていた【写真④③】。これは天皇家の繁栄を願う言葉である。ここでなぜ天皇家に関する言葉が登場した

のかということ、背景には神仏分離がある。神仏分離とは神仏習合の考え方をやめ、神社と寺院を区別させた考え方のことである。それにより、天皇家の神格化が目指された。そのため、この玉垣の「皇祚無窮」という言葉は神仏分離の結果を意味しており、石川における神社と寺院が分離したことを示している。

以上のように「神宮寺」から「皇祚無窮」という言葉の変化は神仏習合から神仏分離への移行を表すと考える。

なお、石川の人々のものの考え方も、近世までは「石川村講中（多田神社の手洗）」「町内中為安全（上地の地蔵）」など村・町単位のものであったが《表3》、近代以降には「皇祚無窮（物部神社）」のような国単位のものも現れたことが分かった点も付言しておく。

【第2節 年代の偏り】

年代が読み取れた灯籠や鳥居等の石造物を《表3》にまとめていく中で気付いたことがある。それは灯籠や鳥居が作られた年代が1840年代と1880年代～1900年代に偏っていることだ。そこで、石造物が多く造られている年代に石川村で何が起こっていたのかを経済面に着目して読み取ることとした。

（i）1840年代

《表3》にあるように、1840年代につくられた石造物は、年号が判明する石造物全28基のうち5基あり、1840年代に多く造られていることが分かる。

1842年（天保13年）に宮津藩では当時の水野忠邦の改革に従い奢侈の禁止と縮緬機業の停止を徹底して行った〈注3〉。当時、石川は石川村として宮津藩に含まれていたため、この改革も行われていた。奢侈と縮緬機業を結び付けて考えると、縮緬機業が栄えていたために奢侈な生活を送るようになったのではないかと推察できる。そして、縮緬機業が栄えていたということは石川地区の人々の収入も増えていたということである。収入が増え、石川の経済的な蓄積が培われたため、灯籠や鳥居を寄進することも可能であった。したがって、この年代に複数の石造物が立てられたのは機織り業が栄えていたためだと考える。

（ii）1880年代～1900年代

1880年代～1900年代の石造物は、年号が判明する石造物全28基のうち9基あり、数多く造られている《表3》。もちろん、近代に石造物が多く造られた理由としては、石造物が破損、倒壊したために新しく石造物が建てられたからだ。

しかし、理由はそれだけではないと考える。もう一つの理由として挙げられるのは何らかの経済的発展が石川でも起こったのではないかということだ。当時、石川では小学校が1873年（明治6年）から建設されはじめ、1879年（明治12年）に落成した。1908年（明治41年）には郵便受取所が開設された〈注4〉。石川の発展が窺われる。

石川の発展した理由として、機業の発展が考えられる。丹後地域の機業において1868年（明治元年）と1900年（明治33年）を比較すると機台数は1493機から3305機に増加し、縮緬の生産価格は約8倍にもなった〈注5〉。1891年（明治24年）には石川での機台数は113台もあった。さらに1893年（明治26年）には石川がある与謝郡も含まれた丹後の縮緬組合も結成された〈注6〉。これらのことから、石川にも機業に関する飛躍的な発展による経済発展が起こり、その経済的な富をもとに石造物が多く立てられたと考える。

(iii) まとめ

石川では、水田による収入に加えて、機織りによる蓄積があることが分かった。これを経済的な背景として、神社や寺院が建てられ、石造物が造られたと私たちは考える。

○第4章 石川の歴史地理的特質

石川の7つの地区である亀山・大宮・川上・上地・中地・下地・堂谷を巡検した結果、すべての地区に石仏や地蔵があることが分かった【写真⑤・⑪・⑭・⑮・⑰】。この章では、特に上地の小字「高津」の地蔵（万延元年）【写真⑤】に着目して石川の特質をまとめたい。この地蔵には、「町内中為安全」と書かれていた。これは、「町内の安全のために」という意味であるが、この文字にこめられた人々の思いから、石川の特質を考察する。

石川は野田川・香河川・奥山川（川上川）といった川があり、山に囲まれているため、自然災害が多い。当時は現在のように技術が発達していなかったため、川の氾濫や山崩れが起っていた。氾濫や山崩れが起きると農作物が思うように収穫できず、人々の生活を苦しめていた。それでも、人々は、谷からの水路や氾濫原を利用して水田を広げ、自然災害と向き合いながら農業を営んでいることが分かった。そのため、この地蔵の「町内中為安全」とは「災害から身を守る」と「農作物の豊作」の思いが込められている。このように、自然災害に向き合いつつ地形を利用して農業を発展させた点が、1つ目の石川の特質である。

また、この地蔵がある上地は、宮津谷を経由して宮津に向かう道と、香河峠につながる道、岩滝・宮津方面につながる道、水戸谷を経由して峰山・久美浜方面につながる道の4つの陸上交通ルートが交わる、人通りが多いところに建てられていたため《地図3》、

「旅をする人の安全」も祈願していたと考えられる。なお、補足しておく、物部神社の灯籠にも、「神宮寺 宮津 魚屋町 京屋 善衛門 寄進之」と書かれていたことから

【写真⑳】、石川と宮津城下町を結ぶ交通ルートを背景に、石川は他地域との人的ネットワークでつながっていたことがわかる。石川は、交通ルートが発達していて、人々の往来や物資の輸送などが活発だった点が、2つ目の石川の特質である。

そして、石川は江戸時代から機織り業が発達していた。第3章で述べたように、機織りで得た経済的な蓄積をもとに寺社の石造物が造られたが、上地の地蔵も同様の理由で作られただろう。機織り業が盛んであった点が、3つ目の石川の特質である。

上地の地蔵は「災害から身を守る」・「農作物の豊作」・「旅する人の安全」を祈願するために、機織りによる蓄積で造られた。石川の人にとって地蔵は心の支えだった。

○おわりに

石川の人々は古代より谷からの水路を利用しながら氾濫原や谷々に水田を営んだ。中世には、一色氏の石川城を中心に、山城や砦が築かれた。近世から近代には、機織り業が盛んになり、豊かになった。自然地形とうまく付き合い、人々は、石川を発展させた。

現在の石川は水田が広がってはいるものの、後継者不足により水田が宅地になっている場所があることが歩いて分かった。その時私たちは、ここが水田であったことをこれから生まれてくる石川の子どもたちが知ることはないのだと思うと、寂しくなった。私たちは今残っている景観や文化財の記録を未来世代に伝えていく大切さを訴えたい。

《資料1 注釈 参考文献》

◆注釈

○第1章 石川の概要と研究方法

〔注1〕『野田川町誌』の940、941頁

〔注2〕『宮津市史 史料編 第四巻』の720、721頁

〔注3〕『角川日本地名大辞典 京都府 上巻』119、120頁と『野田川町誌』87頁によると、この石川には、古代武烈天皇の皇后八田皇女の名代として矢田部が置かれていたと書かれていた。また、石川は『和名抄』物部郷に比定されている。そして、中世は「石川荘」、江戸期～1955年は「石川村」、1955年～現在は「石川」と呼ばれてきたと書かれていた。

○第2章 巡検から石川を読み解く

〔注1〕『野田川町誌』603、604頁

〔注2〕『野田川町誌』601、602頁

〔注3〕小字「大石谷」にある刑部玄蕃亮が城主であった枝ヶ城跡地も石川にあるが、目視できなかった。

〔注4〕以下に高津城跡地の写真を載せておく。

〔注5〕【写真⑧】以外の石積み跡の写真を載せておく。



↑高津城から見える中地と亀山と大宮
遠方まで見え、敵の侵入を発見できる。



↑高津城頂上からの石段
急傾斜が、山城の立地条件である。



↑巨大な石が確認できる。



↑【写真⑧】を拡大したもので、
加工の跡が見える。

〔注6〕川上地区の小字「塔石」にも石積みがあった【写真⑥】。【写真⑥】は木が茂っており、石積みを確認しづらいが、確かに存在した。この石積みがあった場所は、「ハカタ」にある砦跡地と、高津城跡地の中間に位置していた。「ハカタ」の砦跡地から高津城までは、距離があるため、連携がとりにくかったと推測する。「塔石」に、「ハカタ」の砦跡地と高津城の連携を助けていたような拠点の跡かもしれない。

〔注7〕《表1・2》によると、大宮の「石田」、上地の「前田」・「香田」・「中溝」、中地の「川田」などの小字がある。

〔注8〕以下の写真は、小字「前田」から見た山側に建てられている上地の集落である。

また、土砂崩れを防ぐために、山肌をコンクリートで固めていることも確認できる。

〔注9〕以下の写真では、中地の西禅寺近くの岩肌が見えている。

土砂崩れが起きやすかったのであろう。



〔注10〕『宮津市史 通史編 下巻』の185、186頁

○第3章 石刻文字から石川を読み解く

〔注1〕『野田川町誌』158頁

〔注2〕『野田川町誌』158、586頁

〔注3〕『野田川町誌』206頁

〔注4〕『野田川町誌』958～961頁

〔注5〕『野田川町誌』241、242頁

〔注6〕『野田川町誌』242、930頁

◆参考文献

- ・野田川町『野田川町誌』（1999年）
- ・宮津市『宮津市史 史料編 第一巻』（1996年）
- ・宮津市『宮津市史 史料編 第二巻』（1997年）
- ・宮津市『宮津市史 史料編 第三巻』（1999年）
- ・宮津市『宮津市史 史料編 第四巻』（2001年）
- ・宮津市『宮津市史 通史編 下巻』（2004年）
- ・『角川日本地名大辞典 京都府 上巻』（角川書店、1982年）
- ・遠藤宏之『地名は災害を警告する 由来を知りわが身を守る』（技術評論社、2013年）

《資料2 石川各地区の写真》

◆写真①～⑱ 「石川の巡検から発見したこと」

<上地地区 写真①～⑤>

【写真①】石川城跡地から見た、山田城跡地



【写真②】石川城跡地から見た亀山城跡地



【写真③】秋葉神社から流れる水路



【写真④】香河川に流れる水路（三合池付近）



<川上地区 写真⑥～⑱>

【写真⑤】上地の小字「高津」にある地蔵「町内中為安全」と記されている。



【写真⑥】小字「塔石」にある石積み



【写真⑦】小字「ハカタ」の棚田跡



【写真⑧】小字「ハカタ」砦跡地の石積み



【写真⑨】小字「ハカタ」の砦跡地の削平地



【写真⑩】小字「ハカタ」の砦跡地から見た宮津方面



【写真⑪】川上の石仏



<下地地区 写真⑬～⑱>

【写真⑫】小字「川ノ谷」の川の跡



【写真⑬】小字「物部谷」の谷地形とその谷川からの水路



【写真⑭】下地の小字「栗原」の石仏



<大宮地区 写真⑮～⑯>

【写真⑮】大宮神社の石仏



【写真⑯】小字「谷田」にある石取り場

玉の木石材店の説明版



石の採掘で削られている山肌



<堂谷地区・亀山地区・中地地区の石仏 写真⑰>

【写真⑰】

堂谷の小字「荒岡」の石仏



亀山の小字「坪ヶ内」の石仏



中地の小字「上田」の石仏



◆写真⑱～④⑧ 「石川の寺社で読み取った石刻文字」

<上地地区 写真⑱～②③>

【写真⑱】上地の大命神社



【写真⑲】大命神社の
文化 13 年の灯籠



【写真⑳】大命神社の
明治 31 年の灯籠



【写真㉑】上地の秋葉神社
明治 16 年の石碑



【写真㉒】上地の小字「田中」
付近にある、弘化 2 年の石碑



【写真㉓】上地にある嘉永元年申六月の灯籠



<中地地区 写真㉔>

【写真㉔】中地の西禅寺の
元禄 5 年の石碑



<堂谷地区 写真②⑤～②⑧>

【写真②⑤】堂谷の多田神社



【写真②⑥】多田神社の
寛保元年の手洗



【写真②⑦】多田神社の
明治17年の灯籠



【写真②⑧】多田神社の
文化8年の灯籠



<下地地区 写真②⑨～②⑳>

【写真②⑨】下地の物部神社



【写真③⑩】物部神社の寛政7年の灯籠

「神宮寺」



「宮津 魚屋町 京屋 善衛門 寄進之」



【写真③⑪】物部神社の
明治35年の灯籠



【写真③⑫】物部神社の
大正元年の玉垣「皇祚無窮」



【写真③⑬】物部神社の
文化10年の鳥居



【写真③⑭】物部神社の
明治32年の石碑「式内物部神社」



【写真③⑮】下地の神宮寺の
嘉永2年の石仏



<亀山地区 写真③⑥~④②>

【写真③⑥】 亀山の稲崎神社



【写真③⑦】 稲崎神社の
文化3年の灯籠「願主 亀山地区」



【写真③⑧】 稲崎神社の天保14年の灯籠
「願主 政右○ 石工 津田」



【写真③⑨】 稲崎神社の
明治9年の鳥居



【写真④⑩】 稲崎神社の
大正13年の玉垣



【写真④⑪】 稲崎神社の
明治39年の狛犬



【写真④⑫】 稲崎神社の灯籠
「別當 神宮寺 ○謹代」



<大宮地区 写真④③~④⑧>

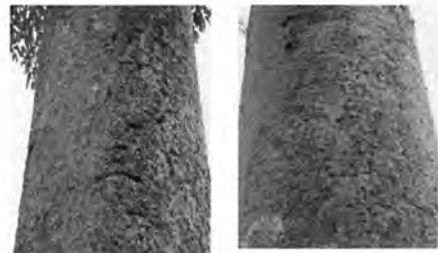
【写真④③】 大宮の大宮神社



【写真④④】 大宮神社の
天明4年の灯籠「神宮寺義謹代」



【写真④⑤】 大宮神社の
弘化3年の鳥居



【写真④⑥】 大宮神社の
明治22年の灯籠



【写真④⑦】 大宮神社の
明治28年の玉垣

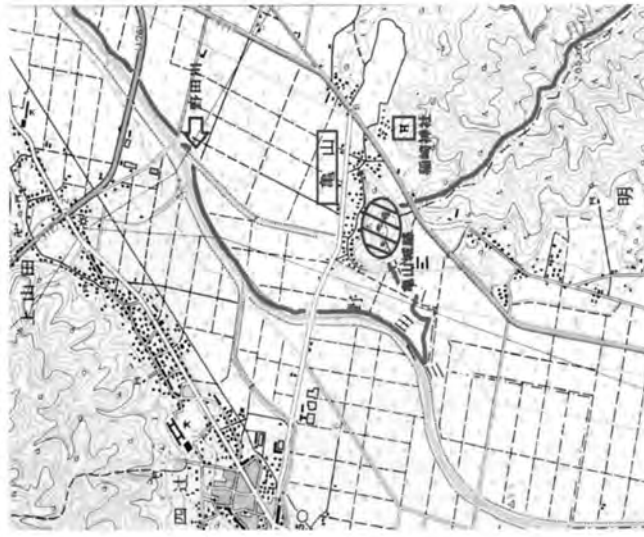


【写真④⑧】 大宮神社の明治39年の天井
「奉納大宮拝殿再建築〜 天下泰平日月晴明
大工棟梁 金谷 河邊 梶引 宮本」



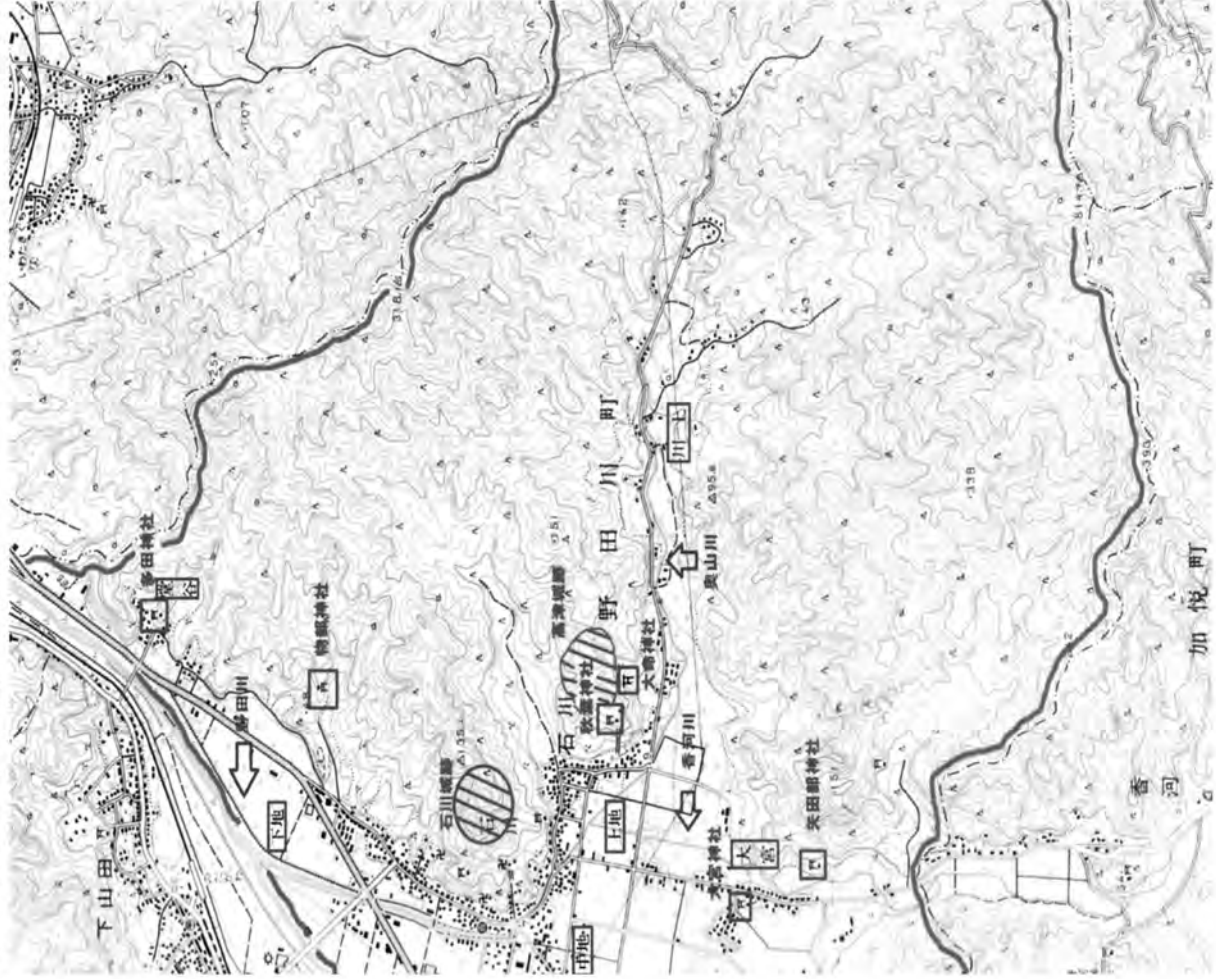
《地図1 亀山の地形図》

出典：地形図『四辻』（国土地理院、2001年発行）

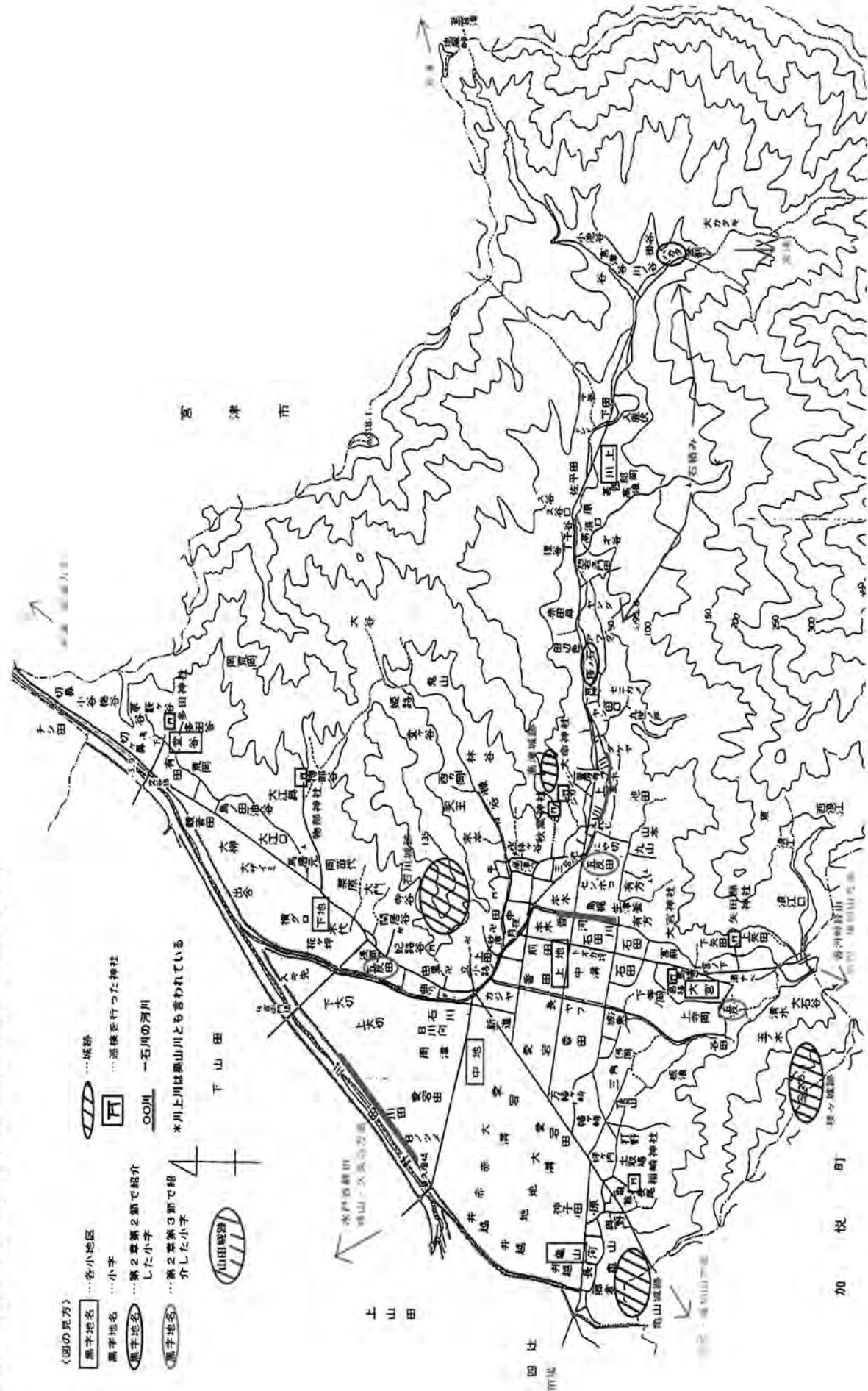


《地図2 石川東部の地形図》

出典：地形図『宮津』（国土地理院、2002年発行）



出典：『野田川町誌』字切図（野田川町、1969年発行）



《表 1 堂谷・下地・中地・上地地区の小字》

分類	小字名	備考
堂谷	チシ田	現在、水田として利用されている。
	切鼻	「切」は、「崩壊地」・「地すべり地」を意味する。切鼻は平野部にありますが、山側が急斜面であり、土砂災害警戒区である。
	小谷	「谷」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域であると考えられる。
	梅谷	小谷と同様に氾濫域と考えられる。「梅」は災害地名であるが、梅谷は平野部であるから、過去に湿地や池、川などを埋め立てた可能性が高い。(梅は埋めが転じた。)
	切ヶ鼻	「切鼻」と同様に考えられる。
	家谷	「谷」は水害地名であることから、この地域も野田川の氾濫域であると考えられる。
	藪ヶ谷	「藪」は、「低地」を表す水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、野田川の氾濫域だったと考えられる。
	多田谷	谷間に多田神社がある。
	荒岡	「荒」というのは、「荒れた田」を意味する。荒岡は、周囲より高いところにある。
	有田	「有」というのは、副詞アリニ(斜)に通じ、「斜面」をいう。有田に行ってみると近くが斜面になっていた。
	観音田	現在、水田として利用されているが、「観音」に関係するものは確認できない。
	岡荒岡	「荒岡」と関係があるかもしれない。
	鳥ノ田	「鳥」は、崩壊地名で、周囲が急傾斜であるから、土砂災害警戒区域である。
	大柳	「柳」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域だったと考えられる。
	油谷	谷地形であるが、「油」の由来は不明。
	大江口	「江」は、水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域であると考えられる。
下地	大江奥	大江口よりも山側にある。
	大ザイミ	現在、水田として利用されている。
	出合	「出合」は、野田川と香河川の合流地点のことを表していると考えられる。
	物部谷	谷間に物部神社がある。古代の物部郷に由来している地名である。
	馬居元	現在、墓があった。
	岡苗代	「苗」は、崩壊地名で山際に位置しているので、土砂災害警戒区域である。
	横グロ	
	木代	現在、水田として利用されている。
	スキ先	
	上大切	野田川の氾濫域である。
	下大切	「上大切」に対して野田川下流にあり、「下大切」と呼ばれる。
	大門	石川城の跡地周辺であるため、大きな門があったのではないかと考えられる。
	浅郷	「浅」は、崩壊地名、洪水地名である。小字付近に香河川が流れているため、香河川の氾濫域だったと考えられる。
	寺谷	「寺谷」の「寺」は、どこの寺を指しているのか不明である。
	閑居谷	閑居とは、神宮寺であると考えられる。神宮寺は、物部・大宮・稲崎神社を管理していたので、力を持っていたと考えられる。神宮寺は谷地形に位置していた。
	栗原	現在は、山際に集落が営まれている。栗が栽培されていたと考えられる。
中地	桃ヶ坪	現在は店舗地となっている。由来は不詳。
	五反田	条里制の跡を示す小字である。この地域社会は古代から成立している。
	妃路谷	妃路神社がある。谷地形である。
	由里	西禅寺がある。
	曲り	現在は住宅地となっており、由来は不詳である。
	砂原	砂原の「砂」とあることから土地が砂地であると推測される。
	日川向	現在は住宅地になっている。
	川田	野田川に近い水田であるから「川田」であると考えられる。
	上田	少し高い場所に水田がある。
	周津	現在は住宅地になっている。
	日ノツメ	現在は水田となっている。
	小路	福寿寺につながる細い道だと考えられる。調査の結果、他の道よりも明らかに細かった。
	カジヤ	「鍛冶屋」から転じて「カジヤ」になったと考えられる。現在は、鍛冶屋やそれらしき建物はなく、石川に隣接する山田には、「鉄鋳場」という鋳物師に関する小字がある。
上地	林ヶ谷	土砂災害警戒区域である。
	高津	秋葉神社に高津城跡地がある。
	田中	現在水田となっている。
	月夜	月夜の「夜」を「矢」と考えると、矢は水害地名である。河川沿いであるから、香河川の氾濫域であると考えられる。
	本木	「木」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に香河川が流れているため、香河川の氾濫域であると推測される。
	前田	前田は何かを基準としていると考える。石川城を基準としているのではないかと推測する。現在は、水田となっている。
	香田	香河川近くの水田だから、「香田」と名付けられた。
	五反田	律令時代に用いられていた条里制が由来である。
	センボコ	
	鳥梶	現在、水田として利用されている。
	中溝	「溝」は「低地」を表す水害地名で小字付近に香河川が流れているため、香河川の氾濫域だったと考えられる。
	大谷	「谷」は水害地名である。
	西ヶ岡	「岡」は小高い場所を意味する。何を基準として西としているかは、不明である。
	鬼山	鬼山の「鬼」は崩壊地名である。土砂災害警戒区域である。
	堂ヶ谷	「谷」は水害地名である。この小字は、山間部に位置しているため、鉄砲水・土石流の可能性が高い。
	姫路	
	天王	現在、山林となっている。
	末本	
	三合池	現在は町営住宅がある。由来は不詳。なお、池はなかった。
	トオカ坪	現在は、住宅と水田となっている。
上地	谷糠	現在は、山林となっている。調査の結果、谷地形であることが分かった。
	林谷	土砂災害警戒区域である。
	長ヤブ	現在、水田となっている。「ヤブ」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に香河川が流れているため、香河川の氾濫域だったと考えられる。
参考文献		『地名は災害を警告する 由来を知りわが身を守る』

《表2 亀山・大宮・川上地区の小字》

分類	小字名	備考
亀山	板楽	現在は、水田として利用されている。「板」は「低地」を表す水害地名である。
	愛宕	現在は、水田として利用されている。秋葉（愛宕）神社が由来だと考えられる。
	愛宕田	
	大溝	現在は、水田として利用されている。「溝」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域だったと考えられる。
	赤地	「あか」は、「赤」（赤土）または「場」（埴地）から由来されていると考えられる。現在は、水田として利用されている。
	井越	現在は、水田として利用されている。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域だったと考えられる。
	郷倉	現在は、集落が密集している。『野田川町誌』によると、石川の「郷倉址」があるとされる。
	奥野	現在は、住宅地になっている。「奥」は奥深いということなのだが、由来は、不明。
	神子田	現在は、水田として利用されている。「神子」の近くに稲崎神社がある。稲崎神社に関する水田であったと考えられる。
	万幡ヶ崎	
	幡ヶ崎	現在は住宅地となっている。
	坪ノ内	現在は水田となっている。「内」は「低地」を表す水害地名である。小字付近に野田川が流れているため、氾濫域だったと考えられる。
	長尾	現在は水田となっているが、フィールドワークから、山沿いにあることが分かった。「長」は浸食・崩壊地名であるから、土砂災害警戒区域である。
	亀首	現在は、水田となっているが、こも山沿いに位置している。「亀」は崩壊地名である。
	土取場	現在は、畑になっているが、昔は土をとっていたと考えられる。
	打野	由来は不明である。
	後山	現在は、畑になっている。由来は不明。
	三角	現在は、水田として利用されている。由来は不明。
	長阿	「長」は浸食・崩壊地名である。近くに野田川が流れているため、野田川の氾濫域である。また、傾斜地があり、土砂災害警戒区域である。
	原	現在は、水田として利用されている。
大宮	佛岡	フィールドワークでこの小字に行くと、山一帯が墓であった。このことから、「佛岡」の「佛」は、墓場と考えられる。
	大石谷	谷地形である。石材が取れていたのかもしれない。
	清水	
	玉ノ木	現在は、森となっている。
	上矢田	矢田部神社を基準として、香阿川の上流にあるから、「上矢田」になったと思われる。
	下矢田	矢田部神社を基準として、香阿川の下流にあるから、「下矢田」になったと思われる。
	瀬ナベ	現在は、水田として利用されている。「瀬」は「低地」を表す水害地名である。
	五反	現在は、水田として利用されている。「五反」は衆集制を由来としている。この小字は古代から存在していると考えられる。
	石田	現在は、水田として利用されている。
	谷田	現在は、山林となっている。山間部に位置しており、「谷」は崩壊地名である。石取り場があるため【写真⑥】、この小字名になったとされる。
	上寺岡	
	下寺岡	現在は、水田として利用されている。寺岡遺跡がある。香阿川の上下流にそれぞれ位置している。
	宮ノ下	現在は、水田として利用されている。「宮」は矢田部神社のことで、矢田部神社の付近にあることからこの小字になったと考えられる。
	宮後	「宮」は大宮神社のことで、大宮神社の後ろにあるからこの小字になったと考えられる。
	宮前	現在は、水田として利用されている。「宮」は大宮神社のことで、大宮神社の前にあることからこの小字になったと考えられる。
	馬場	昔、馬の休み場であったと推測される。
	板浪	現在は、山林になっている。山間部に位置しており、「板」は崩壊地名であるから、土砂災害警戒区域であると考えられる。
	有方	現在は水田として利用されている。「有」は水害地名であるから、氾濫域であると考えられる。
	生津釜	現在は、水田として利用されている。「釜」は水害地名であるから、低地を意味する。「生津」の由来は、不明。
川上	浪江	現在は、山林になっている。浪江古墳があるとされる。（調査の結果、発見することはできなかった。）
	浪江口	浪江に行き道の入り口に位置しているから、この小字になったと考えられる。現在は、木が伐採され、開発が進められていた。
	東	浪江に対して東であると考えられる。
	西浪江	「浪江」の西側に位置しているだけでなく、由来は不明である。
	にや切	現在は、水田として利用されている。「切」は崩壊地名である。周囲には、山があり、土砂災害警戒区域である。
	丸山	現在は、水田として利用されている。周囲に山があることから、この小字になったと推測する。
	えれじ	現在は、水田として利用されている。小字の由来は不明。
	山本	現在は、山林となっている。「山」は、周囲が山であるからだと考えられるが、「本」の由来は不明。
	池田	現在は、水田として利用されている。「池」は水害地名である。
	室木	現在は、水田として利用されている。小字の由来は不明。
	善房寺	現在は、地蔵堂がある。
	ジカンジ	「ジカンジ」は「慈観寺」であり、現在「慈観寺」は残っていない。
	荒神	荒神が祀られていたと推測される。
	ダケヤ	現在は、水田・畑として利用されている。「ダケ」を「タケ（竹）」と考えたが、フィールドワークの結果、周囲に竹はなかった。
	田口	現在は、水田として利用されている。周囲に水田があることから、この小字になったのだと推測される。
	ゼニガメ	現在は、水田として利用されている。
	踏石	現在は、山林となっている。フィールドワークの結果、山林に石積みを見つけた【写真⑥】。
	田辺色	現在は、水田となっている。
	赤田鼻	現在は、水田として利用されている。「鼻」を「花」と考えると、「花」は崩壊地名である。
	アワダ	現在は、水田として利用されていることから、「アワダ」の「ダ」は「田」と考えられる。「アワ」は「粟」と推測すると、粟を栽培していたと考えられる。
	ヤンダ	ヤンダ古墳がある（現在は、全壊している。）。上記の「アワダ」と同様に、現在は、水田として利用されているため、「ダ」は「田」を指す。
	九世ノ戸	現在は、水田となっている。由来は不明。
	惣右エ門田	現在は、水田として利用されている。惣右エ門という人の田であったと考えられる。（惣右エ門については説明できなかった。）
	狸谷	現在は、山林となっている。「谷」は水害地名である。「狸」とあることから、狸が多く出現していたと推測される。
	丁子原	現在は、水田として利用されている。「谷」は水害地名である。「丁子」の「丁」は崩壊地名である。
	原	現在は、水田として利用されている。「原」とは、「開墾地であったところ」を意味する。
	高浪口	現在は、水田として利用されている。「高」は水害・崩壊地名である。
	ス谷	
	ス谷口	現在は谷地形になっている。「谷」は水害・崩壊地名である。「口」は、入り口を意味すると考えられる。
	高浪	現在は、水田として利用されている。「高」は、崩壊地名である。由来は不明。
	甚四郎岡	現在は、水田として利用されている。フィールドワークの結果、削平地となっていた。（甚四郎については説明できなかった。）
	佐平田	現在は、水田として利用されている。調査の結果、平らな土地であったことから、この小字になったのだと考えられる。
	入鹿伏	現在は、山林となっている。小字の由来は不明である。
	下田	現在は、水田として利用されている。
	今谷	現在は、山林になっている。調査の結果、谷地形であった。
	ドンド	現在は、水田として利用されている。
	川ノ谷	
	小池谷	
	谷	「谷」は水害地名である。調査の結果、すべて谷地形であった。「川ノ谷」では、川が流れていたであろう跡地も発見できた【写真⑦】。
	掛谷	
	ハカタ	現在は、山林となっている。棚田の跡があったことから、その棚田を利用して、生活していたと考えられる【写真⑦】。「タ」は、「田」である。
	才谷	現在は、水田である。
	宮津谷	宮津につながる谷であるからだと考えられる。
	大カタギ	
	金割	現在は、山林となっている。由来は不明。
参考文献 『地名は災害を警告する 由来を知りわが身を守る』		

＜表3 石造物の文字情報＞

※表中の「書かれている文字」の「○」は読み取れなかった文字を指す。

神社	小地区	対象	年号	西暦	書かれている文字	備考
西禅寺	中地	石碑	元禄5年	1692	南無阿弥陀仏	南無阿弥陀仏は浄土系の信仰を示すが、しかし西禅寺は臨済宗。石碑は【写真②】参照。
多田神社	堂谷	手洗	寛保元年	1741	石川村 講中	手洗は【写真③】参照。
川上(道中)	川上	石碑	延享3年	1746	庚申講中	石川の川上にも庚申講があった。
大宮神社	大宮	灯籠(右)	天明4年	1784	神宮寺 義謹代 施主大石河嶋氏 善次郎 忠六	神仏習合により神宮寺が管理。1783年(天明3年)に丹後地方で大凶作。灯籠は【写真④】参照。
物部神社	下地	灯籠	寛政7年	1795	神宮寺 宮津 魚屋町 京屋 善衛門 寄進之	神仏習合により神宮寺が管理。宮津の京屋の善衛門はなぜ物部神社に寄進したのか、疑問が残る。灯籠は【写真⑤】参照。
稲崎神社	亀山	灯籠	文化3年	1806	願主 亀山地区	灯籠は【写真⑥】参照。
多田神社	堂谷	灯籠	文化8年	1811		1809年(文化6年)、宮津藩は縮緬業が農家の副業としてその主体になることを恐れ新機(新機)の営業停止をする法令を下す。灯籠は【写真⑦】参照。
物部神社	下地	鳥居	文化10年	1813		鳥居は【写真⑧】参照。
大命神社	川上	鳥居	文化13年	1816		鳥居は【写真⑨】参照。
稲崎神社	亀山	灯籠	天保14年	1843	願主 政右○ 石工 津田	1842年(天保13年)、宮津藩は幕府の改革に従い奢侈の禁止と縮緬機業の停止を命令した。 →機織り業により金銭を蓄え豪勢な暮らしを送っていたから。灯籠は【写真⑩】参照。
上地(道中)	上地	石碑	弘化2年	1845	南無阿弥陀仏	横に地藏堂がある。住宅の中にあり大通りに面している訳でもないのに、旅人の安全祈願というよりは住民の暮らしを見守るようなものだろう。石碑は【写真⑪】参照。
大宮神社	大宮	鳥居	弘化3年	1846	別當 神宮寺 ○○寺 願主○中 宮村住 石工 河嶋	鳥居は【写真⑫】参照。
上地(道中)	上地	灯籠	嘉永元年	1848	観音菩薩	前年の1847年(弘化4年)に丹後地震(木津地変)。丹後木津の山二尺落ち込んだという。灯籠は【写真⑬】参照。
神宮寺	下地	石仏	嘉永2年	1849		1822年(文政5年)の一揆の首謀者である新兵衛追悼のため。 →一揆の起こった年と造られた年に年代差があるのは、「罪人」である新兵衛らを追悼するものをすぐにつけて宮津藩に目をつけられるのを避けたからである。石仏は【写真⑭】参照。
上地(道中)	上地	地藏	万延元年	1860	町内中 為安全	町内(ここでは上地のことか)の住民の安全を祈るもの。地藏は【写真⑮】参照。
稲崎神社	亀山	鳥居	明治9年	1876	氏子中 成毛氏	豊岡県が廃されて京都府の所管に。 1880年(明治5年)大洪水。鳥居は【写真⑯】参照。
秋葉神社	上地	石碑	明治16年	1883		石碑は【写真⑰】参照。
多田神社	堂谷	灯籠	明治17年	1884		灯籠は【写真⑱】参照。
大宮神社	大宮	灯籠(左)	明治22年	1889	氏子中	灯籠は【写真⑲】参照。
大宮神社	大宮	玉垣	明治28年	1895	○旋人氏子 石工 川崎 河嶋	玉垣は【写真⑳】参照。
大命神社	川上	灯籠	明治31年	1898		国内の状況として、1894～1895年(明治27～28年)に日清戦争があった。灯籠は【写真㉑】参照。
物部神社	下地	石碑	明治32年	1899	式内物部神社	石当たりの米価が前年度より約2円上がっている。 →経済的な余裕が出たか。石碑は【写真㉒】参照。
物部神社	下地	灯籠	明治35年	1902	願主 西村	灯籠は【写真㉓】参照。
稲崎神社	亀山	狛犬	明治39年	1906	白須○○	狛犬は【写真㉔】参照。
大宮神社	大宮	本殿に奉納された板	明治39年	1906	奉納大宮拝殿再建棟 天下泰平 日月晴明 大工棟梁 金谷 河邊 挽引 宮本	拝殿が再建された。奉納された板は【写真㉕】参照。
物部神社	下地	玉垣	大正元年	1912	皇祚無窮	ここで天皇家を指す言葉が出てきている。 →「村」単位の考え方でなく、「国」単位の考え方に変わってきている。玉垣は【写真㉖】参照。
大宮神社	大宮	狛犬	大正2年	1913		
稲崎神社	亀山	玉垣	大正13年	1924	寄進者 白須○○	玉垣は【写真㉗】参照。

参考文献 『野田川町誌』



大村家墓所の研究

～大村家 16 代当主純伊及び 19 代当主喜前の没年と
石塔造立年の不一致について～

長崎県立壱岐高等学校

三尾 駿



大村家墓所の研究 ～大村家 16 代当主純伊及び 19 代当主喜前の没年と石塔造立年の不一致について～

長崎県立壱岐高等学校東アジア歴史・中国語コース

歴史学専攻 3 年 三尾 駿

1 はじめに

私が、「大名家墓所」を研究テーマとして選んだ経緯は、高校 2 年生の 8 月に「島外巡検」における経験によるものが大きい。私は、長崎県内にある文化財について学ぶ「島外巡検」で、大村市、長崎市、島原市、対馬市を訪問した。3 泊 4 日の巡検の中で特に感銘を受けたのは、私の地元でもある長崎県大村市（地図 1 参照）に位置する本経寺である。本経寺は大村家歴代の墓所として、藩主やその家族、家臣に至るまでの墓が多く立ち並んでいる。そこで、私は大小様々な石塔や墓石に施された技巧、形状などが異なっている所にとっても興味を惹かれた。私は大村家墓所の真髓を知りたいと強く感じたため、研究対象に選び、調べることにした。

また、研究を進めていく過程で、私は大村家 16 代当主・純伊（すみこれ）及び 19 代当主・喜前（よしあき）の石塔が没後数百年後に造立されたことを知った。これについて一般的に墓と言え、被葬者存命中、または死亡後時を置かずに造立されるものであるが、この両名については没年と石塔造立年に大きな時間的差異があった。ここに私が疑問を感じたことから、今回の研究テーマとした。

2 研究目的

大村家 16 代当主・純伊及び 19 代当主・喜前の両名の石塔がなぜ没後数百年後に造立されたのかを明らかにする。

3 研究内容

- (1) 本経寺（大村家の菩提寺）について
- (2) 大村家墓所について
- (3) 大村家当主の墓の形態について
- (4) 大村家歴代当主の墓の形態の変遷について
- (5) 大村家 16 代当主・純伊及び 19 代当主・喜前の石塔について
- (6) 大村家 16 代当主・純伊及び 19 代当主・喜前について
- (7) 大村藩と他藩の墓所との比較
- (8) 大村藩の史料から読み取れること

4 研究方法

大村家墓所がある本経寺および九州内の大名家墓所のフィールドワークを行う。

大村家の史料や研究論文、調査報告書、大名家墓所に関連する資料から研究を行う。

5 研究結果（※研究内容より、順を追って説明していく）

（1）本経寺（大村家の菩提寺）について

この寺院は、大村藩初代藩主・大村喜前によって慶長10年（1605）以降に着手され、慶長13年（1608）に完成し、以後大村家の菩提寺として位置づけられる。本経寺が建立された背景としては、大村領内で多くの者がキリスト教を信仰していたが、初代藩主・喜前のキリスト教禁教政策に伴い、仏教に転宗する必要があった。そこで、父・純忠が天正期に破壊した寺社を復興させ、藩が仏教に復教したことを公に示すために建立したということである。元々、本経寺が建立される前は、彦山派山伏修験道の日蔵坊があった所で、天正2年（1574）のキリスト教徒の蜂起によって日蔵坊が焼失し、キリスト教の大教会が建てられた場所であった。

キリスト教徒が蜂起した背景には、当時の大村家当主・純忠が日本初のキリシタン大名ということで、非常に信仰心の厚い人物であった。このことから、純忠は天正2年（1574）に領内の寺社をキリスト教徒に襲撃させて、多くの寺社を破壊した。実際に現在の墓域内から、1500年代前半～半ば頃の五輪塔（火輪1点、地輪残欠1点、緑泥片岩製）が確認されており、これらは日蔵坊時代の遺品と考えられている。また、キリシタン墓の特徴として伏碑も2基確認されている。

（2）大村家墓所について

大村家墓所は、本経寺境内の南側に位置する。藩主13基、正室及び側室16基、一族39基、家臣6基、法華塔4基の計78基が約2000坪の墓域に林立している。大村家墓所内には6メートルを超える藩主墓もいくつかある。この高さについて、藩主の権力の大きさや威厳を示すために造立したというのも一因であろうが、高さが6メートルになる3代藩主純信の頃からは、ちょうど幕府のキリスト教禁教が厳しくなる時期に重なり、これはキリシタン大名・大村家だったからこそ、より明確に仏教への信仰を幕府に証明する必要があったからではないかと考えられている。(1)

また、大村家墓所がある本経寺のすぐ側には、長崎街道（小倉－長崎間を結ぶ街道）が通っており、藩内外に仏教に対する信仰の深さを示すために、巨大な石塔を造立したとも推測できる。(2)

（3）大村家当主の墓の形態について

大村家当主の墓の形態については、3つの形態が採用されている。

1つ目は16代当主・初代藩主・2・6・7代藩主に用いられた有耳五輪塔、2つ目は3・4代藩主に用いられた笠塔婆、3つ目は5・8・9・10・11代藩主に用いられた石霊屋である。それら3つの形態については以下のとおりである。

【五輪塔】（※大村家では、有耳五輪塔）

下から四角・丸・笠・四角・宝珠を積み上げた墓。これら5つは密教の五大要素である地・水・火・風・空を表しており、中世期に多く造られた。また、大村家墓所においても、江戸時代初期から中期の段階では多く存在するが、19世紀以降は再築造された墓塔を除いて、造立されなくなっている。特に大村家では「有耳五輪塔」という特徴的な形式を採用しており、一般的な五輪塔とは笠石の火輪の部分に違いがみられる。（写真1参照）

【笠塔婆】

四角形の塔身の上に笠を持ち、さらにその上には宝珠が載せられている。江戸時代に墓塔として急増した形式である。塔身には墓標として被葬者の戒名が刻まれている。大村藩においては1655年から増加する傾向にあり、(3)その時期に造立された3代藩主・純信（1650年没）と4代藩主・純長（1706年没）の墓は特に6mを超える巨大なものである。（写真2参照）

【石霊屋】

全国的に見ても類例の少ない形態である。構造は、石造の廟の内部に位牌型の墓塔が納められており、上屋（屋根の上部）の中には墓石が納められている。（写真3、4参照）

（4）大村家歴代当主の墓の形態の変遷について

大村家歴代当主の墓の形態の変遷について表1を参照していただきたい。表1によると、五輪塔、笠塔婆、石霊屋の3つの形式を採用していることが分かる。また、表1中の写真を見ると、大村藩の石工たちの技術の高さを窺い知ることができる。備考に着目すると、被葬者の没年と墓の造立年はほぼ一致していることが判明している。(4)しかし、16代当主・純伊（すみこれ）及び19代当主・喜前（よしあき）の項目では、没年と石塔造立年に数百年の大きな時間的差異があることが分かる。

（5）大村家16代当主・純伊及び19代当主・喜前の石塔について

大村家16代当主・純伊及び19代当主・喜前の石塔はどちらも1805年に造立されたもので、形態は有耳五輪塔である。表1の高さの項目を見ると、純伊及び喜前の石塔は他の藩主と比べて、およそ1.6mと極端に低いことが分かる。この低い理由については、墓というよりも供養目的で造立されたものだから低くしたのではないかと、推測されている。(5)

さらに、写真5、6を見ても分かる通り、木造霊屋（他は石霊屋）の中に有耳五輪塔が納められているのは、大村家当主内において純伊と喜前のみであることから、純伊と喜前が大村家にとって特殊な存在であったと考えられる。

(6) 大村家16代当主・純伊及び19代当主・喜前について

供養の対象である純伊と喜前の略歴は以下のとおりである。

【16代当主純伊（1459～1523または1537）】

1501年の有馬貴澄との中岳合戦で敗れ、大村領から一時敗走した。戦勝祈願として伊勢神宮へ参宮し、6年後の1507年には大村領を奪回し、有馬氏と和解の後、その娘を室に迎えている。また、純伊の旧領回復を祝して、領民によって今日に伝わる大村寿司（戦勝祝いの寿司）や郡三踊（戦勝記念の踊り）⁽⁶⁾が生み出された。1806年には、その功績として太宗（大村家初代当主・大村直澄に次ぐ号）に定められた。

※純伊の没年に関しては以下の二説がある。

1523年説：1957年に発生した諫早大村大水害の際に、大村の三城からたまたま五輪塔の地輪の部分が見つかった。調査したところ、地輪の表面に『平朝臣前州太守純伊』とあり、これは大村純伊の五輪塔の一部として間違いないと結論づけられた。その根拠としては、五輪塔の表面に『大永三年』（1523年）とあり、大村純伊の生きていた時期に重なる。また、形態から見ても製作時期は1523年からあまり時を置かずに造られた可能性が高いとされた。

1537年説：江戸時代初期に編纂された系図や記録に記されている没年であることから、信憑性に欠ける。⁽⁷⁾

【19代当主喜前（1569～1616）】

キリシタン大名・大村純忠の子で、大村藩初代藩主。豊臣秀吉、徳川家康に仕えた。藩主就任後、喜前は権力強化を図るため御一門払いと呼ばれる政策を断行した。これは、領内において庶家一門が領有している土地が多く、本家を脅かしかねない勢力であったため、それらの所領を没収し、藩主勢力の統一化を成し遂げた。さらに、定期的に領内の検地調査も行っており、藩政改革を推進した。また、彼は元々キリシタンであったが棄教し、キリスト教弾圧を断行した。そして、大村藩の仏教復教の第一歩として、本経寺を建立した。1806年には、大村家の祖（大村直澄）、太宗（大村純伊）に次ぐ功績がある者として、中宗に定められた。

(7) 大村藩と他藩の墓所との比較

大村藩と他藩の墓所とでは何らかの差異があるのではないかと考え、以下に他藩の墓所の特徴をまとめた。調べた他藩は、大村藩と同様に九州に藩庁を置き、江戸時代を通して改易・転封がない外様大名とした。

この3藩と先の大村藩の表を比較すると、佐賀藩と薩摩藩の2藩は1つの形式を一貫して採用しており、ここに大村藩との違いが見られる。（大村藩は3つの形態を採用）

また、墓の総高においては約1～4m級の墓塔が目立つ。（大村藩では、6m級の墓塔もある）このことから、大村藩は3藩と比べて、墓の形式がばらばらで、塔の高さが高いということが分かる。つまり、墓に対する意識が他藩とは違うことが推測できる。（表2参照）

（８）大村藩の史料から読み取れること

私は、本研究の主題である「１６代当主純伊と１９代当主喜前の石塔が、没後数百年後になぜ造立されたのか」についての記載が大村藩の史料にあると考え、大村藩の藩政記録である『九葉実録』（８）などで記載の有無を確認した。「１６代当主純伊と１９代当主喜前の石塔が、没後数百年後になぜ造立されたのか」の理由を記載している史料はなかったが、『九葉実録』では、１８世紀末から大村藩の宗教的儀式が急増していることが分かった。（※宗教的儀式：先祖供養、忌引き、法会のこと）１８世紀末からの大村藩の藩主であった純鎮（すみやす・９代藩主）、純昌（すみよし・１０代藩主）の頃に、先祖供養に対する意識に何らかの変化があったと考えられる。

また、１６代当主純伊と１９代当主喜前の石塔の造立が１８世紀末からの先祖供養の一環であったと推測できる。（グラフ１参照）

６ 考察

最後に今回の研究結果を踏まえた上で考察する。まず、大村藩は小藩であったにも関わらず、巨大な石塔を数多く建立しており、大村藩にとって宗教政策がいかに重要であったかを示していると考えられる。また、１８世紀末から先祖供養をはじめとした宗教的儀式が数多く行われており、大村藩の宗教に対する姿勢に変化があったと推測できる。さらに、大村藩において功績のある１６代当主・純伊と１９代当主・喜前の石塔が造立された一因として、１８世紀末から先祖供養の数が急増したという事実から２人の石塔が造立されたのも、その一環ではないかと考えられる。

７ おわりに

今回の研究では、『墓所』の研究を行ったが、墓の知識だけではなく、墓を造立した政治的背景、墓を造立した際の藩の財政、キリスト教と仏教の抗争など、様々な知識が必要であることが分かった。

そして、今回の研究テーマである『なぜ、大村家１６代当主・純伊及び１９代当主・喜前の石塔が没後数百年後に造立されたのか』という問いの明確な答えを見出すことはできなかった。しかし、だからこそ謎が数多く残る大村藩の研究を大学でも続け、この研究テーマの真相を明らかにしたいと強く感じた。一方で、今回調べた大村藩のように政治や文化の中心地である江戸、大坂、京都などから遠く離れた地方大名の研究は、大大名に比べると、あまり進展していないように感じる。

よって、私は今後の研究において近世大名家をテーマにして、大名の新たな人物像を見出したい。そして、大名家の研究発展に貢献したいと考える。

【資料編】 地図や写真、表、参考文献など

1 地図・写真

地図 1 長崎県大村市の位置

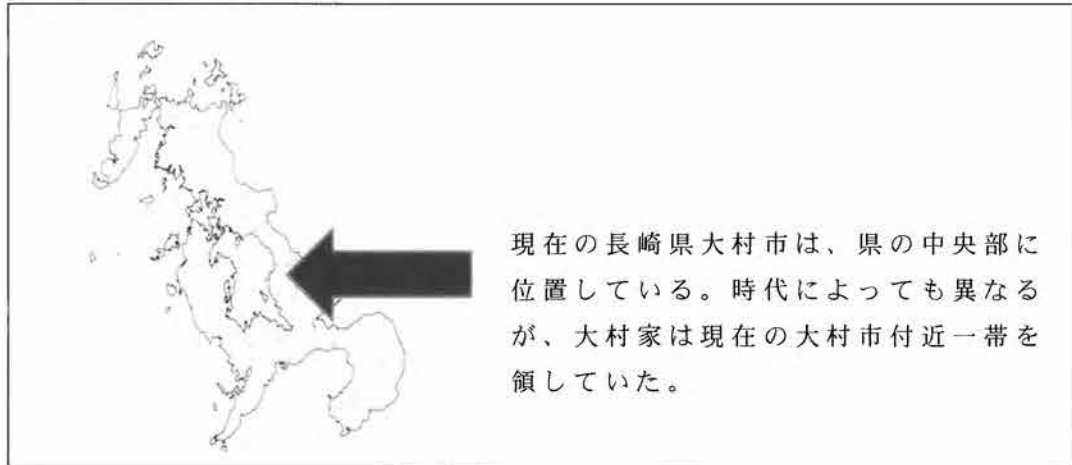


写真 1 有耳五輪塔



写真 2 笠塔婆



写真 3 : 石霊屋



写真 4 : 位牌型墓塔



廟の内部に位
牌型の墓塔

写真 5 : 木造霊屋



中にあり



写真 6 : 左 : 喜前 右 : 純伊



2 表

表 1 : 大村家歴代当主の墓の形態の変遷

(歴代当主の順番は、石塔造立年の古い方から順番に並べているため、途中順番が変化している。)

代	当主名	石塔の形態	高さ	写真	備考
2 0	純頼	有耳五輪塔	3.7m		1619 年没 製作時期はほぼ同じ
2 1	純信	笠塔婆	6.1m		1650 年没 製作時期はほぼ同じ
2 2	純長	笠塔婆	6.5m		1706 年没 製作時期はほぼ同じ
2 3	純尹	石霊屋 (中に位牌)	4.7m		1712 年没 製作時期はほぼ同じ
2 4	純庸	有耳五輪塔	6.6m		1738 年没 製作時期はほぼ同じ
2 5	純富	有耳五輪塔	6.9m		1748 年没 製作時期はほぼ同じ
2 6	純保	石霊屋 (中に位牌)	5.5m		1760 年没 製作時期はほぼ同じ

16	純伊	有耳五輪塔 (木造靈屋内)	約 1.6m		1523 年 or 1537 年没 1805 年に造立
19	喜前	有耳五輪塔 (木造靈屋内)	約 1.6m		1616 年没 1805 年に造立
27	純鎮	石靈屋 (中に位牌)	5.3m		1815 年没 製作時期はほぼ同じ
28	純昌	石靈屋 (中に位牌)	5.5m		1838 年没 製作時期はほぼ同じ
29	純顕	石靈屋 (中に位牌)	約 4m		1882 年没 製作時期はほぼ同じ

参考：『本経寺大村家石塔群』大石一久 平成16年より

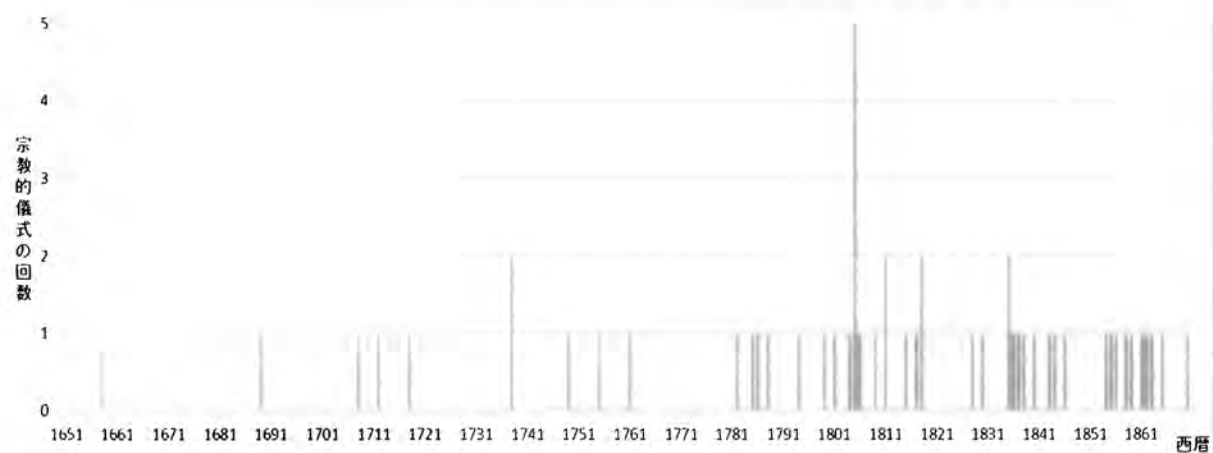
※写真は、筆者撮影

表2：久留米藩、佐賀藩、薩摩藩の墓所の状況一覧

藩	久留米藩	佐賀藩	薩摩藩
石高	約21万石	約35万石	約77万石
藩主	有馬家	鍋島家	島津家
墓所	梅林寺	高伝寺	福昌寺
墓の形態	三層塔、五輪塔、有耳五輪塔 (総高約1.3m～約4.0m)	有耳五輪塔 (総高約1～2m)	宝篋印塔 (総高約2.5m)

3 グラフ

グラフ 1 : 大村藩の宗教的儀式の数の変遷 (※歴代当主及び藩主のみ)
(参考:『九葉実録』)



4 注釈

- (1) 『国指定史跡 大村藩主大村家墓所』大村市教育委員会文化振興課制作に記載。
- (2) (1)と同資料、『新編 大村市史第3巻』 大村市史編さん委員会 平成27年 大村市に記載。
- (3) 1655年から笠塔婆が増加した背景として、1657年に大村領内で勃発した郡崩れによる所が大きい。なぜなら、江戸時代初期は、キリスト教禁教が厳しくなった時期で、そこに郡崩れという重大事件が起き、幕府から大村藩に対して疑いの目が向けられたからである。よって、石塔の高さを高くしたのは、戒名を刻むためのスペースの確保は勿論、本経寺の前にある長崎街道を往来する人々に大村藩が完全にキリスト教を棄教し、仏教に転宗したことを示すために、大きくしたということである。(『国史跡大村藩主大村家墓所保存管理計画書』 大村市教育委員会 平成19年 大村市教育委員会)、(『新編 大村市史第3巻』 大村市史編さん委員会 平成27年 大村市)、(『大村市の文化財』 大村市教育委員会 平成24年 大村市教育委員会)、(『本経寺大村家石塔群』 大石一久 平成16年 大村史談会)
- (4) 大村藩歴代藩主の没年と石塔造立年がほぼ一致していること(純伊及び喜前を除く)は、(『本経寺大村家石塔群』 大石一久 平成16年 大村史談会)の表にまとめられていた。
- (5) 16代当主・純伊及び19代当主・喜前の石塔の総高が他の藩主よりも低い点について、(『新編 大村市史第3巻』 大村市編さん委員会 平成27年 大村市)に記載あり。
- (6) 郡三踊の記述は、大村藩領の農村調査書『郷村記』に詳細に記載されている。郷村記とは、藩内48の村の地理書で、全79巻からなる。大村藩が天和元年(1681)以来、実に180年の歳月をかけて、文久2年(1862)に完成した大村藩領東西彼岸地方に対する詳細な農村調査書であると同時に、藩権力による一藩の総合調査書である。
- (7) 16代当主・純伊の没年の記述については、(『新編 大村市史第2巻』 大村市史編さん委員会 平成26年 大村市)にある。
- (8) 『九葉実録』とは、1636～1868年に至る藩政日記を編年集成したもので、4代藩主・純長以降の大村藩政の推移・内容を歴代藩主別に知りうる格好の史料である。

5 参考文献

- 『本経寺大村家石塔群』 大石一久 平成16年 大村史談会
- 『新編 大村市史第2巻』 大村市史編さん委員会 平成26年 大村市
- 『新編 大村市史第3巻』 大村市史編さん委員会 平成27年 大村市
- 『新編 大村市史第5巻』 大村市史編さん委員会 平成29年 大村市
- 『大村純忠』 外山幹夫 昭和56年 静山社
- 『図説 長崎県の歴史』 外山幹夫 平成8年 河出書房新社
- 『大村藩の産業経済史』 喜々津健寿 昭和55年 芸文堂
- 『大村史談 No. 1』 大村史談会編 昭和39年 大村史談会
- 『大村史談 第十四号』 大村史談会編 昭和53年 大村史談会
- 『大村史談 第十五号』 大村史談会編 昭和53年 大村史談会
- 『大村史談 第五十三号』 大村史談会編 平成14年 大村史談会
- 『大村史談 第五十五号』 大村史談会 平成16年 大村史談会
- 『大村市の文化財』 大村市教育委員会 平成24年 大村市教育委員会
- 『大村見聞集』 藤野保 清水紘一共著 平成6年 高科書店
- 『郷村記 第一巻』 藤野保編 昭和57年 国書刊行会
- 『郷村記 第二巻』 藤野保編 昭和57年 国書刊行会
- 『九葉実録 第一冊』 大村史談会編 平成6年 大村史談会
- 『九葉実録 第二冊』 大村史談会編 平成7年 大村史談会
- 『九葉実録 第三冊』 大村史談会編 平成8年 大村史談会
- 『九葉実録 第四冊』 大村史談会編 平成8年 大村史談会
- 『九葉実録 第五冊』 大村史談会編 平成9年 大村史談会
- 『九葉実録 別冊』 大村史談会編 平成9年 大村史談会
- 『国史跡大村藩主大村家墓所保存管理計画書』 大村市教育委員会 平成19年 大村市教育委員会
- 『骨は語る 徳川将軍家・大名家の人びと』 鈴木尚 昭和60年 東京大学出版会
- 『図説 徳川将軍家・大名の墓〔増補版〕』 河原芳嗣 平成15年 アグネ技術センター
- 『不變山永壽院 近世大名家墓所の調査』 坂詰秀一編 平成21年 雄山閣
- 『井戸屋日比谷家所縁 貞龍院殿墓所の調査』 坂詰秀一編 平成20年 天下長久山國土安穩寺
- 『近世大名葬制の考古学的研究』 松原典明 平成24年 雄山閣
- 『石造文化財6』 石造文化財調査研究所 平成26年 雄山閣
- 『近世大名墓の成立』 大名墓研究会編 平成26年 雄山閣
- 『近世大名墓所要覧』 坂詰秀一監修 平成22年 ニューサイエンス社
- 『近世大名墓の世界』 坂詰秀一・松原典明編 平成25年 雄山閣
- 『チャート式 新日本史』 門脇禎二 平成26年 数研出版
- 『日本キリシタン墓碑総覧』 大石一久編 平成24年 南島原市教育委員会
- 『久留米藩主有馬家墓所Ⅰ』 久留米市市民文化部文化財保護課 平成27年 久留米市教育委員会

『薩摩藩主島津家墓所（福昌寺跡）調査報告書』 鹿児島市教育委員会 平成29年 鹿児島市教育委員会文化財課

『史跡対馬藩主宗家墓所本堂修理工事報告書』 対馬市教育委員会 平成22年 対馬市教育委員会文化財課

『厳原町誌』 厳原町誌編集委員会 平成9年 厳原町

『14 対馬藩主宗家墓所の現状と保存整備』 尾上博一 平成22年 立正大学考古学会

『月刊考古学ジャーナルNo. 690、2016』 平成28年 ニューサイエンス社

『徳川歴代将軍事典』 大石学 平成25年 吉川弘文館

『江戸三百藩全史』 石橋敏行 平成28年 スタンダード株式会社

『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会（東京大学埋蔵文化財調査室） 平成13年 柏書房株式会社



長崎県壱岐市 馬立(もうたる)海岸遺跡の研究

長崎県立壱岐高等学校
東アジア歴史・中国語コース
歴史学専攻(13回生)

江口 幸希
木樽 栓
滝川 和遥
森 進



はじめに

古来から大陸と日本を結ぶ要の位置にあった壱岐は中国の歴史書『三国志魏書東夷伝倭人条(魏志倭人伝)』に「又南渡一海千余里名曰瀚海至一大國(一支国)」と記述されており、一支国の王都として特定されている特別史跡の原の辻遺跡が有名である。それ以外にも全長 91m の双六古墳など様々な史跡があり、2015 年には日本遺産第 1 号に指定された。このようなさまざまな歴史遺産に恵まれている壱岐において、私たちは身近な歴史をもう少し深く調べてみよう、壱岐の縄文時代の遺跡を研究することとした。壱岐の縄文時代の遺跡に関する研究論文を読んでいくと、思った以上に研究が進んでいない遺跡があることに気づいた。その中で、普段は海の中であって、潮がひいている時間帯だけ遺跡が海面から現れるという遺跡があることに驚き、私たちの学校から程近い馬立海岸遺跡を調べることにした。

1. 馬立海岸遺跡の概要

馬立海岸遺跡は、壱岐市郷ノ浦町坪触字小下シ・小形に位置する遺跡である(第 1 図)。この遺跡は東西約 100m、南北 200m 程の遺跡である。馬立は「モウタル」と発音するが、1860 年に著された『壱岐名勝図誌』には「モウタル」という記載がある。馬立海岸遺跡は 1985 年に発見された遺跡であるが、現在でも発掘調査は行われていない。これまで馬立海岸遺跡からは黒曜石剥片などが採集されており、肉眼観察ではほとんど佐賀県の腰岳産のものとみられている。鈴桶型剥片を思わせる縦長剥片が認められているので縄文時代後期頃の遺跡だと考えられている(古澤 2015)。

壱岐の縄文遺跡は串山ミルメ浦遺跡(勝本町)・松崎海岸遺跡(勝本町)・鎌崎海岸遺跡(郷ノ浦町)・名切遺跡(郷ノ浦町)等、壱岐島の西側の潮間帯に立地する例が多く(古澤 2014)、この馬立海岸遺跡も同様の立地環境にある(第 1 図)。潮間帯に立地するので干潮時には姿を現すが、満潮時には水没する。

潮間帯に縄文時代の遺跡が営まれることは考えられず、遺跡形成時には陸地であったことが推定される。その遺跡が使われていた時代から今に至るまでの間にその土地が沈降した可能性がある。このことはハイドロアイソスタシー(氷河性海水準変動)によって説明されている(中田ほか 1994)。大陸氷河の融解によって海水量が増え、その海水の荷重で地殻が沈降する一方、海水荷重のない諫早市より東側は隆起したという仮説である(長岡 1998)。諫早市より西側の長崎県域では海面下を含む標高の低い場所に縄文時代の遺跡が分布する例が多い。大村湾から五島列島へ地殻傾動を伴う沈降が起きており、壱岐島の縄文遺跡もこれに該当する可能性がある。

2. 地表調査の実施

(1) 地表調査の概要

馬立海岸遺跡の様相を探るため、2017 年 5 月 24 日(水) 15 時 30 分~17 時 00 分に長

崎県壱岐市郷ノ浦町坪触字小下シ・小形地先の海岸で地表調査を実施した。調査においては、私たち生徒4名と引率教諭に加えて、長崎県埋蔵文化財センターから3名の指導者にも同行して頂いた。初めは石ころと黒曜石の区別がなかなかつかなかったが、長崎県埋蔵文化財センターの先生方に石ころと黒曜石の見極め方を指導して頂いたことで、1時間半の表面採集で多くの黒曜石を拾うことができた。

(2) 出土遺物

地表調査の結果、黒曜石剥片 15 点、安山岩製石器 13 点、黒曜石原石 101 点、計 129 点を採集した（第2図、第3図）。

1~15 は黒曜石製石器である。1~4 は鈴桶型と思われる縦長剥片である。5 は剥片の基部側に両端から抉りを入れたつまみ形石器とみられる。6~8 は剥片である。9 は削器である。一辺に微細な剥離がみられ、刃部となっている。10 は石核である。11~15 は剥片である。

16~26 は安山岩製石器である。16,17 は剥片である。18 は抉状搔器である。刃部に微細な剥離がみられる。19 は不明石器である。20 は搔器である。21 は削器である。

22~26 は剥片である。1~26 の黒曜石製・安山岩石製剥片等は、波に洗われ摩耗しているものが多い。

27~58 は黒曜石原石である。黒曜石原石の長さは 18.64mm~56.93mm のものがあり、一般的に小形である。表面はあまり摩耗しておらず、ごつごつしている。またこれらの原石は小さな無数の窪みと溶食痕があり、色が赤っぽくなっているという特徴がある。

(3) 馬立海岸遺跡の年代

今回の地表調査では多数の黒曜石剥片等を採集できたにもかかわらず、縄文土器は一点も発見されなかった。そのため遺跡の詳細な年代は絞り込むことができない。しかし、遺跡の時期を示す遺物として 1~4 の鈴桶型剥片と、5 のつまみ形石器とみられる石器が挙げられる。これらの遺物は従来の研究によると縄文時代後期頃に特徴的にみられるということが判明している(小畑 2002)ので、この遺跡の年代も縄文時代後期を中心とする時期であると考えられる。なお、馬立海岸遺跡の付近には、名切遺跡(長崎県教育委員会 1985)と鎌崎海岸遺跡(横山・田中 1979)が所在しているが(第1図)、これらの遺跡でも黒曜石製鈴桶型剥片とつまみ形石器が出土しており、その関連性が想定される。

3. 黒曜石原産地の分析

多数の黒曜石や安山岩製石器を採集したので、それらの原産地推定を行うために蛍光 X 線分析を行った(第4図)。今回の分析には長崎県埋蔵文化財センターに設置しているエネルギー分散型蛍光 X 線分析装置(SII ナノテクノロジー社製:SEA1200VX)を使用した。その結果は、第1表のとおりである。なお長崎県埋蔵文化財センターで九州島の黒曜石の蛍光 X 線による判別図はすでに作成されたことがあり(川道ほか 2017)、その判別図に今回分

析したデータをプロットした(第6図)。

判別図によれば Rb 分率では黒曜石は大きく 2 群に分かれる。A 群は腰岳系のエリアにおさまることから産地は腰岳であると認められる。B 群は壱岐の黒曜石産地である印通寺のエリア近くにプロットするため壱岐島内産であると考えられる。また Sr 分率でも同様に大きく 2 群に分かれる。A 群は腰岳系、B 群は印通寺付近にプロットするので、Rb 分率の結果と整合性がある。なお第 1 表の 3,4,9 の 3 点の Sr 分率は腰岳系とほぼ同じラインにあるが、 LogFe/K の値が低くなっている。しかし、Rb 分率では腰岳系一致しており、あわせて腰岳系と判断した。また安山岩は Rb 分率では福井川系と一致しているので、福井川系であると考ええる。一方 Sr 分率では福井川系と一致していないが、それと分布範囲の距離はわずかであり、Rb 分率では福井川系と一致するので安山岩は福井川系と判断した。

以上の分析をふまえて判別図(第6図)と出土遺物(第2図、第3図)を見比べてみると腰岳系の A 群にプロットされている黒曜石と福井川系にプロットされている安山岩はすべて石器と剥片であった。一方、壱岐系の B 群にプロットされている黒曜石はすべて原石であった。このことから馬立海岸遺跡は黒曜石原産地であるにもかかわらず、その石材は使用されず、馬立海岸遺跡から 54km 離れた腰岳産(第7図)をもっぱら使用していることがわかった。

4. なぜ在地系黒曜石は使われなかったのか

黒曜石製石器として壱岐産の黒曜石が使われなかった理由として「壱岐産の黒曜石の質が悪いから石器を作るのに適していなかった」と仮説を立ててみた。それを検証するために実際に壱岐産の黒曜石を割って石鏃を作ることができないか検証することにした。

(1) 石器製作実験の内容

① 道具をそろえる

必要な道具：マッコウクジラの歯、敲石、鹿の角(もしくは銅の棒)、狸の皮(第8図①)
各材料の用途と使い方：マッコウクジラの歯と敲石は主に原石を打ち砕いて剥片を作る時に打つものとして使った。鹿の角は薄い平らな剥片の上から押さえつけて剥がし落とす押圧剥離という精密な加工を施す際に用いる。鹿の角がなければ鹿の角と銅の棒は弾力性があるところが似ているということだったので、私達も今回は銅の棒を使って押圧剥離の作業を行った。これら 3 つの道具に共通する点は、すべて原石よりも少し柔らかい材質であることである。原石よりもかたい物質で打つと原石自体に傷がついてしまうため原石よりも少し柔らかい物質で打つ必要がある。原石を割るときと剥片の形を整える押圧剥離のときに、原石や剥片を包むために狸の皮を用いる。

② 剥片を作る

壱岐産黒曜石原石と腰岳産黒曜石原石と比較すると、壱岐産は小さいものが多い(第8図③)。原石から剥片を作成するためにまず、マッコウクジラの歯と敲石を用いて加撃する(第8図②)。ここで重要なのが端を狙って打つということである。真ん中で打ってしまうと剥片が分厚くなってしまい後で石鏃を作る時に労力がかかるので端で打たなければならない。その中から石鏃を作ることができそうな薄平らな剥片を選ぶ。腰岳産黒曜石原石を加撃すると、硝子を割ったときのように高い音が鳴り、剥片の表面も硝子のように光沢を帯びており、波紋のような混ざった模様が残り、内面は綺麗に衝撃波が伝わったのがわかる。一方壱岐産黒曜石原石は、腰岳産黒曜石原石よりは高い音ではなく少し鈍い音が鳴り、剥片の表面には不純物を含み、複雑な線がはいり、衝撃波がうまく伝わらなかったのがわかる(第8図④)。

また、実体顕微鏡で10倍に拡大してみても、腰岳産は薄平らな均等に剥がれた透明硝子質の剥片であるのに対して壱岐産は光が透けることもなく、厚さもまばらで、不純物も含まれている剥片であることがわかる(第8図⑤)。つまり腰岳産黒曜石原石の原石は質がよくて、壱岐産黒曜石原石の原石は質があまりよくないことが確認できた。腰岳産黒曜石剥片は、押圧剥離で加工する際に綺麗に割れやすく形を整えやすかった。一方、壱岐産黒曜石剥片は押圧剥離で加工する際にもジャリジャリと鈍い音が鳴り、思い通りに剥がすことができず、形を整えるのが難しかった。以上のように実際に石鏃を作ってみると、腰岳産黒曜石剥片は加工しやすく、壱岐産黒曜石剥片は加工しにくい、ということがわかった。

③大まかな輪郭を作る

石鏃を作れそうな剥片を選び終わると次は鹿の角や銅の棒を用いて余計なところを押圧剥離で剥がし落としていった。注意すべきところは力を入れすぎると剥片が折れてしまうことである。折れても石鏃を作ることは可能だが、石鏃が小さくなるので力加減に気をつけた。また剥れ落ちた剥片を注視すると厚さに違いがあることがわかる。この違いは、敲石が当たった打瑠が分厚くなり、打瑠から離れるにつれて薄くなっていく。従って剥片の一番分厚い部分を矢に取り付ける足として活かし、厚い部分を押圧剥離で加工すると石鏃が作りやすい。

④石鏃になるまで加工をする

石鏃の先端を尖らせたり、でこぼこをなくすなど石鏃として使えるようになるまで加工していく。加工をしすぎると先ほども書いたように剥片が折れてしまうので止め時を考えながら加工をしていく必要がある(第9図①)。

(3) 結果

腰岳産原石は剥片がまとまって取れ、もろくなく、とても加工がしやすく作りやすかった。一方壱岐産原石は粘り気がないため剥片がまとまって取れず、もろくすぐに取りれてしまうため加工がしづらく作りにくかった。そのため腰岳産原石からは4人とも石鏃を作ることができたが(第9図②)、壱岐産原石からは1人も作ることができなかった(第9図③)。また壱岐産の黒曜石は不純物が多く入っており、質が良いとは言えなさそうだ。実験を指

導した多久市教育委員会の岩永雅彦氏は壱岐産の原石から石鏃を作ることは可能だが、生産性が低く効率が悪いのであまり使わないだろうとおっしゃられた。壱岐産の原石で作ることはできるが、生産性がよくないためほぼ仮説どおりといっても良い。

まとめ

馬立海岸遺跡は縄文時代の潮間帯遺跡である。私たちは今回長崎県埋蔵文化財センターの方々にご協力頂き馬立海岸遺跡で表面採集をした。採集した黒曜石製石器をみると鈴桶型剥片やつまみ形石器など縄文時代後期にみられる石器が発見されたため、縄文時代後期の遺跡と考えた。また表面採集した黒曜石の剥片・原石・安山岩の成分分析を行い、その黒曜石の産地を調べ比較すると剥片は腰岳産で、原石は壱岐産であることがわかった。なぜ壱岐産の黒曜石を使わないのかという疑問を持ち、それを検証するために実際に壱岐産と腰岳産で石鏃を作ってみることにした。結果は壱岐産の黒曜石では石鏃を作ることができなかった。実験の結果から馬立海岸遺跡では壱岐産の黒曜石からは石器を作ることが難しいので、わざわざ腰岳などの壱岐島外からの黒曜石を使っていたと考えた。今回の研究で馬立海岸遺跡では壱岐産の黒曜石は使われていないことがわかった。今後は壱岐の他の縄文遺跡でも同じように壱岐産の黒曜石は使われていないのかということを調べ、研究していきたいと思う。

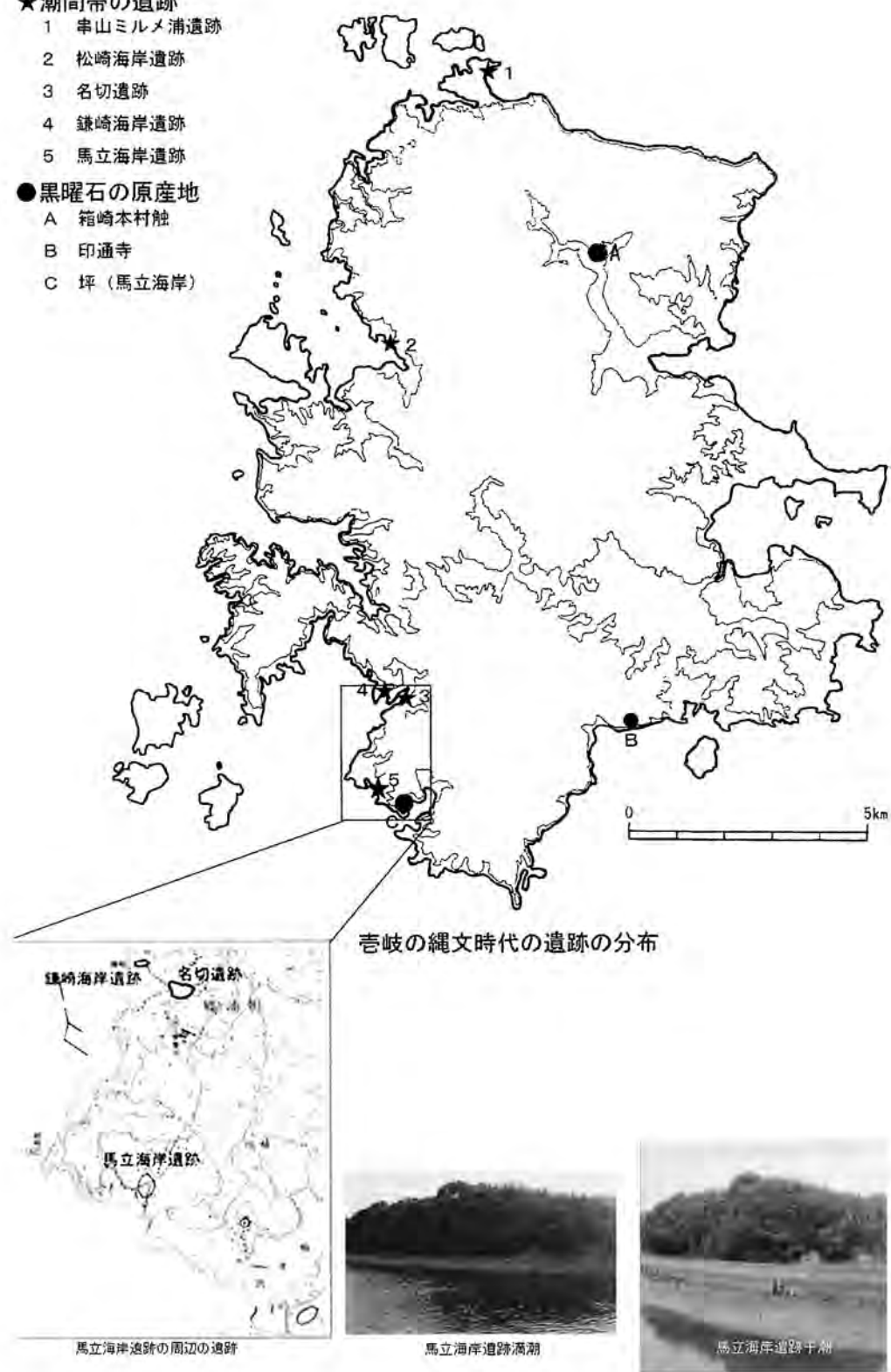
資料

★潮間帯の遺跡

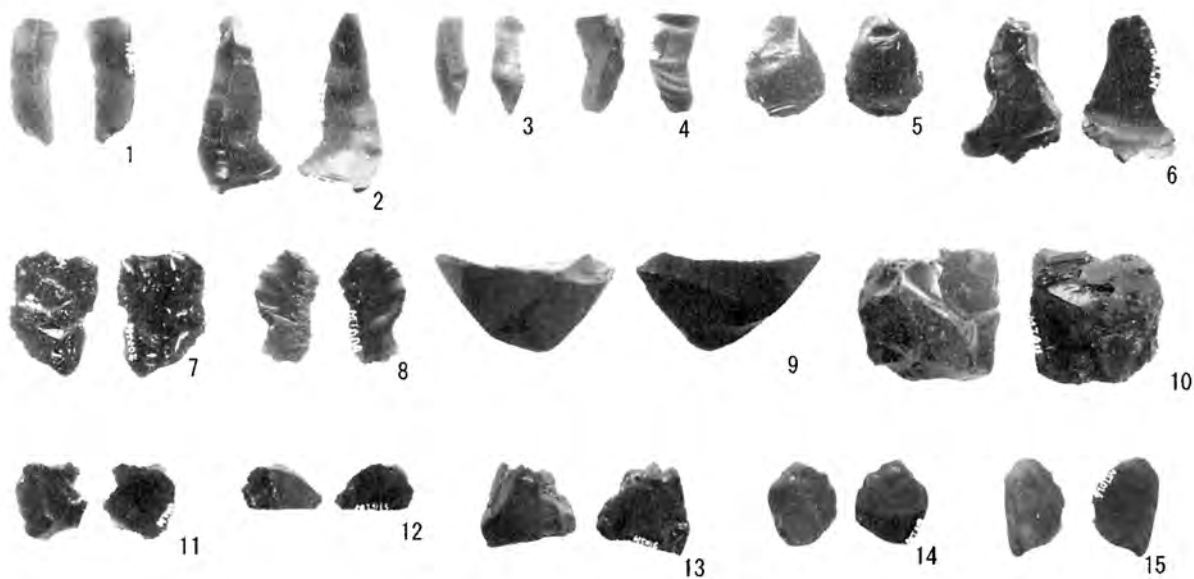
- 1 串山ミルメ浦遺跡
- 2 松崎海岸遺跡
- 3 名切遺跡
- 4 鎌崎海岸遺跡
- 5 馬立海岸遺跡

●黒曜石の原産地

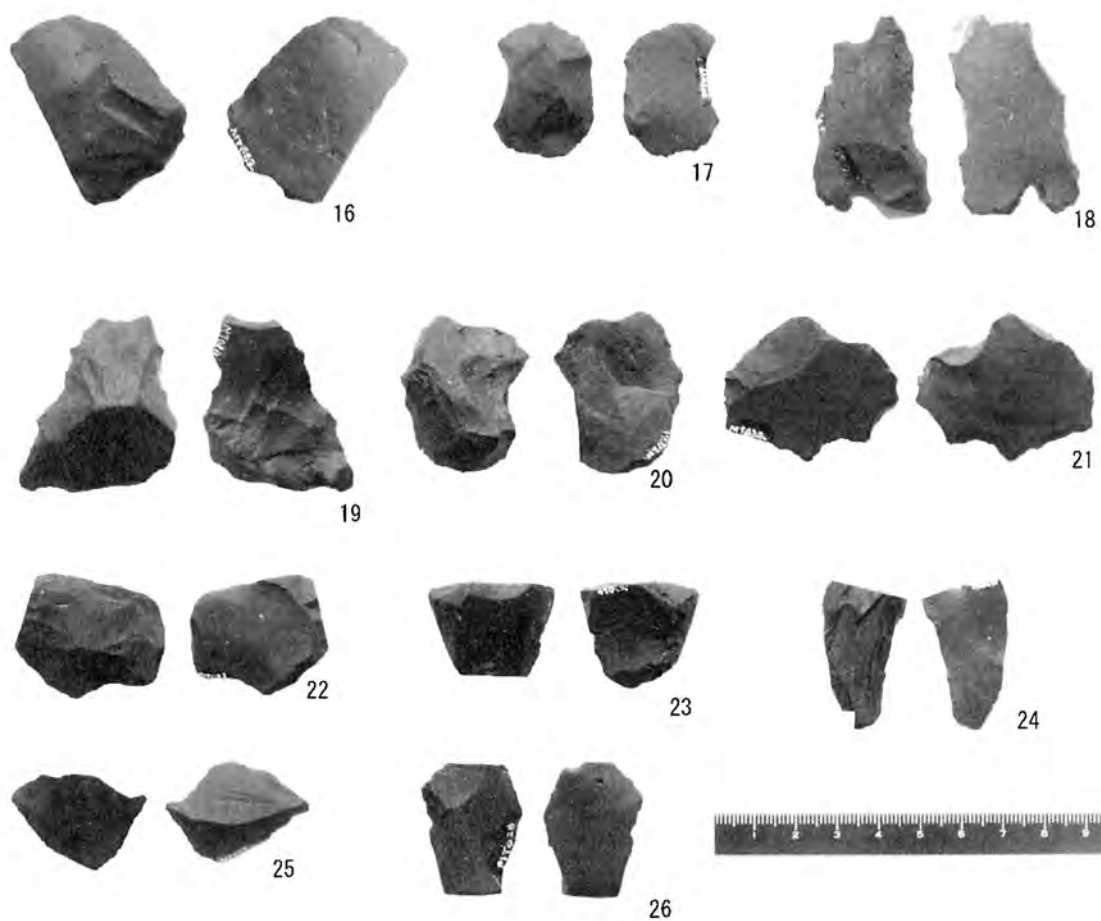
- A 箱崎本村舩
- B 印通寺
- C 坪（馬立海岸）



第1図 遺跡の位置と関連情報

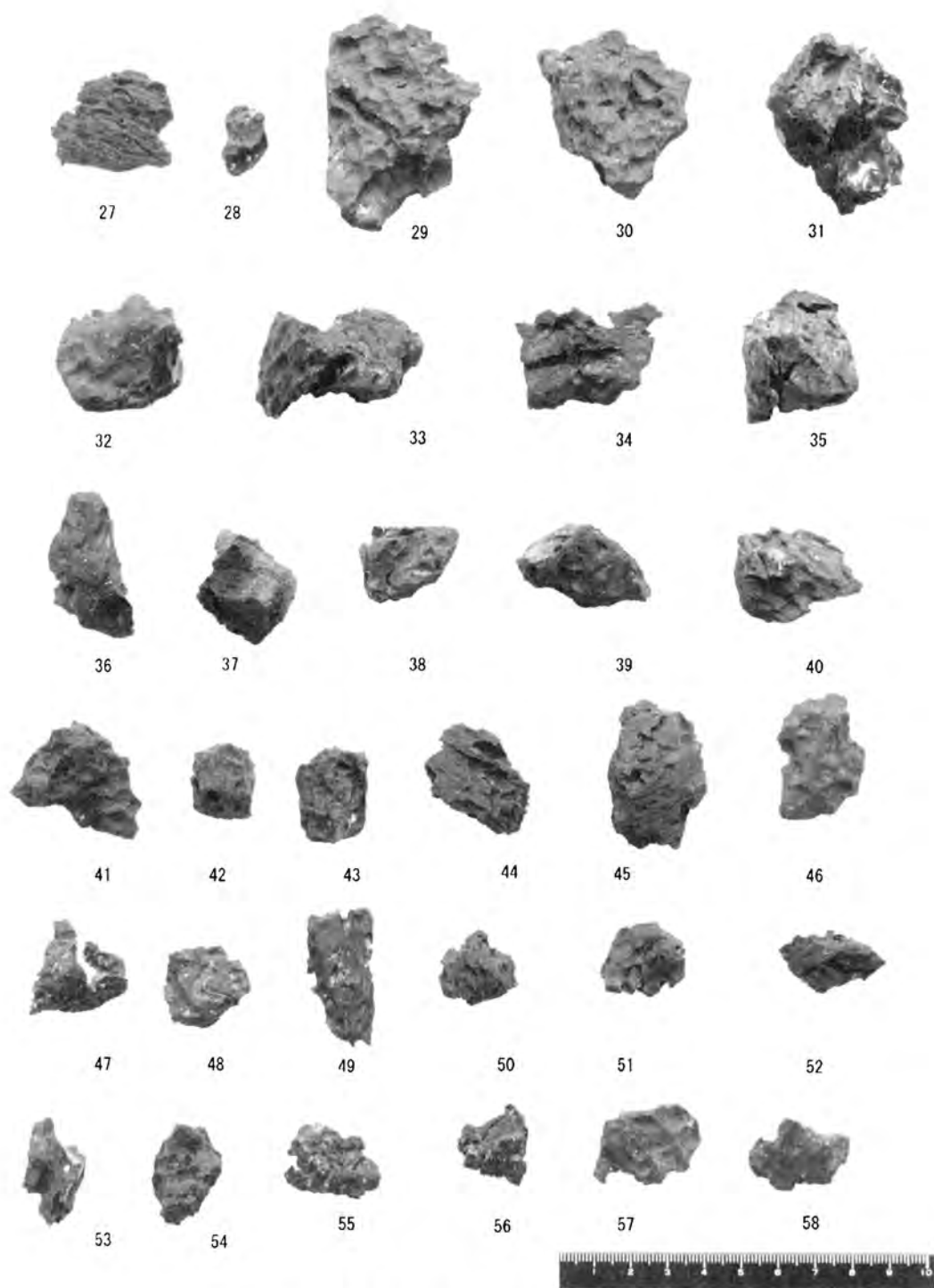


黑曜石製石器



安山岩製石器

第2図 馬立海岸遺跡採集資料(1)



第3図 馬立海岸遺跡採集資料(2)

第1表 馬立海岸遺跡石器計測表

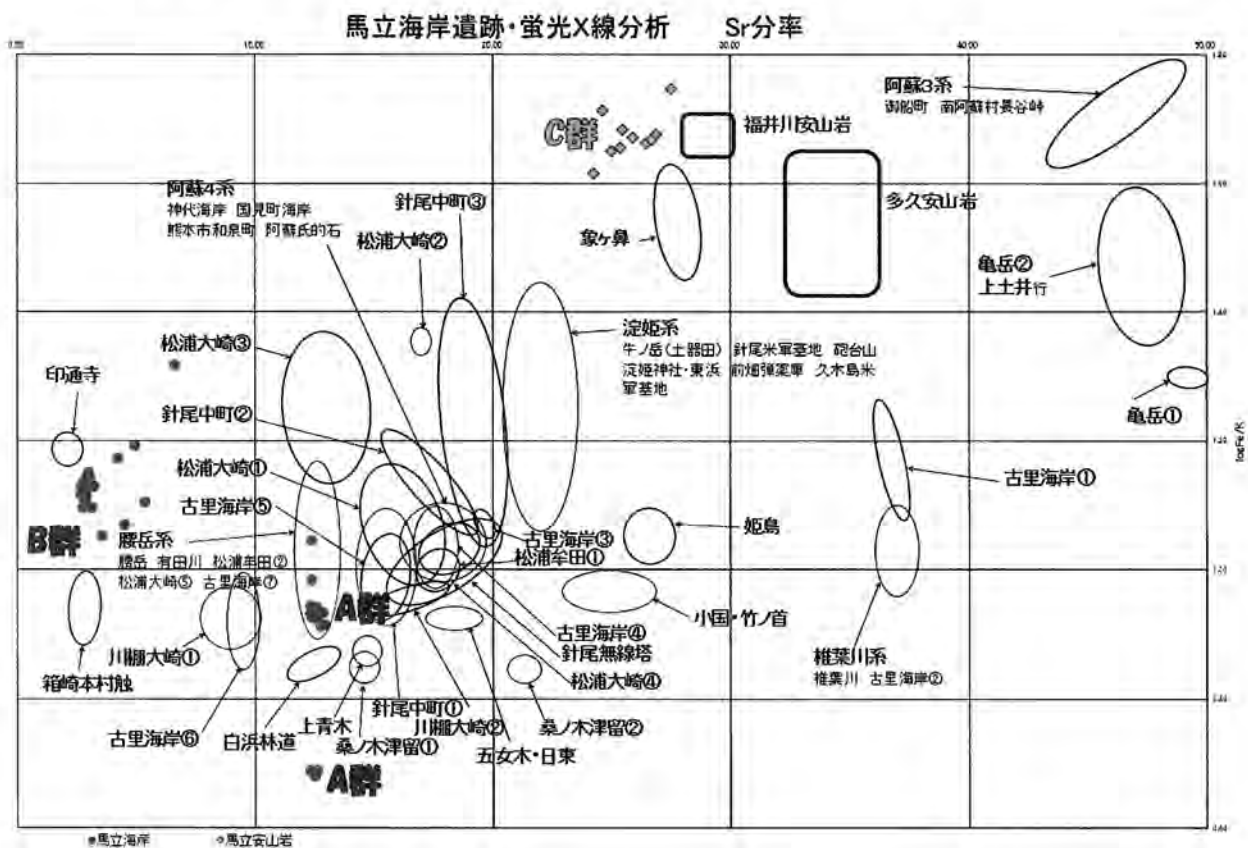
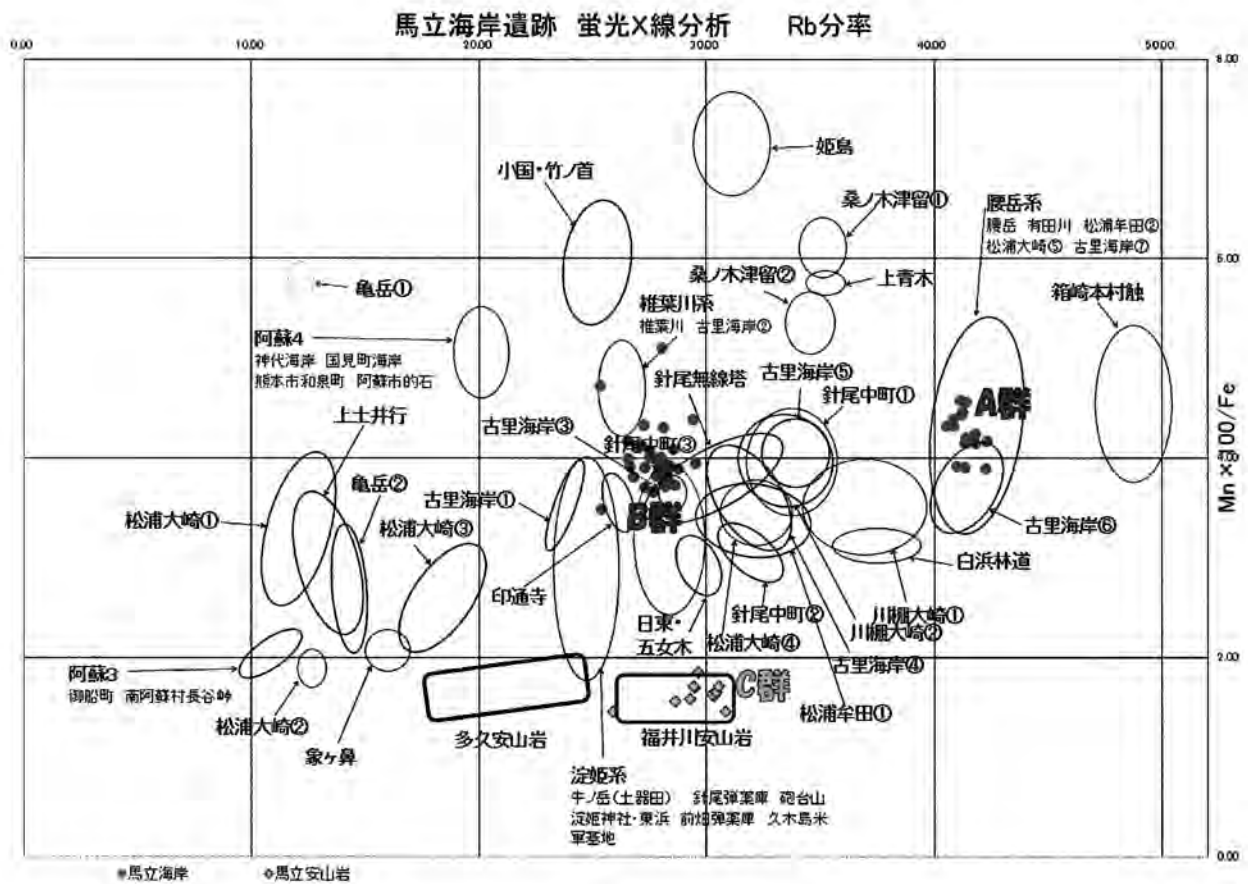
No	器種	法量				蛍光X線分析										
		長さ	幅	厚さ	重量	K	Mn	Fe	Rb	Sr	Y	Zr	Rb分率	Mn×100/Fe	Sr分率	logFe/K
1	剥片	30.89	11.76	2.55	1.51	66.60	24.39	555.86	309.75	95.70	131.40	221.28	40.66	4.39	12.62	0.92
2	剥片	43.02	21.04	3.49	2.84	61.55	22.69	526.36	289.83	91.09	123.16	204.93	40.88	4.31	12.85	0.93
3	剥片	25.68	9.02	3.61	0.69	120.11	24.22	585.78	339.57	103.83	141.13	236.01	41.38	4.13	12.65	0.69
4	剥片	24.91	12.11	3.03	0.95	122.80	22.74	585.13	337.84	100.16	135.66	225.11	42.30	3.89	12.54	0.68
5	つまみ形石器?	25.24	20.97	4.12	2.08	74.37	26.83	633.62	333.67	98.50	133.18	232.81	41.80	4.23	12.34	0.93
6	剥片	35.54	25.71	5.99	3.93	58.38	22.13	512.37	286.25	87.20	122.58	209.17	40.59	4.32	12.37	0.94
7	剥片	31.01	20.37	4.57	3.13	69.90	25.35	572.24	321.74	101.16	133.50	223.80	41.24	4.43	12.97	0.91
8	剥片	27.19	16.05	3.12	1.65	68.65	24.93	559.37	319.90	98.90	132.32	223.50	41.30	4.46	12.77	0.91
9	削器	42.39	25.54	15.98	13.27	125.31	25.41	610.70	346.35	100.88	141.26	229.58	42.34	4.16	12.33	0.69
10	石核	34.49	35.87	21.25	21.49	66.94	25.13	644.23	317.46	94.99	134.31	220.72	41.36	3.90	12.38	0.98
11	剥片	20.62	19.06	3.76	1.73	63.27	24.32	532.43	303.63	91.54	129.51	213.13	41.15	4.57	12.41	0.93
12	剥片	19.00	12.42	3.86	0.91	68.70	24.52	584.16	317.04	97.92	131.40	219.18	41.41	4.20	12.79	0.93
13	剥片	22.75	20.90	10.12	4.87	71.13	25.68	621.07	324.28	97.40	132.76	220.70	41.84	4.13	12.56	0.94
14	剥片	20.17	16.86	6.68	2.47	68.37	29.50	754.86	338.96	102.25	139.45	245.39	41.03	3.91	12.38	1.04
15	剥片	24.55	15.59	5.03	2.00	66.49	62.04	570.80	313.20	95.15	127.69	220.10	41.42	10.87	12.58	0.93
16	剥片	51.17	48.21	10.98	24.49	54.23	40.60	2574.09	300.58	275.80	154.71	295.03	29.29	1.58	26.88	1.68
17	剥片	36.97	25.93	9.99	10.32	48.99	35.25	2185.92	281.65	231.82	147.07	267.80	30.34	1.61	24.97	1.65
18	挟持器	51.17	31.46	8.82	15.58	49.96	43.51	2787.84	295.31	283.50	153.44	299.01	28.64	1.56	27.49	1.75
19	不明石器	49.03	33.94	16.65	24.69	27.92	21.32	1150.86	164.56	134.72	90.69	165.90	29.60	1.85	24.24	1.62
20	搔器	38.49	31.24	15.45	21.89	51.16	39.92	2353.52	297.22	266.74	154.81	290.22	29.46	1.70	26.44	1.66
21	削器	35.56	20.66	7.49	15.85	51.24	39.23	2405.33	305.04	260.82	155.24	287.40	30.25	1.63	25.86	1.67
22	剥片	36.51	29.24	10.49	14.20	52.88	41.95	2546.13	314.62	263.01	163.09	293.10	30.43	1.65	25.44	1.68
23	剥片	31.01	27.95	14.95	13.88	45.94	42.47	2910.23	262.11	321.41	138.52	290.81	25.88	1.46	31.73	1.80
24	剥片	35.25	20.61	7.79	6.60	57.12	45.44	2657.26	329.18	298.32	170.03	321.41	29.42	1.71	26.66	1.67
25	剥片	30.27	27.02	10.88	6.25	56.95	43.97	2579.79	322.49	267.98	166.31	300.13	30.51	1.70	25.36	1.66
26	剥片	33.99	22.92	5.46	6.08	52.19	39.25	2692.81	307.65	245.39	157.36	287.05	30.84	1.46	24.60	1.71
27	原石	36.76	28.25	8.35	9.06	61.89	30.76	829.91	259.61	30.66	145.34	515.89	27.28	3.71	3.22	1.13
28	原石	20.91	13.11	6.42	1.97	72.45	37.63	966.04	279.45	28.65	151.77	563.45	27.31	3.90	2.80	1.12
29	原石	56.93	42.99	17.79	36.19	68.89	38.23	988.50	290.38	29.87	151.80	512.23	29.50	3.95	3.03	1.15
30	原石	51.12	41.07	20.00	28.54	69.89	48.60	952.11	279.03	27.87	151.76	536.07	28.05	5.10	2.80	1.13
31	原石	47.56	45.09	25.19	31.80	11.97	7.16	151.63	48.63	10.35	30.78	102.14	25.34	4.72	5.39	1.10
32	原石	35.24	29.78	18.34	24.18	70.89	35.09	919.24	282.10	29.80	161.84	540.79	27.81	3.82	2.94	1.11
33	原石	46.11	34.89	19.25	26.69	64.12	35.94	862.13	279.70	34.11	160.35	578.53	26.57	4.17	3.24	1.13
34	原石	41.03	25.86	13.88	13.03	65.62	33.19	907.80	283.03	31.48	153.76	555.16	27.65	3.66	3.08	1.14
35	原石	41.89	27.11	29.61	24.74	55.64	40.11	1150.91	273.84	71.44	153.48	578.81	25.41	3.48	6.63	1.32
36	原石	36.38	35.88	26.94	25.48	84.64	40.99	1102.29	311.60	29.01	166.54	582.22	28.60	3.72	2.66	1.11
37	原石	42.12	21.72	12.74	9.90	71.02	37.43	957.17	287.82	29.65	158.88	603.52	26.65	3.91	2.75	1.13
38	原石	35.24	28.87	21.64	16.27	31.73	49.19	3287.22	142.90	216.31	81.88	617.14	13.50	1.50	20.44	2.02
39	原石	28.12	22.16	11.42	8.20	75.38	40.17	1009.83	288.63	29.15	161.49	556.56	27.87	3.98	2.81	1.13
40	原石	38.56	22.25	18.36	13.35	75.61	39.06	1050.87	293.61	30.98	159.88	557.17	28.19	3.72	2.97	1.14
41	原石	36.76	26.30	16.96	11.29	74.78	40.70	1016.11	303.49	31.67	163.88	605.13	27.49	4.01	2.87	1.13
42	原石	36.29	24.09	10.83	10.51	67.86	33.81	907.42	277.12	28.73	152.51	526.34	28.14	3.73	2.92	1.13
43	原石	20.99	18.11	12.36	5.68	71.83	35.46	938.10	277.26	27.07	150.90	523.59	28.33	3.78	2.77	1.12
44	原石	26.38	20.27	11.75	7.20	74.86	39.25	984.12	282.30	30.58	156.68	594.76	26.52	3.99	2.87	1.12
45	原石	27.87	23.25	22.96	11.55	79.20	43.10	1109.07	311.81	32.60	166.36	572.40	28.79	3.89	3.01	1.15
46	原石	40.82	29.76	26.02	25.50	63.50	33.70	860.73	291.30	30.76	158.20	551.75	28.23	3.91	2.98	1.13
47	原石	36.78	26.85	14.43	10.92	71.32	38.60	945.86	290.07	28.15	157.06	541.00	28.54	4.08	2.77	1.12
48	原石	26.28	23.62	14.36	6.54	82.05	36.56	959.68	290.40	48.80	159.73	583.92	26.82	3.81	4.51	1.07
49	原石	23.98	23.84	11.12	5.75	76.37	48.61	1183.45	281.44	51.47	156.62	551.20	27.04	4.11	4.95	1.19
50	原石	39.23	19.00	9.16	6.39	61.64	39.39	915.69	260.88	39.35	141.57	486.97	28.09	4.30	4.24	1.17
51	原石	22.54	18.88	13.40	4.55	66.27	32.68	744.94	283.07	34.24	145.47	498.76	29.44	4.39	3.56	1.05
52	原石	26.39	16.37	13.61	5.66	75.38	39.28	965.97	286.87	29.53	156.72	569.82	27.51	4.07	2.83	1.11
53	原石	27.60	18.08	12.16	4.23	68.72	37.75	872.64	263.03	27.87	150.76	524.06	27.24	4.33	2.89	1.10
54	原石	27.86	22.38	10.31	5.43	69.16	35.57	889.58	273.16	28.35	148.46	537.68	27.66	4.00	2.87	1.11
55	原石	23.05	17.83	9.65	6.20	70.07	38.60	938.37	286.55	29.47	154.68	585.02	27.14	4.11	2.79	1.13
56	原石	26.70	13.61	12.48	5.29	73.01	40.09	1001.80	305.00	31.85	164.97	587.20	28.01	4.00	2.92	1.14
57	原石	18.64	10.09	11.68	3.76	81.50	38.95	1012.02	296.33	28.95	164.62	558.48	28.27	3.85	2.76	1.09
58	原石	31.78	20.98	8.64	6.01	70.47	33.97	877.63	273.45	30.89	151.08	523.82	27.92	3.87	3.15	1.10
59	原石	27.56	19.58	9.95	4.10	82.63	40.40	1031.09	307.97	30.50	166.56	581.43	28.35	3.92	2.81	1.10



第4図 蛍光X線分析作業風景



第5図 遺物整理作業



第6図 馬立海岸遺跡・蛍光X線分析判別図



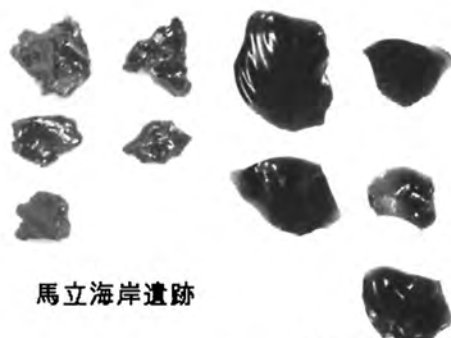
① 石器作り道具



② 石器作り風景



③ 製作に使用した原石



④ 作成した剥片



馬立海岸遺跡 ×10



腰岳 ×10

⑤ 実体顕微鏡の拡大

第8図 石器製作（1）



① 石鏃の製作

- ・ 手ごろな剥片を選択
- ・ 打点側を基部にして大まかな整形
- ・ 押圧剥離で石鏃に仕上げる



② 実験で製作した石鏃（腰岳産）

1～3・7 完成品

4～6 製作中に折れたもの

③ 製作途中で断念 （馬立海岸出土沓岐産）

8・9は押圧剥離が
できず途中で放棄

第9図 石器製作（2）

【引用・参考文献】

- 宇都宮恵・田島俊彦・塚原博・角縁進・長岡信治・2003「野首遺跡における石器の石材と原産地の推定」『野首遺跡』小値賀町文化財調査報告書第17集、小値賀町教育委員会
- 大沼克彦 2002 『文化としての石器作り』学生社
- 小畑弘己 2002 「縄文時代の石刃—鈴桶型石刃技法について」『青丘学術論叢』20、59-82 頁
- 川道寛・片多雅樹・辻田直人 2017「長崎県における黒曜石原産地研究の進展—原の辻遺跡原ノ久保地区石器群の分析を通して—」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』7、21-41 頁、長崎県埋蔵文化財センター
- 坂田邦洋 1982 『「九州の黒曜石」—黒曜石の原産地推定に関する考古学的研究—』広雅堂書店
- 橘昌信 2002「九州地域における黒曜石研究の展望」『黒曜石文化研究』創刊号、83-94 頁、明治大学博物館
- 中田正夫・前田保夫・長岡信治・横山祐典・奥野淳一・松本英二・松島義章・佐藤裕司・松田功・三瓶良和 1994 「ハイドロアイソスタシーと西九州の水中遺跡」『第四紀研究』33(5)、361-368 頁、第四紀学会
- 長岡信治 1998「第1節長崎県の地形と地質」『原始・古代の長崎県 通史編』51-80 頁、長崎県教育委員会
- 長崎県教育委員会 1985『名切遺跡』長崎県文化財調査報告書第71集、長崎県教育委員会
- 古澤義久 2014「玄界灘島嶼域を中心にみた縄文時代日韓土器文化交流の性格—弥生時代早期との比較—」『東京大学考古学研究室研究紀要』28、27-80 頁、東京大学考古学研究室
- 古澤義久 2015「壱岐市郷ノ浦町馬立海岸遺跡採集資料」『島の科学』52、27-35 頁、壱岐「島の科学」研究会
- 横山順・田中良之 1979「壱岐・鎌崎海岸遺跡について」『九州考古学』54、1-21 頁、九州考古学会

第11回全国高校生歴史フォーラム 研究タイトル一覧

(レポート受付順に掲載)

研 究 タ イ ト ル	高等学校名
日本近代農業教育の先駆け ～ウィードと京都府農牧学校の奮闘～	京 都 府 立 須 知 高 等 学 校
学徒出陣と江橋慎四郎先生	神 奈 川 県 立 湘 南 高 等 学 校
与謝郡与謝野町石川の歴史地理的特質 ―巡検と石刻文字から読み解く―	京 都 府 立 宮 津 高 等 学 校
京都からフランスの空へ ～忘れられた飛行家小林祝之助～	京 都 府 立 鴨 沂 高 等 学 校
田中城に見る九州の中世城郭	熊 本 県 ・ 九 州 学 院 高 等 学 校
源 頼朝	静 岡 県 立 韮 山 高 等 学 校
徳川家康長寿の秘密	//
山中城跡	//
日本の火起こし	//
井伊 直虎	//
西周	//
源頼朝が鎌倉幕府を開けた理由	//
伊東を中心とした石丁場	//
みくりやの救世主 伊奈半左衛門	//
第二次世界大戦の悲惨さ	//
狩野川台風	//
丹那トンネルの歴史	//
三嶋大社の歴史	//
韮山の歴史	//
龍城	//
韮山の歴史「江川邸」	//
熱海について	//
静岡を知る	//
富士山の噴火について	//
百人一首に込めた思い	//
韮山柔道の歴史 ～講道館韮山分場成立したわけ～	//
アインシュタイン	//
小林多喜二についての研究	//
反射炉の調査	//
伊東祐親	//
韮山城の歴史について	//
名古屋城から徳川家康を知る	//
韮山という地域	//
北海道十勝 帯広開拓の歴史	//
静岡県の歴史 中世	//
蜂須賀家墓所の特徴を探索	徳 島 県 ・ 徳 島 文 理 高 等 学 校
上牧久渡古墳に関する考察	奈 良 県 立 高 田 高 等 学 校
周桑手漉き和紙の研究と地域の活性化	愛 媛 県 立 丹 原 高 等 学 校
高山右近と高槻城について	兵 庫 県 ・ 仁 川 学 院 高 等 学 校
大村家墓所の研究 ～大村家16代当主純伊及び19代当主喜前の没年と石塔造立年の不一致について～	長 崎 県 立 壱 岐 高 等 学 校
七湯の歴史	静 岡 県 立 韮 山 高 等 学 校
たたら製鉄	兵 庫 県 ・ 雲 雀 丘 学 園 高 等 学 校
一乗谷朝倉氏遺跡に見る中世の人々の暮らし	//
蒸気機関車の日本社会における歴史的役割についての研究	//
土御門上皇の足跡を追って	//

研 究 タ イ ト ル	高等学校名
服部天神宮の歴史	兵庫県・雲雀丘学園高等学校
池田氏と荒木村重	〃
大阪倶楽部 ～北浜のビル街に佇む100歳超の建築～	〃
人気の城の歴史	〃
呉造船所で造られた兵器から考える第二次世界大戦	〃
神様に心惹かれる日本人	〃
藤ノ木古墳を守った寺院	奈良県立法隆寺国際高等学校
蒲生君平 ～宇都宮の隠れた偉人～	栃木県・宇都宮文星女子高等学校
遠江国の気質 ～大河ドラマ「女城主 直虎」から探る～	静岡県・聖隷クリストファー高等学校
井伊谷地区におけるアフター直虎の在り方について ～浜松湖北高校と浜松市地域遺産センターとの連携を通して～	静岡県立浜松湖北高等学校
瀬戸焼からたどる高祖父・黒田政憲の足跡	愛知県・国立大学法人愛知教育大学附属高等学校
教会の分布と鉄道網拡大の関連性	東京都・女子聖学院高等学校
霧社事件と原勝治	神奈川県立秦野曾屋高等学校
新選組を生んだ土地・日野 ～幕末の英雄たちを支えた天然理心流～	東京都・八王子実践高等学校
桜の下に埋まるモノ ～おとめと桜とお城山～	神奈川県・川崎市立川崎高等学校
筒井順慶と「洞ヶ峠」	奈良県立郡山高等学校
徳川家康と伝統工芸の関係	静岡県・静岡雙葉高等学校
港区が「港区」ではなかった時代 ～芝・赤坂・麻布3区の特徴とその結合について～	東京都・普連土学園高等学校
芥川と横須賀	神奈川県・横須賀学院高等学校
日本点字の父、石川倉次が残した理化学に関する日記 ～明治に探る、AI時代を生き抜く手掛かり～	千葉県・市原中央高等学校
小野小町伝説 ～なぜ岡山に小野小町の墓があるのか～	岡山県立倉敷鷺羽高等学校
池田光政候の儉約令と庶民の食生活 ～「ばらずし」の起源と発展を探る～	〃
御坊市内における社寺の変遷 ～地域社会への影響を考える～	和歌山県立日高高等学校
八咫鳥の正体	〃
釜石市の艦砲射撃について	岩手県立釜石高等学校
橋野鉄鉦山について	〃
伝統芸能について	〃
遠野南部ばやしについて	〃
さんさ踊りと三ツ石神社の関係	〃
伊能嘉矩について	〃
これだから歴史はおもしろい ～桶狭間の戦い～	愛知県・国立大学法人愛知教育大学附属高等学校
石和武田氏の没落と甲斐武田氏の成立についての一考察	神奈川県立厚木清南高等学校
松阪が生んだ偉人の「神の道」についての思想とは	三重県・英心高等学校
姫路城の外堀と外堀川について	兵庫県立姫路工業高等学校
大阪から橋が消えた理由	大阪府・大阪明星学園明星高等学校
北方領土を歴史的考察	山口県立大津緑洋高等学校
慰霊のかたち ―慰霊行事を通して戦争を考える―	埼玉県・昌平高等学校
因幡の傘踊りの普及について	鳥取県立八頭高等学校
東日本大震災 津波被災地 福島県新地町の大津波伝承について	福島県立新地高等学校
地域史料の保存・活用とファミリーヒストリー 本校寄託史料「山田家文書」をてがかりとして	埼玉県・開智高等学校（中高一貫部）
佐賀県鳥栖市の田代売薬について	福岡県・福岡大学附属大濠高等学校
中国人強制連行と慰霊 ～静岡県西伊豆町仁科鉦山を事例に～	静岡県・三島学園知徳高等学校
アイヌ民族の過去と現在を辿る ～今井ノリ子氏の活動を元に～	〃
南信州 中央構造線と武田信玄	岐阜県・鶯谷高等学校
日本人はなぜアジアへの戦争へと向かったか ～養田胸喜から見た思想対立と戦争～	熊本県立八代高等学校
広田弘毅について	福岡県立城南高等学校
愛宕神社の歴史	〃
地域の遺跡から学ぶ、教科書に載っていない歴史	〃

研 究 タ イ ト ル	高等学校名
語り継がれる福岡の歴史	福 岡 県 立 城 南 高 等 学 校
福岡の交易の歴史	//
元寇 ～日本の勝因とは～	//
日本のトイレ	//
伊都国歴史博物館 ～糸島の歴史～	//
太宰府天満宮から知る菅原道真と大宰府の歴史	//
近世楠公墓の展開とその様相	東京都・N高等学校（代々木キャンパス）
浜田地震の被害について	島 根 県 立 浜 田 高 等 学 校
長崎県壱岐市馬立（もうたる）海岸遺跡の研究	長 崎 県 立 壱 岐 高 等 学 校
立花宗茂はなぜ「西国無双」と呼ばれたか ～立花宗茂の戦い・家臣団・居城からその強さに迫る～	福 岡 県 立 山 門 高 等 学 校
神仏習合の実態 ～宇佐八幡とその周辺の神社仏閣～	東 京 都・麻 布 高 等 学 校
黒田如水と関ヶ原 ～人生最後の戦いに如水は何を考え、戦ったのか～	福 岡 県 立 修 猷 館 高 等 学 校
武蔵国府は在地武士層にとって魅力的でなかったのか ―多摩地域の地理的特徴に注目して―	神 奈 川 県・聖 光 学 院 高 等 学 校
四神相応の観点から導き出す備後国府政庁の位置	広 島 県 立 府 中 高 等 学 校
土崎空襲について	秋 田 県 立 秋 田 高 等 学 校
二本松少年隊の実像	宮 城 県・尚 綱 学 院 高 等 学 校
後鳥羽上皇伝説の軌跡を追って ～三次から庄原の伝説を中心に～	広 島 県 立 日 彰 館 高 等 学 校
墓石から過去の信仰形態を探る ～群馬県立桐生高校地歴部における、近世墓地フィールドワーク～	群 馬 県 立 桐 生 高 等 学 校
『地誌編輯材料取調書』に読み解く岩出村の富士山信仰	栃 木 県 立 学 悠 館 高 等 学 校
水戸の下市 ～旧町名から考える～	茨 城 県・常 盤 大 学 高 等 学 校
徳川光圀の政策について	//
忘れられた阿部家 ～水野勝成の名声の陰に～	広 島 県・福 山 市 立 福 山 高 等 学 校
薬師寺再建からわかること	//

※個人情報に配慮して、研究タイトルと高等学校名のみを記載しています。

〈 審 査 委 員 〉

清水 哲郎（奈良大学 学長・審査委員長） 〈農学博士〉 研究テーマ・領域：専門分野は消費経済学、食料経済学、行動計量学。主に、食品にかかわる分野の消費現象や消費者行動、またマーケティング戦略を行動計量学的視点から研究している。さらに、世界の食料情勢や食料需給問題についても計量経済モデルによって分析を行っている。	木田 隆文（奈良大学 准教授・日本近現代文学） 〈博士（文学）〉 研究テーマ・領域：小説家武田泰淳を中心とする、昭和期の文学と文化を研究している。特に最近は、戦時下の上海、及びその周辺都市で展開した日本語文学の実態解明に取り組んでいる。また、戦中戦後の言論統制にも関心を寄せている。
関根 俊一（奈良大学 副学長・日本美術史、日本工芸史） 研究テーマ・領域：仏教のさまざまな法会・儀式において、仏像がどのような意味や規則を背景として造られ、工芸品がどのように用いられていたのか、また時代の変遷によってどのように姿や形を変えるのかについて考えている。	森川 正則（奈良大学 准教授・日本近現代史） 〈博士（法学）〉 研究テーマ・領域：20世紀日本の政治外交史・政治経済史を中心に学んでいる。最近は主に戦間期（大正期・昭和戦前期）における日本の「経済外交」の諸相と展開について調べており、今後は戦後も視野に入れていきたいと考えている。
小林 青樹（奈良大学 教授・考古学・実行委員長） 〈博士（文学）〉 研究テーマ・領域：縄文時代や弥生時代など、先史時代の人々の生活や技術の復元を研究している。また稲作や金属器の起源を追求するため、東アジアの考古学も研究している。	山崎 岳（奈良大学 准教授・中国明代史、東アジア海域史） 〈博士（文学）〉 研究テーマ・領域：16世紀中国沿海部の地方社会・政治権力・軍制機構・国際関係を主な研究対象とし、東アジア諸国の歴史的展開をこれと有機的にかかわるものとして再構築することを目指している。
池田 安隆（奈良大学 教授・自然地理学） 〈理学博士〉 研究テーマ・領域：地殻変動による地形形成過程に関する研究や、日本列島などの沈みこみ型造山帯における地殻歪みの蓄積程と超巨大地震に関する研究を行っている。また、自然災害に人類がどのようにかかわってきたかを考えている。	山本 尚子（奈良大学 准教授・英語学、言語学） 〈博士（文学）〉 研究テーマ・領域：特に語用論を研究領域とする。関連性理論という枠組みを用いて、トートロジー発話の解釈プロセスの解明を中心に、人と人が行うことばを用いたコミュニケーションがどのように成り立っているかを研究している。
新宮 一成（奈良大学 教授・精神医学、精神病理学、精神分析学） 〈医学博士〉 研究テーマ・領域：生命体としての人間が言語的に自らを形成し、社会活動を営むにいたる過程に孕まれる、無意識の構造の発生機序を解明し、この構造が精神の病理や創造行為を生みだすありさまを、精神分析的臨床実践を通じて探究する。	松本 大（奈良大学 講師・日本中古文文学） 〈博士（文学）〉 研究テーマ・領域：平安文学作品の注釈書や享受・受容史について研究している。特に『源氏物語』の注釈書を対象の中心とし、南北朝から室町期にかけての注釈の実態・過程・意識などを探っている。
土平 博（奈良大学 教授・歴史地理学） 研究テーマ・領域：近世大名の領地、陣屋とその町の形態を明らかにすることが研究テーマである。また、都市とその周辺農村の関係やその変化についても関心を持つ。そのほか近世絵図・近代地図にも興味を持っている。	門司 雅之（奈良県教育委員会事務局 学校教育課 指導主事） 略歴：奈良県立高等学校の地理歴史科の教諭として20年間勤務の後、奈良県観光局にて記紀万葉プロジェクト推進係主査を経て現職。
中原洪二郎（奈良大学 教授・国際社会学、社会意識論） 研究テーマ・領域：社会学や社会心理学の理論と方法を用いて世界の民族と文化を巡る社会現象を研究すると同時に、マイノリティ研究の知見を活用する形で地域活性化・地域振興など、地域に密着した調査研究も実施している。	

第11回（2017年） 全国高校生歴史フォーラム 発 表 集

編集・発行 第11回全国高校生歴史フォーラム実行委員会
〒631-8502 奈良市山陵町1500 奈良大学 広報室内
TEL 0742-44-1251

印刷 共同精版印刷株式会社
〒630-8013 奈良市三条大路2丁目2-6

奈良で学ぶ贅沢 NARA UNIVERSITY



主催／奈良大学・奈良県